栃木県埋蔵文化財調査報告40集

国道等道路改良事業地内遺跡発掘調査報告書

三輪遺跡
大桑遺跡
星の宮A遺跡
星の宮B遺跡

1981年3月

栃木県教育委員会

序

近年の公共事業をはじめとする地域開発の進歩に伴い，埋蔵文化財の保護，保存については取扱い上困難な問題に当面することが少なくありません。先人から引継いだ貴重な文化遺産を後世に伝えるという基本的な観点から，関係方との調整に努めております。その結果，昭和53・54年度道路改良事業計画地内に所在する三輪，大桑，星の宮A及び星の宮B遺跡の四遺跡について，それぞれ工事施行前に記録・保存をはかる発掘調査を実施いたしました。

このほど，これら四遺跡の調査結果の整理研究が終了し，報告書として公刊する運びになりました。文化財保護のための資料として，関係各方面において御活用いただければ幸甚です。

調査に当たっては，県土木部道路建設課，烏山，日光，芳賀の各土木事務所並びに小川町，今市市，益子町の各教育委員会にいろいろ御協力いただきました。報告書刊行に当たり厚くお礼申し上げます。

昭和56年3月

栃木県教育委員会教育長

渡　辺　幹　雄

国道等道路改良事業地内遺跡発掘調査報告書

目　次

序
・土木部道路建設に係る埋蔵文化財の事前協議について…… 1
・三輪遺跡…… 5
・大桑遺跡……21
・星の宮Ａ遺跡……41
・星の宮Ｂ遺跡…… 137

土木道路建設に係る埋蔵文化財の事前協議について

第７５回国会において文化財保護法の一部を改正する法律が成立した。これは昭和50年７月１日法律第４９号をもって公布され，同年10月１日から施行された。この法律改正により土木工事等を施行する場合の事前協議が義務づけられた。

以来，法律改正による事前協議の制度化により，教育委員会と関係機関との間による話し合いが持たれている。しかし本県においては法律改正以前にも土木部の道路建設予定地の遺跡存在の有無についての照会は少ないながらもなされていた。

例えば，塚山古項群内の宇都宮市西川田所在の塚山西古墳と塚山南古墳の間をとおる都市計画街路で，国道４号と県道宇都宮，栃木線を結ぶことが計画された。この計画路線は県総合運動公園に南接し，昭和55年開催の「栃の葉国体」のメイン道路に繋ぐ計画であるが，この計画路線内にある遺跡の調査依頼が土木部から教育委員会（文化財保護課・現文化課）になされたのは昭和46年までさかのぼる。

この計画路線内では塚山西古墳の前方部，塚山南古墳の後方部にかかることが調査の結果判明したため，土木部との協議を行い，削平される部分の古墳については発掘調査を実施し記録保存を計ったのちに工事を実施し，道路は古墳群の景観を考えトンネルでとおすことで合意に達した。①

また昭和50年度から事前協議がなされていた宇都宮都市計画街路３・４・１宇都宮，栃木線内に所在する車塚南遺跡（壬生町所在）についても，確認調査が昭和51年６月に実施され，翌52年６月には壬生銭渕遺跡②神代遺跡の発掘調査がなされた。さらに本県の考古学史上最大の業績とされている下野国府跡（県庁内郭域）の発見も，昭和50年５月の県道栃木・宇都宮線のバイパス建設に当たっての土木部と教育委員会との協議にその端を発するものであった。下野国府跡の発掘調査は，昭和51年11月下野国府想定地の一つである栃木市惣社町において発掘調査に着手したが，この調査はその後，栃木市田村町の国府想定地に発掘地区を変更し現在もその調査が継続されており，多大な成果をおさめつつある。

多くの遺跡について土木部との事前協議により記録保存の発掘調査が実施される方向にあった一方，道路建設工事中に発見される遺跡も相ついだ。昭和50年６月に県道真岡・西小高線の益子町長堤地内の道路改修工事中に遺跡の発見がなされ緊急に発掘が実施された。翌昭和51年６月にも国道293号の道路改良工事中に土器等の出土をみ，緊急発掘調査を実施し記録保存を行った。

この様に，教育委員会との事前協議にのぼり，詳細な準備，検討，協議をうけて発掘調査のなされる遺跡がある一方，工事中に遺構・遺物の出土が報じられ，工事の進行に影響をおよぼすため短期間の調査による記録保存で，調査を終了させなければならない遺跡があるなど，遺跡に対する取り扱いにアンバランスが認められていた。

このため昭和50年7月の法律改正による事前協議の重要性を再認識する意味において，各係各部局，各課との連絡を密にする方向で打ち合せ会等の開催を実施した。この中で土木部との協議において工事中に遺跡が発見される場合の対応が特に困難性を持つことが指摘された。工事中の遺跡発見は，発掘調査期間の設定により工事そのものの延期が余儀なくされると同時に費用の予算化が困難であるとのことであった。一方，教育委員会としても工事中の遺跡発見に対しては，体制が十分に整備されていないためもあり，緊急調査を実施するための人員（発掘担当者）の確保が困難であった。

これら多くの困難を伴う工事中の遺跡発見のケースを最小限に押さえるために，昭和52年度から土木部の協力を得て教育委員会文化課が主体となり全県下の道路建設予定地内の遺跡分布調査を実施している。これは昭和51年度に行っていた単発的な分布調査を発展させ集中化する方向に持っていったものである。

昭和52年度は10月に，昭和53年度は9月に昭和54年度は10月に，昭和55年度も10月にそれぞれ全県下一斉の分布調査を実施した。特に昭和54年度の分布調査では市町村道（市町村が工事施行）建設予定地内で発見される遺跡の増加が認められたため，その反省に立ち昭和55年度の分布調査は市町村道と県道・国道に区分し，市町村道関係には市町村の道路建設担当課と教育委員会の同行をもって実施した。その結果，昭和55年度までに道路建設予定地内に所在する遺跡が表1のとおり知られた。

昭和51年度以降の分布調査で判明した道路建設予定地内に所在している遺跡のうち，土木部との事前協議により発掘調査を実施したものは，昭和53年度に県道宇都宮・栃木線改良工事と宇都宮環状線新設に伴う，辻の内遺跡（宇都宮市西川田所在）の第1次・第2次の2回の調査，国道293号改良工事に伴う，三輪遺跡（小川町三輪所在）の発掘調査，昭和54年度には県道宇都宮・烏山線の宝積寺バイパス建設に伴う石神遺跡（高根沢町石神所在），町道北中・星の宮線改良工事に伴う星の宮A遺跡（益子町星の宮所在），国道121号大桑バイパス建設に伴う大桑遺跡（今市市大桑所在），昭和55年度には県道栃木・藤岡線の改良工事に伴う川連城跡（大平町川連所在），町道北中・星の宮線改良工事に伴う星の宮B遺跡（益子町星の宮所在）の調査を実施し，多大な成果をあげている。同時に工事着工年度の前年度に遺跡発掘調査を終了するというひとつのパターン化の方向が見い出されてきているが，この様な前年度調査の方向は徹底した事前協議を定式化した結果によるものであるといえよう。

事前協議制の定着により，道路建設中に遺跡発見が報じられる数の激減をみるにいたっている。と同時に埋蔵文化財発掘調査による工事遅延も少なくなり，また教育委員会でも年間発掘スケジュールの内に調査をくみ入れることができ人員配置に緊急を要する状況を考慮する必要性が少なくなったなどの大きなメリットが見られる。

しかし，現在進行させている事前協議制をさらに充実させる意味においても，今後さらに，情報の交換を密にすると同時によりよい方向を検討して行く必要があると考えられる。

① 栃木県埋蔵文化財調査報告　第32集「塚山古墳群」　昭和54年10月　栃木県教育委員

会

詳細については第１章発掘調査の概要を参照されたい。

② 栃木県埋蔵文化財報告第20集　「壬生銭渕遺跡」

詳細については発掘調査の概要を参照されたい。

三　輪　遺　跡

例　言

1　本書は一般国道293号道路改良工事（小川町三輪地区）に伴う三輪遺跡発掘調査報告書である。

2　発掘調査および報告書作成までの費用は，県土木部の負担による。調査と報告書作成は，県教育委員会が主体となり実施した。

3　本書の執筆は，Ⅰ—(1)を川原由典，Ⅰ—(2)を中山晋，Ⅰ—(3)，Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを初山孝行が分担した。

4　本書の編集は，上記の川原・中山・の協力を得て初山が行なった。

5　図版作成などは上記の者が協力して行なった。

6　発掘調査にあたっては，小川町教育委員会・地元の方々に多大な協力を得た。記して謝意を表したい。

本文目次

Ⅰ　発掘調査の経緯と経過……8
　1　調査に至る経過……8
　2　調査の方法……9
　3　調査日誌抄……9
Ⅱ　遺跡の立地と周辺の遺跡……11
Ⅲ　検出された遺構と遺物……13
　1　12号遺構……13
　2　その他の出土遺物……13
Ⅳ　まとめ……16

挿図目次

図―1　三輪遺跡地形図・グリッド配置図……10
図―2　三輪遺跡周辺の遺跡図……12
図―3　12号遺構実測図……14
図―4　出土遺物実測図……16

図版目次

図版1・1　遺跡遠景……17
　　2　遺跡近景……17
図版2・1　遺構検出状況（1～26グリッド）……18
　　2　12号遺構遺物出土状況……18
図版3・表採石器……19

Ⅰ　発掘調査の経緯と経過

1　調査に至る経過

一般国道293号の道路改良工事（小川バイパス）区内の埋蔵文化財の取り扱いについては，昭和53年9月に行った全県下一斉の道路建設予定地内の分布調査により，仲町遺跡（縄文時代）三輪遺跡（奈良時代），温泉神社北遺跡の3遺跡が存在することが判明しました。これら3遺跡のうち，用地買収が既に終了しており，昭和53年度の第4四半期に工事を予定している三輪遺跡が含まれる区画の発掘調査を早急に実施していただきたいとの申し入れが，分布調査の実施当日に口頭によって烏山土木事務所より伝えられた。しかし当課としても他の調査をかかえここで新しく三輪遺跡の発掘調査を実施することは困難な状況ではあったが，三輪遺跡の一部は既に発掘調査が昭和29年11月と昭和40年2月，昭和42年2月の3回にわたって実施されており，昭和29年11月の調査地点の北側を一般国道293号の小川バイパスが通過することや，3回の調査によって和泉期，鬼高期の住居跡が多数検出されていた。これらの事情と道路工事予算が昭和53年度当初に組まれており，工事延期も不可能とのことであった。このため文化課，土木部道路建設課，烏山土木事務所の関係各課による協議を再三にわたって開催し，文化課が緊急調査を実施することとし，調査は土木部道路建設課，烏山土木事務所の全面的協力を受けて，昭和53年10月30日より開始することで合意をみた。これにより，昭和53年10月4日付け，道建第142号で三輪遺跡発掘調査の依頼が土木部長より教育委員会教育長あてになされた。これをうけて当委員会では，昭和53年10月7日付け，文化第454号で三輪遺跡の発掘調査を実施する旨の通知を土木部長あてに提出した。また小川町教育委員会に対しても発掘調査の協力依頼を通知し，すべての準備を終了した。

調査対象面積は5000㎡で，調査期間は昭和53年10月30日より昭和54年2月5日までの期間内で65日間の調査を予定したが，三輪遺跡の北限を越える位置となり，遺構，遺物の出土もわずかであったため当初の予定期間をまたずに昭和53年12月22日をもって調査を終了することとなった。

調査体制は下記のとおりである。

調査主体者　栃木県教育委員会

調査協力機関　栃木県土木部

烏山土木事務所

小川町教育委員会

調査担当者　川原由典（文化課）

　　中山　晋（　〃　）

　　初山孝行（　〃　）

なお三輪遺跡の発掘調査に要した費用はすべて土木部の負担によるものである。

2　調査の方法

調査対象地区は一般国道293号の道路改良工事（小川バイパス）区内にあり，工事用に設定されている道路センター杭の№109～№118区間に該当する。調査面積は5000㎡である。

グリッドの設定方法については，本来，主軸方向を南北に設定すべきであるが，調査地区が道路（幅20m）敷地内に限定されていることと，道路が南東方向から北西方向に建設されるため，20m等間に設定されている道路センター杭を基準点として，4m×4mのグリッドを設定し調査を実施した。

グリッドはセンター杭方向を便宜上東西ライン（1～49）とし，道路幅を南北ライン（A～S）とした。南北ラインは一部隅切り部分があるため，A～Sとしたが，実際発掘を実施したのはE～Mラインである。（グリッドの呼称は，例えばE－7グリッドである）

調査は全面発掘を目的として実施したが，東西ラインの1～26グリッドまで調査した段階で遺構・遺物が検出されなかったため，37～49グリッドについては市松型に掘り込みを行い，遺構が検出された場合は周囲を拡張するという方法をとった。

3　調査日誌抄

10月30・31日　道路のセンター杭を基準に4×4mのグリッドを設定。

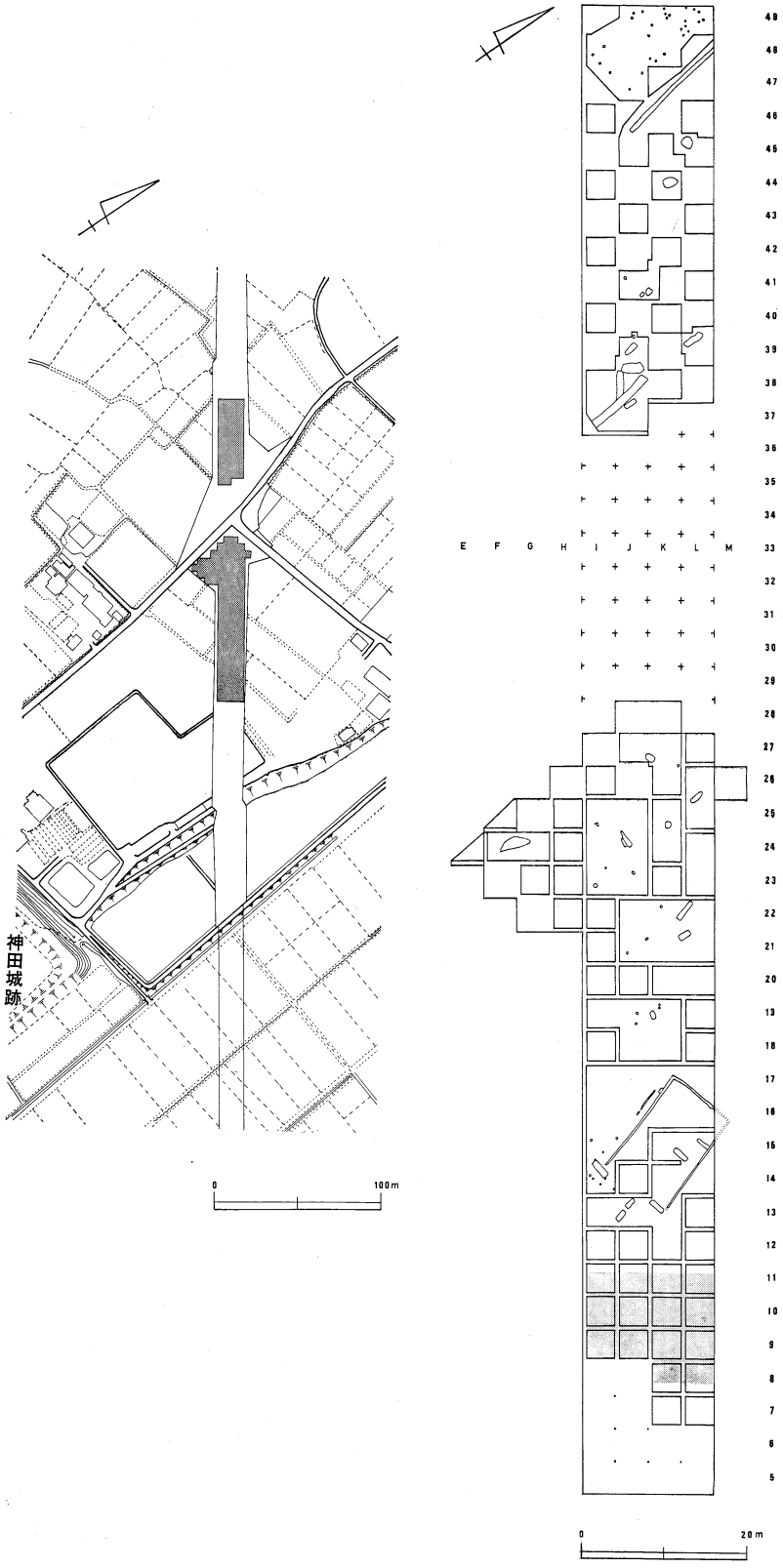
11月1～4日　現地に作業員集合。埋蔵文化財の重要性を十分に理解してもらい，排土位置の設定作業より開始。L－22～25・K－23～26グリッドの粗掘りおよび精査を行い，遺構検出に努める。遺構確認面（ローム上面）まで約50cm前後と比較的浅いため作業が早く進む。方形・円形の落ち込みが検出されたが性格は不明。

11月6～10日　K－7～22・L－7～21グリッドの粗掘りおよび精査を行い，遺構検出に努める。K・L－13～17グリッドにかけて「匚」字型になる溝状遺構が検出されるも，性格は不明。K・L－12グリッドで黒色土の落ち込み検出。落ち込みはH－12グリッドまで続くことを確認。

11月11～18日　E－24・F・G－23～25・H・I－22～25・J－21～24グリッドの粗掘りおよび精査を行い，遺構検出に努める。J～I・グリッドで直径約30～50cmの小ピット数基が検出された。F・G－25グリッドでは平面形が三日月状の遺構が検出された。Kライン北壁セクション実測。小ピット群の平面実測。ピットの配置は不規則であった。

11月20～25日　I－9～21・J－10～20グリッドの粗掘りおよび精査を行い，遺構検出に努める。調査区南側になると遺構確認面まで約30mと浅くなり作業がより早くなる。I－14グリッドでは平面形が長方形を呈する土坑を検出。表土層中より初めて縄文式土器片が数片出土。発掘調査風景撮影。

11月28～30日　I～L－9～13グリッドの粗掘りおよび精査を行い，遺構検出に努める。K・L－12グリッドで確認された遺構の続きを検出。大溝と思われ深掘りを行う。I～L－9ライン・I－9～13ラインのセクション実測。グリッド全景写真撮影後，不要なベルトを除去する。



図—1　三輪遺跡地形図　グリッド配置図

12月1～7日　調査区内に検出された各遺構の掘り方を確認し，埋土の除去作業を開始。図取り作業と各遺構の完掘写真撮影を行う。№12の小土坑底面より，土師器甕形土器胴下半部が出土した。I～L—37～49グリッドを設定後，市松型に粗掘りを開始。I・K—38・40・42・44，J・L—37・39・41・43・45グリッド粗掘り完了。

12月8～12日　I・K—44・46・48，J・L—45・47・49グリッドの粗掘りおよび精査を行い，遺構検出に努める。J—37～49グリッド中央ライン，I～L—39・44グリッドラインのセクション実測。遺構は溝状遺構と方形の落ち込みが検出された。

12月13～19日　遺構確認作業後，一部グリッドの拡張。検出された遺構の埋土除去作業。図取りおよび遺構完掘写真撮影。

12月20～22日　調査区全景写真撮影。器材の撤収を行う。

II　遺跡の立地と周辺の遺跡

三輪遺跡は小川町の中心街よりやや南の水田地帯の中で，那珂川より西約1㎞に位置する。

小川町を地理的に見ると那須野ヶ原複合扇状地の南部にあたり，北は箒川に，東は那珂川に接し，西には箒川の南から連なる喜連川丘陵がある。那珂川と喜連川丘陵の間は西から山崎面・小川面・上川原面と区別される発達した河岸段丘が形成されており，それらの上には数多くの遺跡が存在している。

本遺跡は河岸段丘のなかの小川面上に営まれた古墳時代の遺跡である。以下は時間的に本遺跡と関係の深い周辺の遺跡を図示し，概要を説明したものである。

1，三輪遺跡

2，那須官衙跡　昭和42年4月と12月・昭和43年12月・昭和50年12月の4次にわたり調査が行われ，大規模な官衙跡であることが確認された。国指定史跡。

3，梅曽大塚古墳　昭和39年12月に調査が実施された。前方後円墳（全長37m）

4，駒形大塚古墳　昭和49年11月に調査が実施された。西面して構築された古墳時代前期の前方後方墳（全長64m）。画文帯四獣鏡が出土。付近には数基の方墳がある。

5，仲町（仲町平）遺跡　石器（先土器時代）と縄文・土師散布地。国道293号改良工事に伴い今後調査が予定されている。

6，升ノ内古墳

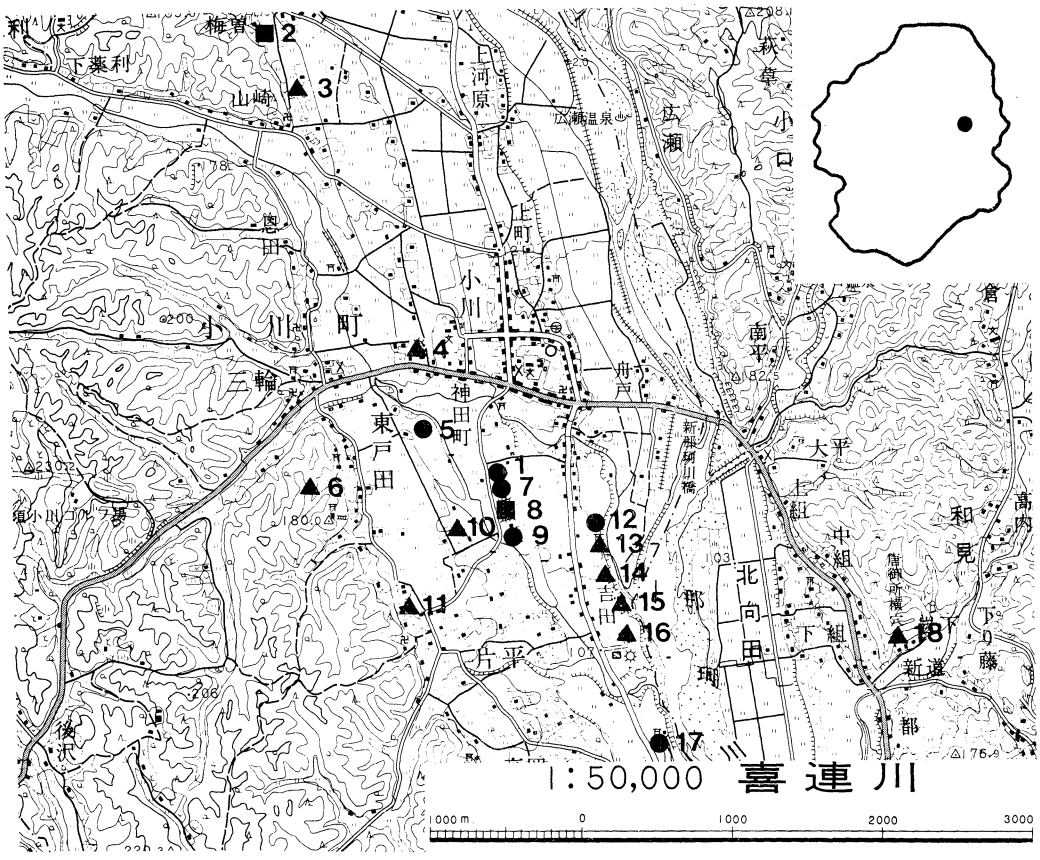
7，三輪遺跡　昭和29年11月と昭和40年2月の2次にわたり調査が実施された。1次調査では和泉期から鬼高期の住居跡4軒，2次調査では和泉期の住居跡数軒が検出された。

8，神田城跡　1125年に築城されたと言われる方形館。

9，神田城南遺跡　昭和42年8月に調査が実施された。古墳時代中期から後期頭初の集落跡で，石製模造品が採集されている。

10，岩谷内横穴

11，首長原古墳　前方後円墳



図—2　周辺の遺跡

12，温泉神社北遺跡　土師散布地。国道293号改良工事に伴い今後調査が予定されている。

13，温泉神社古墳　前方後方墳。後方部が削平を受けた後，剣・短冊形鉄斧・土師器等が出土している。昭和48年に後方部の範囲確認調査が実施され，墳長約50*m*と判明。

14，観音古墳　方墳

15，那須八幡塚古墳　昭和28年4月に調査が実施された。古墳時代前期の前方後方墳（全長68*m*）。舶載鏡（夔鳳鏡）出土。

16富士山古墳　古墳時代前期とされる方墳（平面形・東西約25*m*，南北20*m*）

17，谷田遺跡　昭和44年の2月から3月にかけ2次にわたり調査が実施され，和泉期とされる住居跡6軒が検出された。

18，唐御所横穴　（鞍頭町岩下）国指定史跡

以上，小川町を中心に主な遺跡を上げたが，他にも那珂川と箒川の合流する同町と湯津上村や対岸の馬頭町には，古墳時代から歴史時代に渡る重要な遺跡が非常に多い。図示できなかったものとして，那須官衙跡との関係が注目される浄法寺廃寺や，本遺跡の北約7～8*km*には那

須国造碑と上・下侍塚古墳が存在する。

これらより本地域は前方後方墳が集中している事や，官衙跡とそれに関係する遺跡が存在する事より，古代那須地方の中心地であったことがうかがわれる。

文献

(1) 「小川町誌」　小川町誌編集委員会　昭和43年12月

Ⅲ　検出された遺構と遺物

遺構は土師器甕形土器を出土した12号遺構のみを説明することにした。

1　12号遺構（第３図・図版４）

調査区のほぼ中央・表土下約30㎝のローム面で確認された。遺構の平面形は楕円形（直径約45×35㎝）を呈し，円筒状に約20㎝掘り込まれている。底面は鍋底状である。覆土はローム粒を多量に含むややしまりの悪い黒色土が一層のみであり，埋め戻されたものと思われる。遺物は遺構底面より土師器の甕胴下半部が出土しただけである。

遺物（４図―１）　土師器の甕形土器胴下半部である。その胴部最大径は胴中位かややそれより下になるものと思われる。器壁は薄い。調整は外面―斜位のヘラ磨き，内面―横位のヘラ撫で，底面―不定方向のヘラ撫でが施されている。底部は内側をヘラ削りしているため周囲がドーナツ状に突出し，そこに木葉痕が残っている。胎土は砂粒を多量に含む。色調は内外面黒褐色を呈す。焼成は不良であり，胴部内外面の一部には煤の付着がみられる。本土器は古墳時代中期頃のものと思われる。

2　その他の出土遺物（第４図２～８）

2，土師器高坏脚部　円筒形の脚部のみ残存。調整は外面に上位から下位へ幅広のヘラ磨きを一回で施す。裾部も縦方向のヘラ磨きを施す。胎土は砂粒を含み，色調は赤褐色を呈す。

3，縄文式土器，深鉢口縁部破片　口縁直下よりほぼ全面にＬＲの縄文を施す。器面は赤褐色を呈し，焼成はやや不良。胎土は砂粒を多く含む。

4，縄文式土器，深鉢破片　器面にＲＬの縄文を施文後，細い沈線を垂下させる。内外面黒色を呈し，焼成は良好。胎土は白色の砂粒と雲母を若干含む。

5，縄文式土器，深鉢破片　器面にＲＬの縄文を施文後，沈線を垂下させる。内外面黒色を呈し，焼成は良好。胎土は微砂粒と若干雲母を含む。

6，縄文式土器，深鉢破片　器面に不規則な斜行沈線を施す。内外面赤褐色を呈し，焼成は良好。胎土は微砂粒を若干含む。

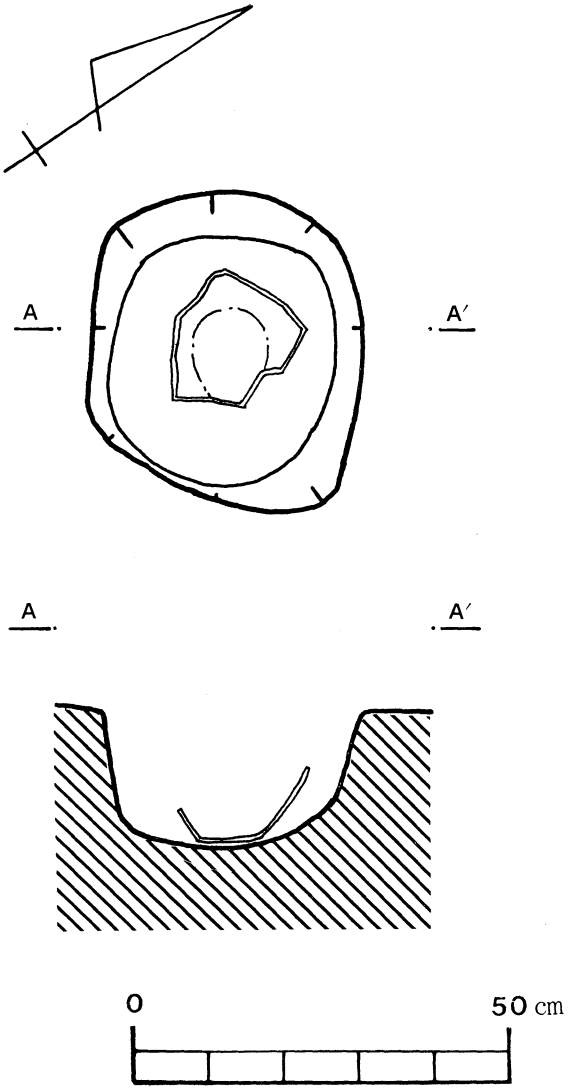
7，縄文式土器，深鉢口縁部破片　内面の口唇部直下に一条の沈線を施す。外面は口縁の下に平行する２本の刻み目をもつ隆線を廻らす。その下に口縁部と頸部を区画する一条の沈線が廻

り，胴部にかけて斜行縄文を施文する。器壁は薄く，内外面黒色を呈し，焼成は良好。胎土は微砂粒と雲母を含む。

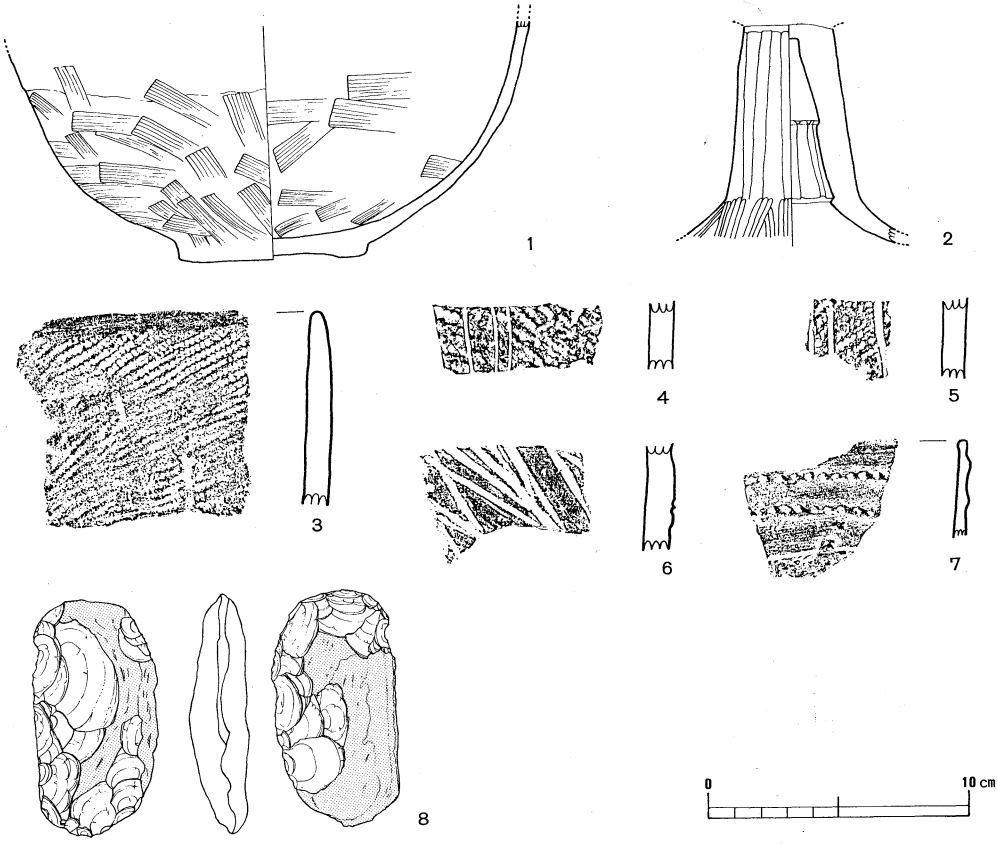
8，打製石器　表採。刃部は粗雑な剥離によって作られる。表裏面に自然面を多く残す。長さ9.2㎝・幅4.7㎝・厚さ2.2㎝ 珪質流文岩。形態は石斧に似る。

2は調査区南側の谷底面より出土。時期の詳細は不明だが古墳時代のものと思われる。

3～7は表土層より出土。縄文時代中期後半から後期のものである。



図―3　三輪遺跡12号遺構



図—4　三輪遺跡出土遺物

Ⅳ　ま　と　め

以上が発掘調査をした結果，出土した主な遺構と遺物である。遺跡は集落跡の様なものではなく遺構・遺物も非常に少なかった。E～L—7～27G内で12号遺構以外に検出された落ち込みは，円形土坑2基，長方形土坑10基，三日月形土坑1基，溝状遺構1条，小ピット群が，I～L—37～49G内では円形土坑3基，長方形土坑5基，溝状遺構2条，小ピット群がそれぞれ検出された。しかし円形・長方形土坑の掘り込みは浅くローム面より約5㎝～20㎝程度であり深いものは円形土坑のうち深さ約50㎝のものが2基検出されただけである。覆土の状態はほとんどが黒色土層のものと，黒色土にロームブロックが混入したもので柔らかく埋戻したようであり，遺物の出土した遺構もなく，時期・性格不明である。三日月形土坑は長径約3.7m×短径約1.5mで深さ約80㎝と大型だが底面は狭く壁面の凹凸も激しい。覆土はロームと黒色土が逆転しており，人為的に掘り込まれたものではないと思われる。溝状遺構は3条検出されたが3条とも掘り込みは10㎝前後と浅く，調査区南側で検出された1条は幅約30㎝～40㎝のものが

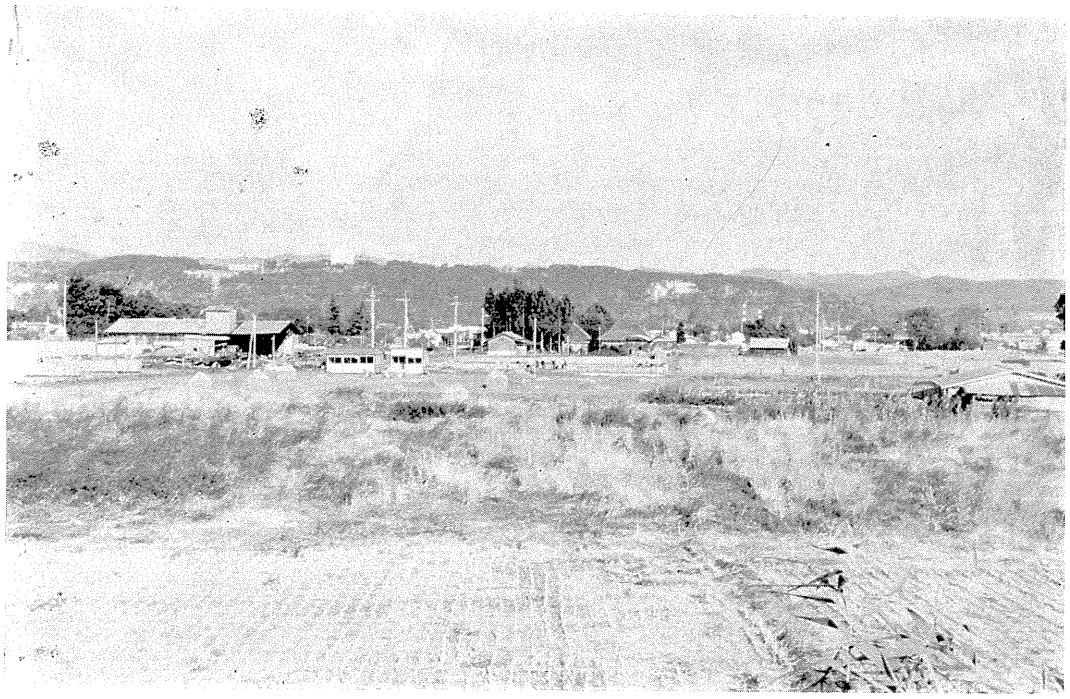
幅約10mで「⊏」字状に廻っている。又調査区北側で検出された2条は幅が約50cmと1mで東西に掘られており，出土遺物もなく時期・性格は不面だが，水田の境や排水の溝等ではないかと思われる。小ピット群は2群とも径約20cm～40cmの小ピットが数基ずつ検出されたが，不規則で掘立柱建物にはなりにくかった。以上検出遺構の概略を記したが，12号遺構以外は出土遺物はなく，時期と性格については不明である。

なお今回の調査区と調査区南の神田城跡の間約150mの地区は昭和29年11月と昭和40年2月の2次にわたり小川町古代文化研究会によって発掘調査が行なわれている。この2回の調査で和泉期から鬼高期の住居跡数基が検出されている。しかし今回の調査区がすぐ北側であったにもかかわらず住居跡が検出されなかったことなどから，集落は今回の調査地点まで延びていなかったことを意味し，これは調査区南側のI～L－8～11グリッドで確認された深さ約1.5mの緩やかな傾斜をする谷が集落の北限になっていたことと符合する。このことは谷内の覆土がレンズ状の自然堆積を示していることと，底面より土師器高坏脚部（4図－2）が出土していることにより，谷はこの土師器が廃棄された時期までは存在していたことが知られるからである。

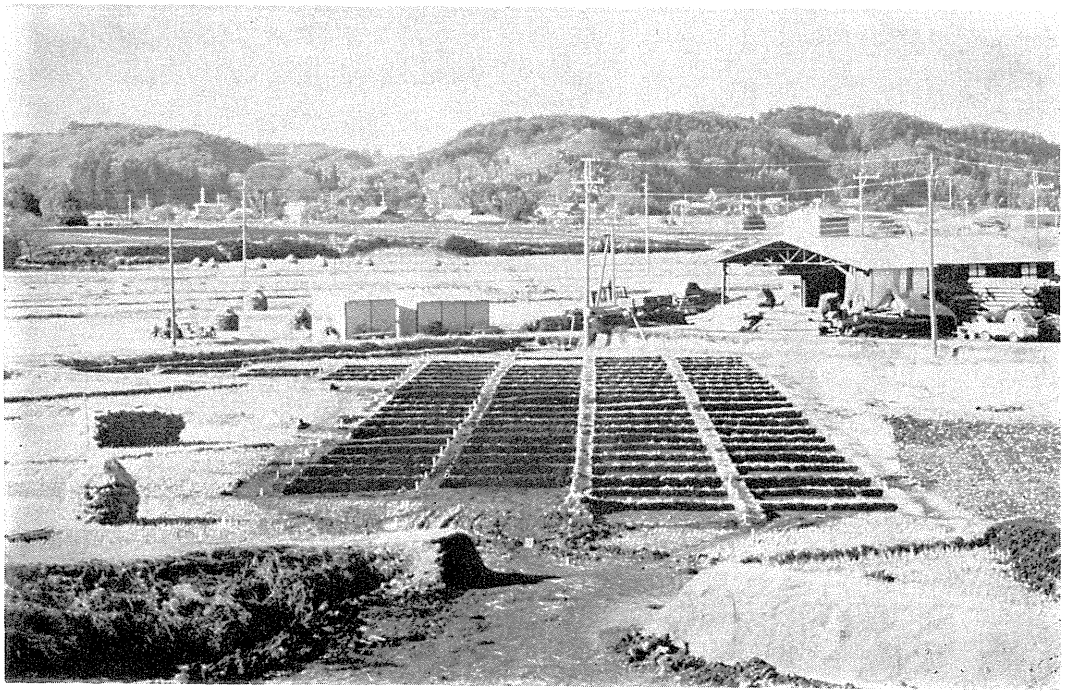
以上より今回の調査は，前回の調査で検出された住居跡群の北限がおさえられた意味において成果が上った。

文献

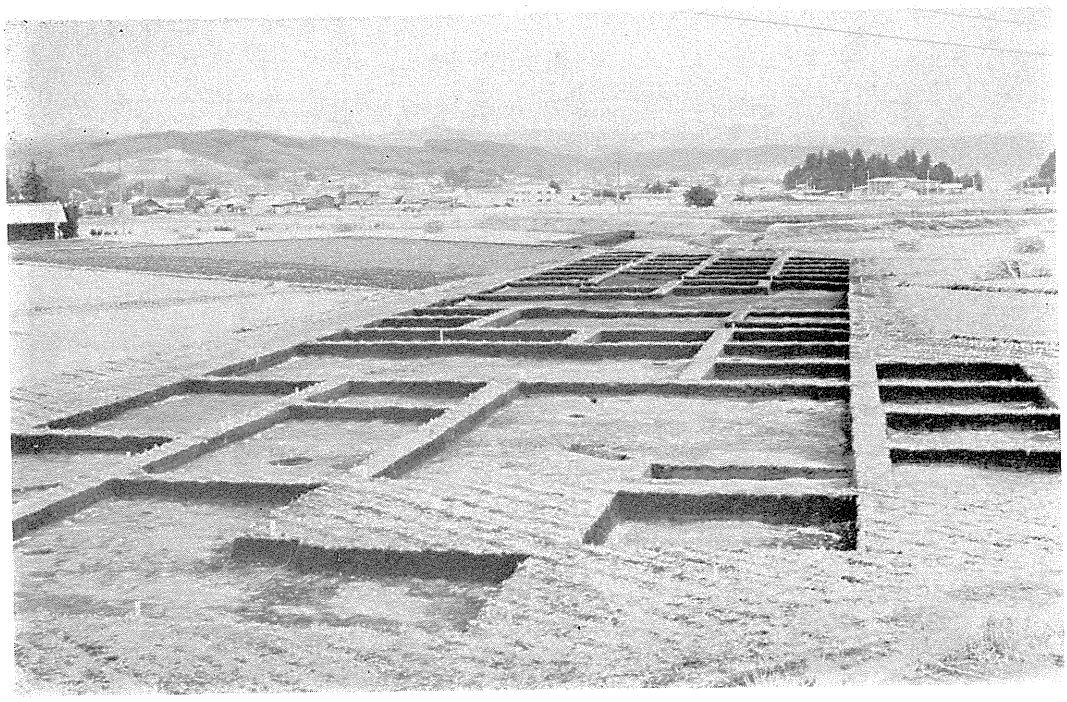
(1) 「栃木県史」資料編・考古一　栃木県史編さん委員会　昭和51年3月



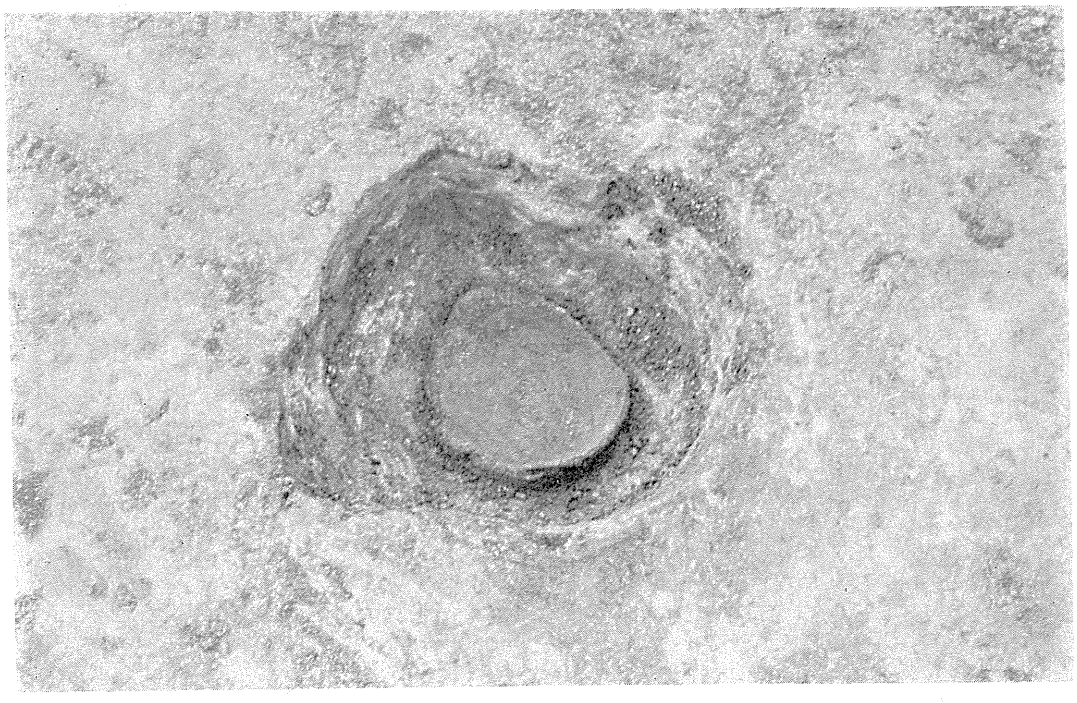
図版１　遺跡遠景（西より撮影）



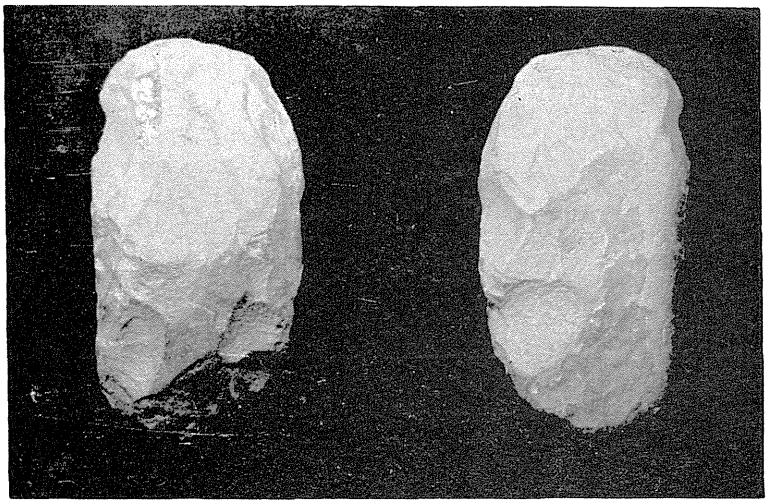
図版２　遺跡近景（南より撮影）



図版３　遺構検出状況（１～26グリッド）



図版４　12号遺構遺物出土状況



図版５　表採石器

大　桑　遺　跡

例　言

1　本書は一般国道121号道路改良工事（今市市大桑地区）に伴う大桑遺跡発掘調査報告書である。

2　発掘調査及び報告書作成に係る費用は，県土木部の負担による。発掘調査，報告書作成は県教育委員会が主体となり実施した。調査担当者は栃木県教育委員会文化課主事兼指導主事岩上照朗・調査員中山晋である。

3　遺物整理，図面作成，本文執筆，本書の編集は，中山の協力を得て岩上が行なった。

4　発掘調査，報告書作成にあたっては今市市教育委員会，今市市大桑公民館に多大な協力を得た。記して謝意を表したい。

本文目次

Ⅰ　発掘調査の経緯と経過……24
　1　調査に至る経緯……24
　2　調査の経過……24
　(1)調査の方法……24
　(2)調査日誌抄……25
Ⅱ　遺跡の環境……28
　1　遺跡の立地……28
　2　周辺の遺跡……30
Ⅲ　発掘調査……32
　1　調査の概略……32
　2　出土遺物……33
　(1)土　器……33
　(2)石　器……36
Ⅳ　まとめ……36

挿図目次

図―1　135 S地区概念図……25
図―2　大桑遺跡位置図……29
図―3　大桑遺跡周辺図……31
図―4　138，139地区グリッド配置図……33
図―5　大桑遺跡出土土器拓影……34
図―6　大桑遺跡出土石器実測図……35

写真図版目次

図版1上　大桑遺跡遠景（南側より撮影）……37
図版1下　133地区（北側より撮影）……37
図版2上　139地区（南側より撮影）……38
図版2下　大桑遺跡出土土器……38
図版3　〃　〃石器……39

Ⅰ　発掘調の経緯と経過

1　調査に至る経緯

一般国道121号道路改良工事・今市市大桑地区において遺跡の所在の確認は，昭和53年9月全県下一斉の道路建設予定地内の遺跡分布調査による。遺跡は大桑遺跡と命名され，縄文時代の集落跡と想定された。本遺跡の取扱いについて，土木部道路建設課と当委員会での協議事項となった。両者間の協議の結果，道路予定地の買収が既に終了していること，路線の変更も無理であることなどから，発掘調査を実施することとなった。但し53年度中の調査は，当委員会において他に幾つかの調査が既に予定されていたため困難な状況にあった。従って昭和54年度に大桑遺跡発掘調査を実施することで，土木部・日光土木事務所と当委員会の三者間に合意が成立した。これを受け昭和54年4月12日付け道建14号にて土木部長より当教育委員会教育長あて大桑遺跡発掘調査の依頼が提出された。これにより大桑遺跡の発掘調査に向けて当委員会にて具体的な業務が動き出し，他に予定されている各種調査との日程調整，調査のための諸準備などを進め，昭和54年4月20日付け文化第121号にて大桑遺跡発掘調査を5月9日～6月9日の予定で実施する旨の回答を土木部長あて提出した。

調査体制は次の通りである。

調査主体者　　栃木県教育委員会
調査担当者　　岩上照朗（文化課）
　　中山　晋（　〃　）

2　調査の経過

(1)　調査の方法

昭和53年9月の遺跡分布調査において，大桑遺跡は南北約160m，東西約250mの規模有する縄文時代集落跡と考えられた。遺跡は古大谷川左岸の台地上に載る。道路予定線はこの台地の中央をほぼ南北に縦断するように設定されていた。発掘調査はこの道路予定線内（図―3）を対象とした。対象面積は約3520m^2を算する。

遺跡の規模は大きいが，土器片などの散布は疎なことから，調査は頭初，道路予定線内全面に亘って実施するのでなく，遺構の確認のための部分発掘として予定された。その結果如何によってはより長期間の発掘調査を計画するものであった。確認調査の結果は後述するように，遺構の検出は全くないこと，遺物は散発的に出土するのみであったことから，本格的な調査に移行させる必要はないと判断させるものであった。

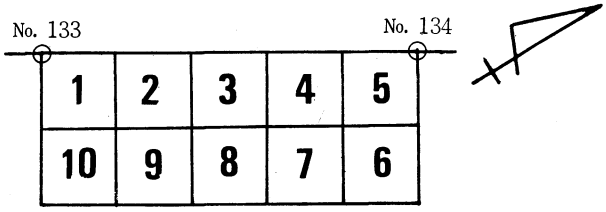
調査はグリッド法によるものである。グリッドの設定は次の方法で行った。（図―1）

1，道路予定線内の中心杭（杭間20m，№133～140）を基準線として利用した。

2，地区名は各中心杭番号を付した。例えば№133～134の間を133地区とした。

3，各地区とも道路中心線より北側をN区，南側をS区とし，原則として各地区交互にS区乃至N区を設けた。

4，各区にはそれぞれ10グリッド（1グリッド4×4m）設定し市松型に掘込み，遺構検出作業を行った。（但し市松型の掘込みは原則的なものである。図—3参照）



図—1　133S地区概念図

5，グリッドの番号は図—1概念図の通りとした。それぞれについて例えば133地区南区第1番目のグリッドは133S—1と呼称する。

但し136地区については，水路が地区内を縦断し，冠水していたので調査できなかった。調査面積は計532m^2であった。

(2) 調査日誌抄

昭和54年5月9日（晴れ）

調査現地に調査担当者集合。調査方法の検討，調査範囲及び期間の確認を行う。今市市教育委員会，日光土木事務所に打合わせに行く。

5月10日（晴れ）

プレハブ設置，グリッド設定。調査地区内草刈り。作業員16名集合。

5月11日

133S—1，3，5，7，9粗掘り開始。S—5の一部において土層観察のためローム上面まで深掘りする。その結果は次の通り。Ⅰ層・褐色土（耕作土層）。層厚約25cm。底面に酸化第二鉄の層がある。Ⅱ層・黒褐色土。層厚約30cm。下位に土器片などを包含する場合がある Ⅲ層・黄褐色土（シルト質ローム層），層厚30cm。Ⅳ層・礫層（昔往の河床とみられる。）

Ⅰ～Ⅲ層は以後どの地区においても確認される。

5月12日～17日

雨のため作業中止

5月18日（曇り）

133S—1，3，5，7，9Ⅲ層上部まで掘り下げ。S—3より河原石の密集地区検出，S—3，5Ⅱ層下位より土器片出土。いずれのグリッドもⅡ層下位に河原石の出土する例が多い。河原石密集地区検出層位，土器片包含層位はⅡ層下位にある。何等かの関連あるか。但し河原石の配し方に規則性がない。

5月19日（晴れ）

135S－1，3，5，7，9の粗掘開始。133地区排土の除去。

5月21日（晴れ）

5月19日の作業継続。

5月22日（晴れ）

133地区排土除去。135S－9，7をⅣ層上面まで掘り下げる。Ⅳ層はローム層ではなく，シルト質の硬い層である。135 S－5ではⅣ層上面にて水の湧出あり。以下は掘下げられない。134地区では遺物，遺構の検出なし。

133 S－2，4をⅢ層上面まで掘下げて，S－3検出の河原石分布の範囲確認しようとする。

134 N地区グリッド設定。中心に溝が走るため，調査はN－5，7，8の3グリッドのみとする。

5月23日

133 S地区の写真撮影。133 S－9の深掘り結果133地区のⅣ層下には全面的に河原石が密集していると判明。河原石は下位に行く程小さくなり，やがて砂となる。密集の仕方に規則性はない。上面は凹凸がはげしい。以上から133地区は従前河床であったものと見られる。河原石密集地区も人為的なものでないと見られる。以上にて133地区の調査終了。

134 N地区，N－8 Ⅰ層中より分銅形打製石斧破片出土。N－5，7については遺物の検出なし。

5月24日（晴れ）

134 N－8 Ⅱ層中より早期末の土器片出土。その他何等遺構・遺物なし。134地区についてはⅢ層下位まで各グリッド掘下げて終了する。

135 S－1，3，5，7，9それぞれⅣ層上位まで掘下げる。遺構・遺物なし。133地区終了。

137 N地区，138 S地区，139 N地区グリッド設定。139 N－3，5，7粗掘り開始。138地区にて分銅形打製石斧1個採集（図－6の2）。

5月25日（晴れ）

139 N－3，5，7の掘下げ。3グリッドとも120㎝掘下げたがⅡ層の堆積が厚い。N－7西半に落込み確認。住居跡か？

138 S－5，9粗掘り開始。

5月26日

雨天のため作業中止

5月28日（曇り）

139 N－1，9を約1㎡掘下げる。N－9はⅡ層の堆積厚い。N－1 Ⅱ層中より河原石の密集部分検出（河原石は人頭大のもの多い）。河原石は敷詰められたような状態にて検出され河原石の無い部分と直線的に画されている。人為的に配石されたものか否かは不明である。N－9においてもⅡ層中に河原石の集中部分が検出された。密集度はN－1より低いが，ほぼ同

一レベルにて検出された。N—1のものと関連するか？

5月29日（晴れ）

133地区より検出された河原石密集部分はその後の深層調査より以前の河底の礫層の一部と判断した。139地区検出の河原石の密集部分はそれに比べて広く，北東方向に低い傾斜を持つこと及び低くなる程より大きな河原石が配されるなど，人為的に配されたものである感を持たせる。河原石の広がり方の様相をつかむためより広い調査をすること，より深層の調査が肝要である。

5月30日（晴れ）

堆積土壌観察用の畔を残しながら，139N地区ほぼ全面，138N地区一部，139S1～2グリッドを調査する（河原石の広がり方を把握するため。）。138地区はⅢ層まで表土上面より—30～50㎝。139地区とくに東半はⅢ層まで表土上面より—160～180㎝と深い。

5月31日（晴れ時々曇り）

作業員を3班に分け，うち2班は138地区，139地区の調査，他1班は137地区の調査を行う。

137地区調査グリッドはN—3，5，7。

139N—1において河原石下の深層調査開始。

6月1日（晴れ）

昨日の作業継続。

6月2日（晴れ）

昨日の作業継続。

6月4日（晴れ）

139N—1の深層調査の結果，河原石はかなり厚い堆積をもつことが判明。従前河床であった可能性大となる。広がり方をつかむこと肝要。

6月5日（晴れ）

139地区グリッド掘下げ作業継続。

137地区はⅡ層まで掘下げたが水の浸出が激しく本日にて取止め。

6月6日（晴れ）

139地区グリッド掘下げ作業継続。

6月7日（晴れ）

139地区調査終了。河原石の広がり方の略図作成。（図—4）従前の河床と判断する。

各地区の調査終了状況の写真撮影。

遺跡遠景撮影

調査地区の清掃，発掘器材の収納。

6月9日（晴れ）

本日をもって調査終了。作業員賃金支払い。今市市教育委員会，日光土木事務所に調査終了報告。

Ⅱ　遺跡の環境

1　遺跡の立地

大桑遺跡は，今市市大桑に所在し，今市市市街地より北東方向約5.5㎞の地に位置する。

今市市の地形を大別すると次の4つに区分される。(1)日光火山とその東に接続する山地，(2)高原火山南に接続する塩谷山地，(3)鬼怒川，大谷川等の河川に沿ってほぼ東西に延びる低地（沖積面），(4)各河川間に形成された台地（洪積台地）このうち(4)の中には所々に猪倉山，刈場山，富士山などの独立丘陵が残る。また洪積台地は宝木面に比定される今市台地（今市扇状地）鹿沼台地（宝積寺面に比定される。）の北端及び河川の流路に沿って形成された台地（田原面に比定される。）の三地形面に分けられる。今市市市街地はこのうち今市台地の北西隅近くに載る（図―2）。

大桑遺跡は，鬼怒川の一支流板穴川右岸に形成された田原面相当の洪積台地上に立地する。台地の南側は古大谷川により急崖が作られており，133地区付近でその流水面との比高は6～8㎡を測る。139地区の標高は約321㎡を数える。遺跡の載る台地は西側山地（標高586㎡）に接続し東側鬼怒川と板穴川の合流点に向かってほぼ東西に延びるもので，東西約3㎞，南北約2㎞の規模をもつ。遺跡は台地のほゞ中央に立地している。

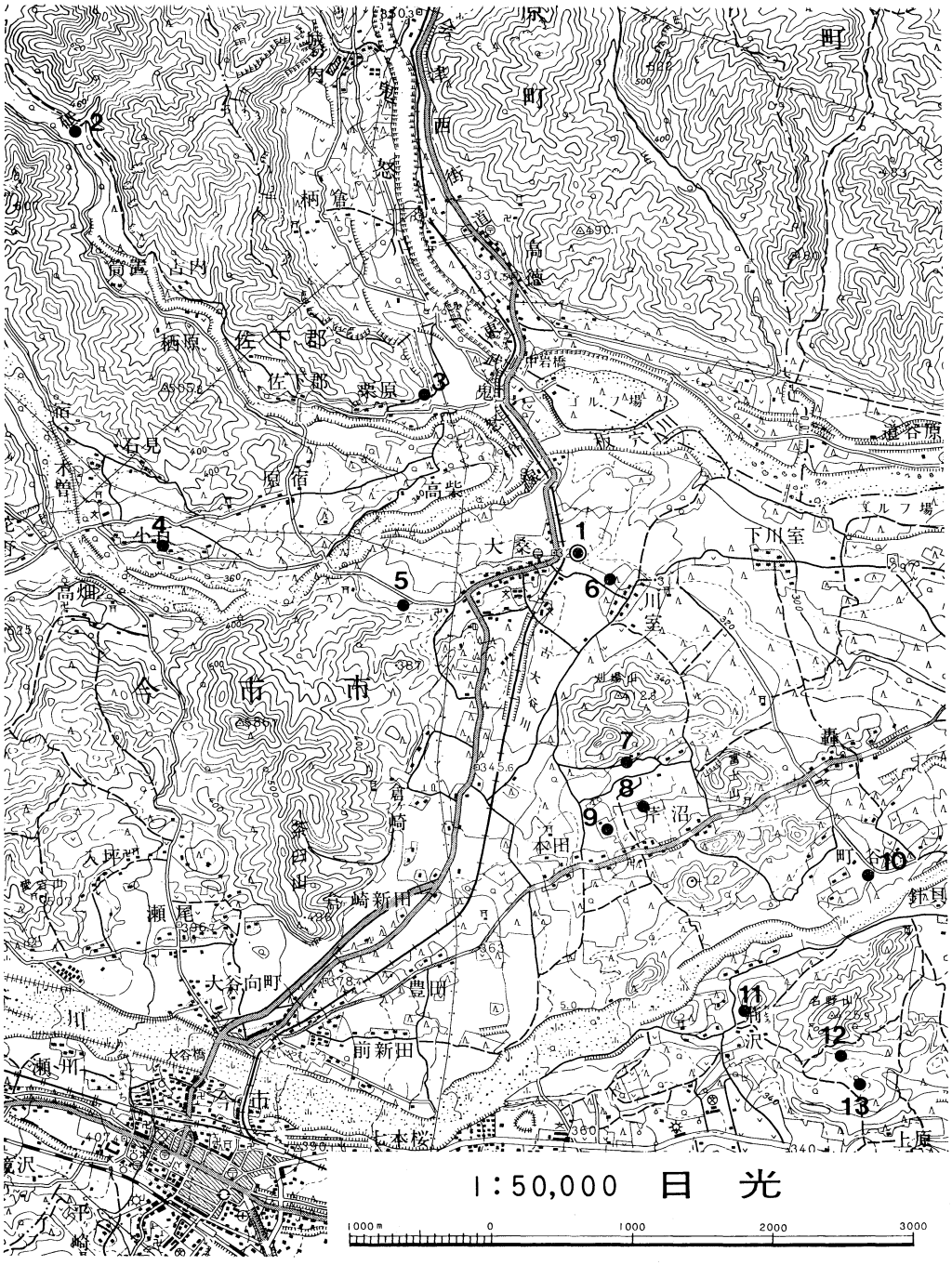
139 N―1グリッドの深層の観察による被履土層は次の通りであった。

Ⅰ層：層厚約30㎝，褐色土，下位に酸化第二鉄を含む，層（水田耕作の結果堆積したもの厚さ5㎝）を持つ。

Ⅱ層：層厚約50㎝，土褐色土，下位に礫を含む。土器・石器の包含層，ローム粒なども含まれることがある。

Ⅲ層：層厚約40㎝，黄褐色土，シルト質の火山灰層，上位に七本桜，今市軽石粒を含むことがある。

Ⅳ層：層厚不明，礫層（段丘礫層）



図―2　大桑遺跡位置図及び周辺の遺跡分布図

2　周辺の遺跡

大桑遺跡の周辺にはいくつかの遺跡の存在が確認されている。そのうち縄文時代の遺跡について記し，遺跡立地の特徴について若干述べてみる。（　）内は栃木県遺跡目録番号

1　大桑遺跡

2　タタイ沢遺跡（１６１２）：砥川右岸の狭小な台地上に立地する縄文土器散布地。

3　下原遺跡（１６２４）：鬼怒川と砥川の合流点近くに形成された台地（田原面相当）に立地する縄文土器散布地。

4　五郎宮遺跡（１６１４）：板穴川左岸の沖積面上に存在する縄文土器散布地

5　堀添遺跡（１６１５）：縄文土器散布地

6　大畑遺跡（１６２３）：大桑遺跡の南に対面する台地（田原面相当）上に載る縄文・弥生土器散布地。

7　中村遺跡（１６１７）：刈場山南麓台地上に立地する加曽利Ｅ式～堀之内式の土器を出土する集落跡。

8　仲居沢遺跡（１６１９）：富士山西麓台地上に立地する縄文土器散布地。

9　南沢遺跡（１６１８）：縄文土器散布地

10　前村遺跡（１６１６）：大谷川左岸に形成された台地（田原面）に立地する加曽利Ｅ式土器散布地。

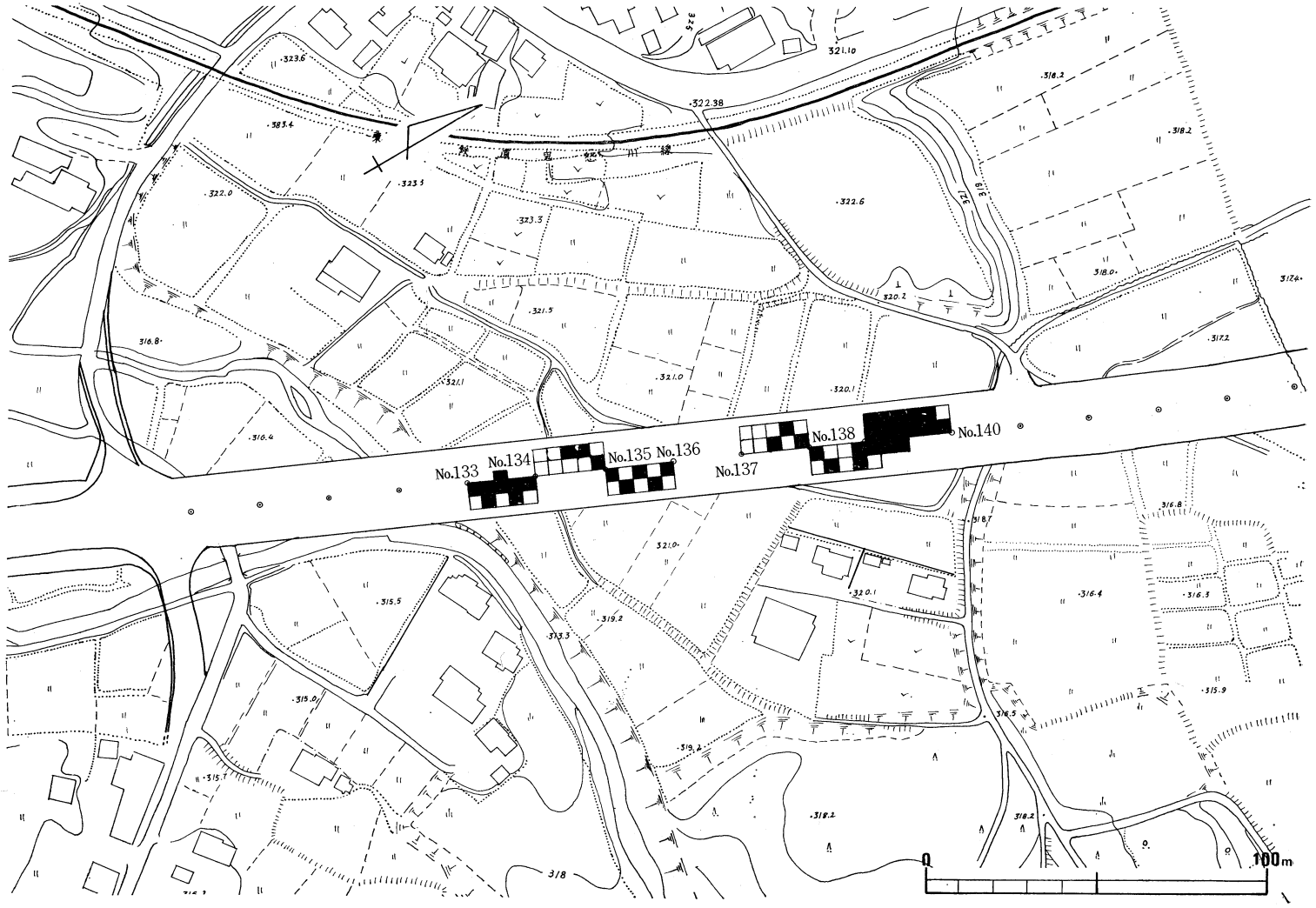
11　荆沢遺跡（１６２６）：名野山西麓台地上に立地する縄文土器散布地。

12　名野山下遺跡（１６２７）：名野山南麓斜面に立地する堀之内式～加曽利Ｂ式土器散布地。

13　野火除遺跡（１６２８）：縄文土器散布地

以上の遺跡の立地から遺跡は次の三通りに分けられる。(1)鬼怒川などの河川沿いの狭小な台地上に立地するもの（2～5）。遺跡の規模はその占地する地形からみて小規模なものが多い。(2)台地の縁辺に立地するもの（1，6，10）。遺物の散布密度は低いが，遺物の散布範囲は広い。(3)独立丘陵の麓に立地するもの（7～9，11～13）。遺跡の規模は小さいが，遺物の散布量が多い。

(3)及び(2)にあたる遺跡より出土する土器は縄文早期末～前期のものが多い。(3)は同中期～後期の土器の出土が多い。



図—3　大桑遺跡周辺図

Ⅲ　発掘調査

1　調査の概略

発掘調査の対象範囲は，道路予定線内に限られていた。調査地区設定は各中心杭を活用したものであるから，以下の記述は各設定地区毎に行なう。

１３３地区（位置は図―３参照，図版１の下）

総計８グリット調査した。いずれもⅣ層礫層上面まで掘下げた。S―４，５グリットでⅡ層上部より縄文土器９片(図―５の６など)の出土があったが，伴う遺構は全く検出されない。S―３グリッドより拳大から人頭大の河原石が意図的に集積されたような状態で検出された。この底面はⅣ層の礫層に連続し，出土遺物も全くないことから遺構ではないと判断した。なおⅣ層礫層は広い範囲に広がり，砂を多量に含むので従前河床であったものと見られる。礫層の上位層Ⅲ層は田原ローム部層にあたると考えられる。

１３４地区（位置は図―３参照）

N―５，７，８の３グリッド調査した。本地区のほぼ中央に水路が横断し，水の浸出が激しいため池のグリッドは調査できなかった。N―８グリッドⅡ層下位より縄文時代早期末，前期の土器片（図―５の１及び３）３片の出土を見た他遺構の遺物の検出はない。

１３５地区（位置は図―３参照）

S―１，３，５，７，９の５グリッド調査した。縄文土器小片１片と石鏃２点（第５図３，４）の出土した以外，遺構遺物の検出はない。各グリッドⅢ層（田原ローム部層）上面まで掘下げた。

１３６地区

全調査区のほぼ中央に位置する地区。地区内に水田用水路があることから水の浸出が著しく調査は不可能な状態であった。

１３７地区（位置は図―３参照）

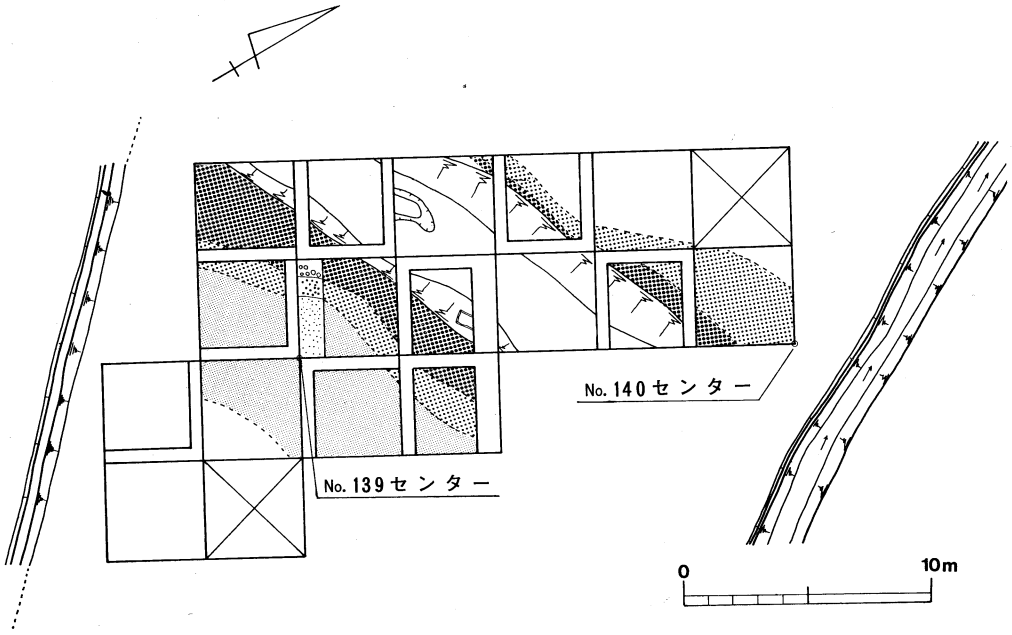
N―３，５，７の３グリッド調査した。N―７グリッドⅡ層上位より分銅形打製石斧１点が出土した。（図―６の１）その他の遺構，遺物の検出は全くない。各グリッドⅡ層下面まで掘り下げた。

１３８地区（位置は図―３参照）

N―５，６，S―１，４，５，７，９の７グリッド調査した。N―６より内耳土鍋破片１片縄文時代前期の土器破片１片（図―５の５）の他，遺構も遺物も検出されない。但し本地区南側より分銅形打製石斧（図―６の２）が採集された。N―５，６，S―５より河原石の密集部分が検出されたが，これについては１３９地区の項にて記述する。

１３９地区（位置は図―３参照，図―４，写真図版２の上）

N―１～５，７～10，S―１，２の11グリッド調査した。Ⅱ層中より縄文時代前期土器片３



図—4　138，139地区グリッド配置図

片(図—5の2，5など)及び中期土器片1片(図—5の7)，分銅形打製石斧破片2片，石鏃(図—6の5)，チャート製剥片が検出された。138N—5，6，S—5，139N—1～5 7～10，S—1～2において調査地区を斜めに横断する大構が検出された。(図—4)溝の断面形態は逆台形，両サイドの斜面には拳大から人頭大の河原石が覆い，中央部は幅約6*m*に亘ってえぐられている。確認面での最大幅は約15*m*を算する。斜面を覆っている河原石は下位になる程大きくなる。(図—4のスクリーントーンの粒径はそれぞれ河原石の大きさの差を表わす。上位は砂が混り河原石の密集度も中位下位に比べて低い。)

頭初この大溝は人為的に作られたものであるとして，その広がりをつかむことを目的として調査した。しかし，139N—1の西側部分について河原石下の深層調査した結果，この河原石はかなり厚く堆積していること，河原石間には砂粒や大小の礫がかなり緻密に混っていることなどから従前の河床の礫層にあたるものと判断した。更に溝内よりは遺物の検出は全くない。

2　出土遺物

(1)　土器(図—5，写真図版2下)

1は134N—8Ⅱ層下位より検出されたものである。波状口縁を持つ破片。表裏面とも横方向の条痕が施される。更に表面には粗く縄文(Rℓの原体)が斜位に施文されている。胎土に

は多くの繊維が含まれる。縄文早期末茅山上層式に近い。

3は134 N—8 Ⅱ層下位より検出された。口縁部破片（平口縁）表面には口縁から粗い縄文（Ｌｒの原体）が羽状に施文されている。胎土中に多くの繊維を含む。縄文前期。

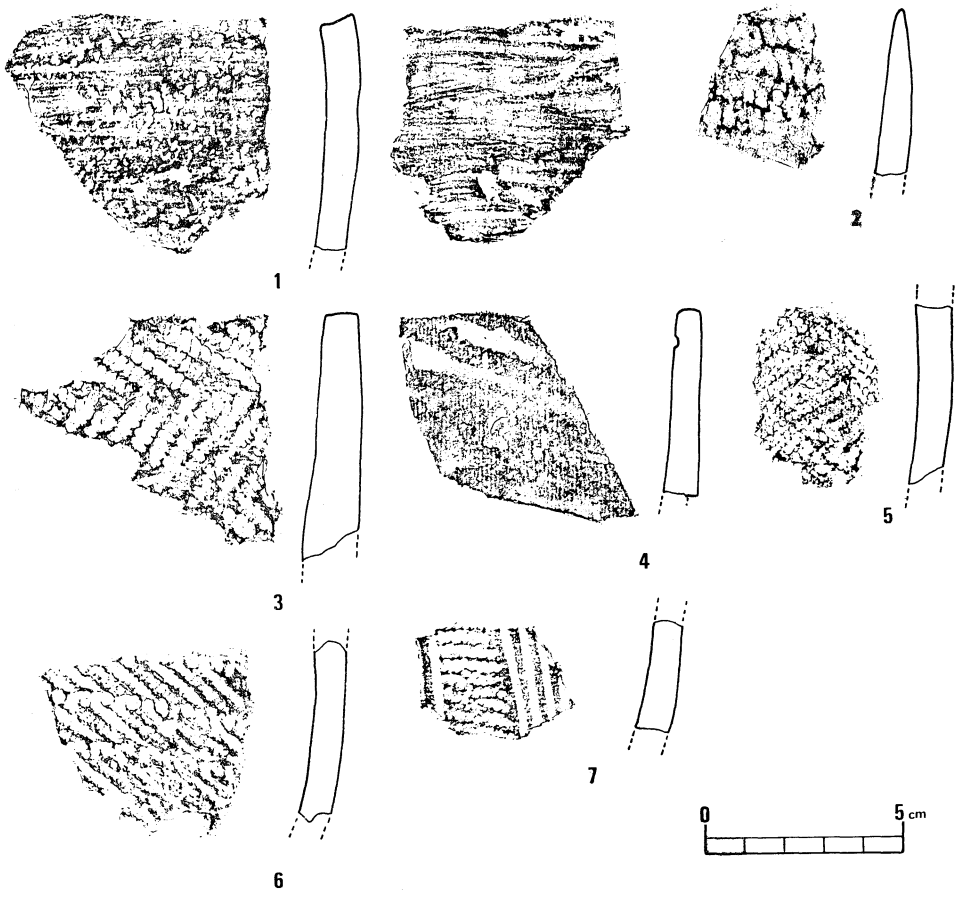
2は139 N—10 Ⅱ層中より検出された。

4は138 N—5 Ⅱ層上位より検出された。口縁部破片。表面には縄文が浅く施文されている。裏面口唇部直下に一条の沈線が横走する。加曽利B式に含まれよう。

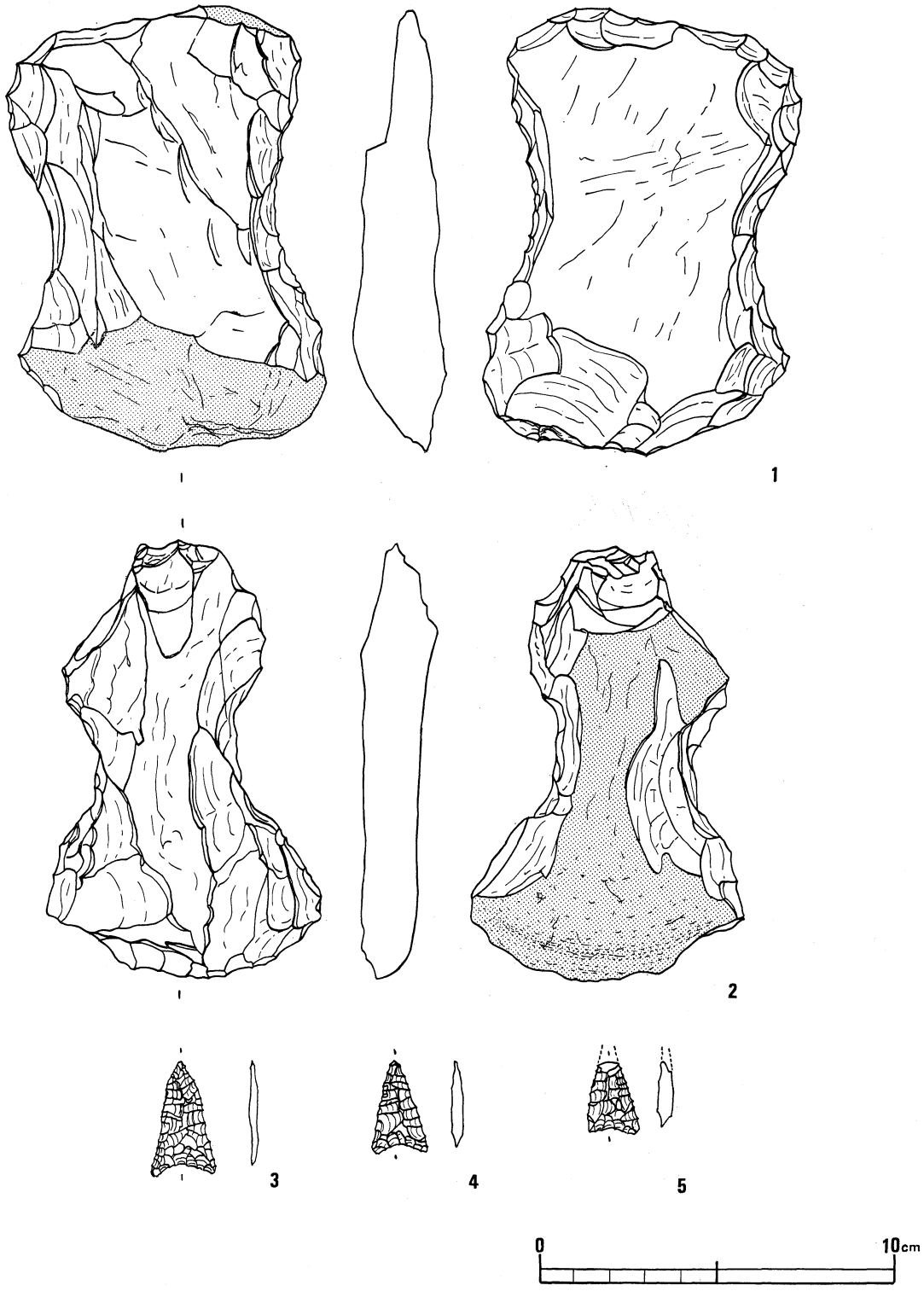
5は138 N—6 Ⅱ層上位にて検出された。表面には縄文（Ｒℓの原体）が羽状に施文されている。胎土中に繊維を多く含む。

6は133 S—5 Ⅱ層中より検出された。表面全面に縄文（Ｌｒの原体）が施文され，ループ文なども窺える。胎土に多量の繊維を含む。関山式土器。

7は138 S—1 Ⅱ層上位より検出された。地文縄文。縦方向に三条の沈線がある。加曽利E Ⅱ式土器に近い。



図—5　大桑遺跡出土土器拓影



図—6　大桑遺跡出土石器実測図

(2) 石器

分銅形打製石斧（図—6の1，2，写真図版2下）

1は137 N—7 Ⅱ層上位より検出された。表裏面に多くの自然面を残し，ステップを残す粗雑な剥離によって作り上げられている。砂岩製。

2は138地区表採品。片面全面，片面の周縁部の粗雑な剥離によって作り上げられている。粘板岩製。

石鏃（第6図3～5）

3は135 S—7 Ⅱ層下位検出，チャート製。4は138 S—3 Ⅱ層中検出，花こう岩製の粗雑なもの。5は139 N—1 Ⅱ層中検出。流紋岩製。

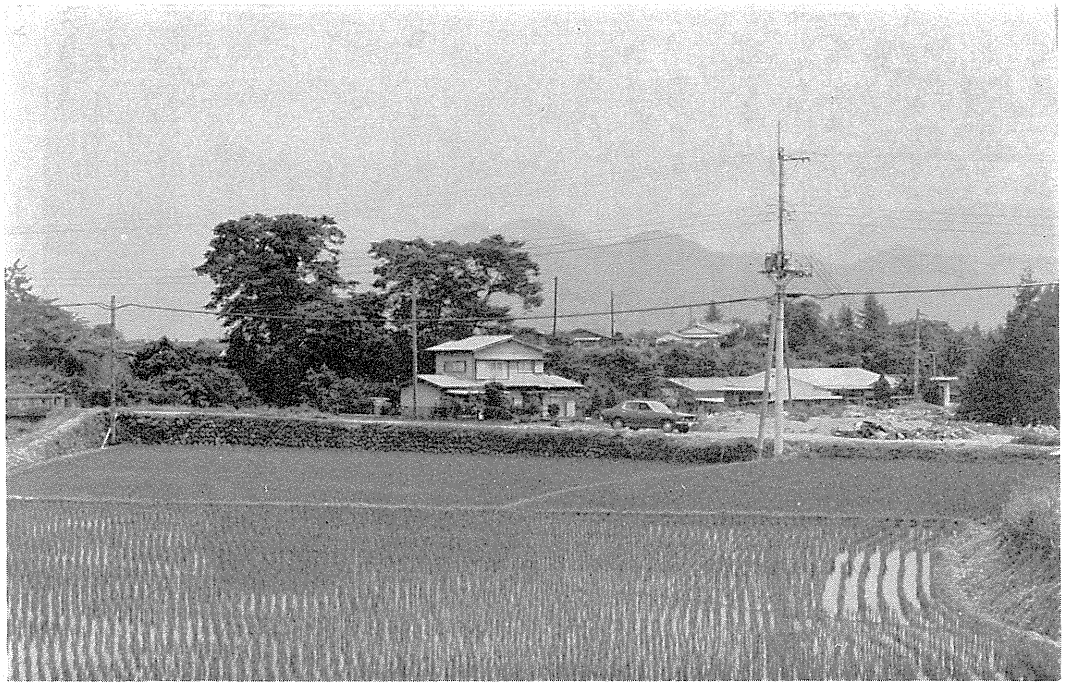
Ⅳ まとめ

以上を総合して箇条書きにまとめると次の通りとなる。

(1)，遺構として認定し得るものは皆無であったこと，遺物も全て散発的にしか検出されなかったことなどから，本調査区は遺跡の一部を構成してはいるが，その中心よりはかなり隔たりのある場所にあたると考えられる。

(2)，遺物は縄文時代前期の土器片が多い。これと石器を含む全ての遺物はⅡ層下位（黒褐色土下位）に包含されていることから，縄文時代前期のある時期の生活面を把握し得る。

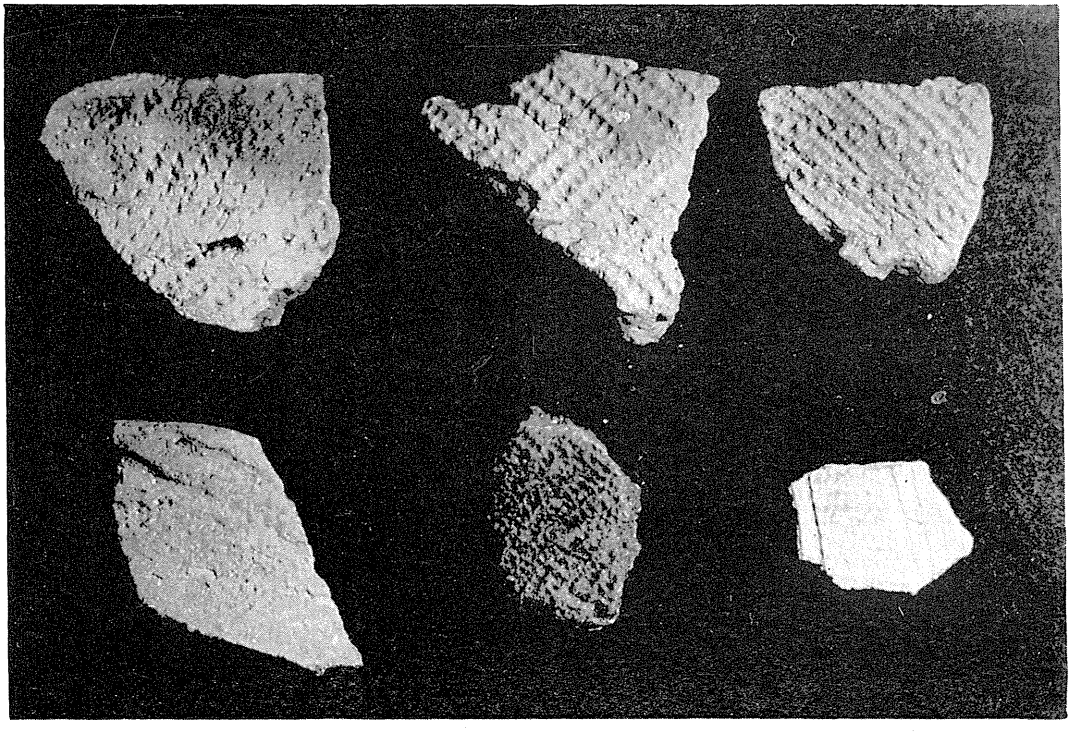
(3)，133地区，138及び139地区より検出した河原石の密集部分は，各々の地区の深層調査から以前の河床に形成された礫層と考えられる。その上には田原ローム層の載ることから，礫層の形成された時期は田原ローム層の堆積前となる。



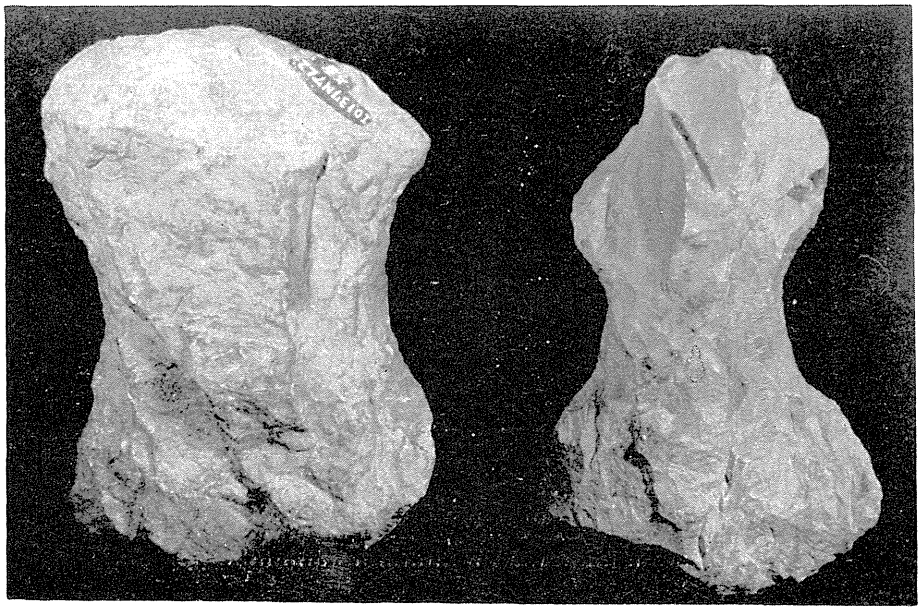
図版１　大桑遺跡遠景（南より撮影）

図版２　１３３Ｓ地区（東より撮影）

図版３　１３９地区（西より撮影）



図版４　大桑遺跡出土土器



図版５　大桑遺跡出土石器

星の宮A遺跡

例　言

1，本書は町道北中—星の宮線道路改良工事（益子町星の宮地区）に伴う星の宮A遺跡の発掘調査報告書である。

2，発掘調査及び報告書作成に係る費用は，県土木部の負担による。発掘調査・報告書作成は県教育委員会が主体となり実施した。調査担当は栃木県教育委員会文化課主事兼指導主事岩上照朗，同調査員初山孝行，桜岡正信（現群馬県埋蔵文化財調査事業団）である。

3，本報告書の作成については次のように分担した。

執筆は岩上照朗，初山孝行が分担し，その氏名は目次にそれぞれ記した。写真撮影は岩上が担当した。図面の浄書は岩上照朗，初山孝行がそれぞれの執筆分担に応じ行った。編集は両者協力して行った。

4，写真図版のうち石器は$\frac{1}{2}$大，土器は$\frac{1}{3}$大である。土器写真下の番号は，例えば1—1は，1号住居跡№.1の土器の意である。

5，先土器時代石器の石質については，栃木県立博物館準備室主幹堤橋昇氏に御教示を願った。遺物の産出層位の同定については宇都宮大学教授阿久津純氏に御教示を願った。

6，発掘調査，報告書作成にあたっては，益子町教育委員会に多大な協力を得た。記して謝意を表したい。

本文目次

Ⅰ，発掘調査の経緯と経過（岩上照朗）……46
1，調査に至る経緯……46
2，調査の経過……46
(1) 調査の方法……46
(2) 調査日誌抄……48
Ⅱ，遺跡の環境……51
1，遺跡の立地（岩上照朗）……51
2，周辺の遺跡（初山孝行）……53
Ⅲ，栃木県の先土器時代遺跡と星の宮A遺跡（岩上照朗）……56
1，栃木県の地形と関東ローム層……56
2，栃木県の先土器時代遺跡……64
3，星の宮A遺跡の層位……65
Ⅳ，発掘調査……66
1，先土器時代（岩上照朗）……66
2，古墳時代（初山孝行）……91
3，歴史時代（初山孝行）……93
Ⅴ，まとめ……105
1，先土器時代遺物について（岩上照朗）……105
2，歴史時代住居跡と出土遺物について（初山孝行）……108
Ⅵ，おわりに（岩上照朗）……113

挿図目次

図—1，星の宮A遺跡周辺図……47
図—2，星の宮A，B遺跡位置図……52
図—3，周辺の遺跡……54
図—4，栃木県地形区分図及び先土器時代遺跡分布図……58
図—5，星の宮A遺跡田原，宝木ローム層模式柱状図……65
図—6，遺物平面分布図……67
図—7，遺物平面分布図（珪質流紋岩，珪板岩，硬砂岩）……68
図—8，遺物平面分布図及び接合関係（チャート）……69
図—9，遺物平面分布図（礫）……70
図—10，出土石器実測図……74

図—11，出土遺物実測図（珪質流紋岩①）……75
図—12，出土遺物実測図（　〃　）……76
図—13，出土遺物実測図（　〃　）……77
図—14，出土遺物実測図（珪質流紋岩②）……78
図—15，出土遺物実測図（上，珪板岩・下，硬砂岩）……79
図—16，礫器，敲石，実測図……80
図—17，出土遺物実測図（チャート接合資料）……81
図—18，２号住居跡出土遺物……90
図—19，１号，２号住居跡……91
図—20，１号住居跡カマド……93
図—21，１号住居跡出土遺物 (1)……94
図—22，１号住居跡出土遺物 (2)……95
図—23，１号住居跡出土遺物 (3)……96
図—24，３号住居跡……99
図—25，３号住居跡北カマド……100
図—26，３号住居跡東カマド……100
図—27，３号住居跡出土遺物……101
図—28，１号溝状遺構……103
図—29，１号土坑……103

写真図版

図版１，１，星の宮Ａ遺跡遠景・２，星の宮Ａ遺跡近景……115
図版２，１，遺跡より東方鶏足山地を望む・２，土層断面……116
図版３，１，先土器時代調査グリッド・２，礫群(1)……117
図版４，１，礫群(2)・２，礫群(3)……118
図版５，１，礫出土状態・２，スクレイパー（No. 147）出土状態……119
図版６，１，剥片（No. 103—１）出土状態・２，石刃（No.37）出土状態……120
図版７，１，剥片（No.128，No.129）出土状態・２，剥片（No.128，129）出土状態……121
図版８，１，１号・２号住居跡（東より撮影）・２，１号住居跡……122
図版９，１，１号住居跡遺物出土状態（カメ）・２，２号住居跡（東より撮影）……123
図版10，１，３号住居跡（南より撮影）・２，３号住居跡遺物出土状態……124
図版11，１，１号土坑・２，１号溝状遺構……125
図版12，先土器時代石器……126
図版13，先土器時代遺物（珪質流紋岩①）……127

図版14，先土器時代遺物（珪質流紋岩①）…… 128
図版15，先土器時代遺物（上，珪質流紋岩①・下，同②）…… 129
図版16，先土器時代遺物（上，珪質流紋岩②・下，珪板岩）…… 130
図版17，先土器時代遺物（上左，硬砂岩・他，チャート）…… 131
図版18，先土器時代遺物（敲石，磨石）…… 132
図版19，先土器時代遺物（礫器）…… 133
図版20，１号住居跡出土遺物…… 134
図版21，２号・３号住居跡出土遺物…… 135

表目次

表―１，周辺の遺跡……55
表―２，栃木県先土器時代遺跡地名表 (1)……59
表―３，　〃　(2)……60
表―４，　〃　(3)……61
表―５，　〃　(4)……62
表―６，先土器時代出土遺物番号表 (1)……85
表―７，　〃　(2)……86
表―８，　〃　(3)……87
表―９，　〃　(4)……88
表―10，先土器時代出土遺物数量表……89
表―11，２号住居跡出土遺物一覧表……92
表―12，１号住居跡出土遺物一覧表 (1)……97
表―13，　〃　(2)……98
表―14，３号住居跡出土遺物一覧表…… 102
先土器時代関係県内主要文献…… 112

Ⅰ　発掘調査の経緯と経過

1　調査に至る経緯

栃木県土木部受託工事施行に係る道路建設予定地内の埋蔵文化財所在調査は昭和52年度より土木部の協力を得て本格的に実施し，多数の遺跡の所在が明らかになった。このうち町道北中一星の宮線の道路工事予定地益子町星の宮地区に星の宮A遺跡（土師器・須恵器片散布地），星の宮B遺跡（土師器片散布地）の二遺跡が所在しており，この二遺跡の取扱いについて土木部と当委員会での協議事項となった。このうち星の宮A遺跡の発掘調査の実施について，土木部真岡土木事務所より当委員会に協議があった。この協議結果により当委員会では昭和54年度に発掘調査を実施することになった。

土木部よりの星の宮A遺跡発掘調査の依頼は昭和54年７月10日付け道建75号による。これにより星の宮A遺跡の発掘調査に向けての下準備が具体的に動き出し，他に予定している発掘調査との日程調整を計った結果，昭和54年９月中旬より実施することになった。これは昭和54年９月８日付け文化第３３７号により星の宮A遺跡発掘調査を９月12日～10月31日の期間をもって実施する旨の回答となった。

調査体制は次のとおり

調査主体者	栃木県教育委員会
調査担当者	岩上照朗（文化課）
	初山孝行（　〃　）
	桜岡政信（当時文化課）

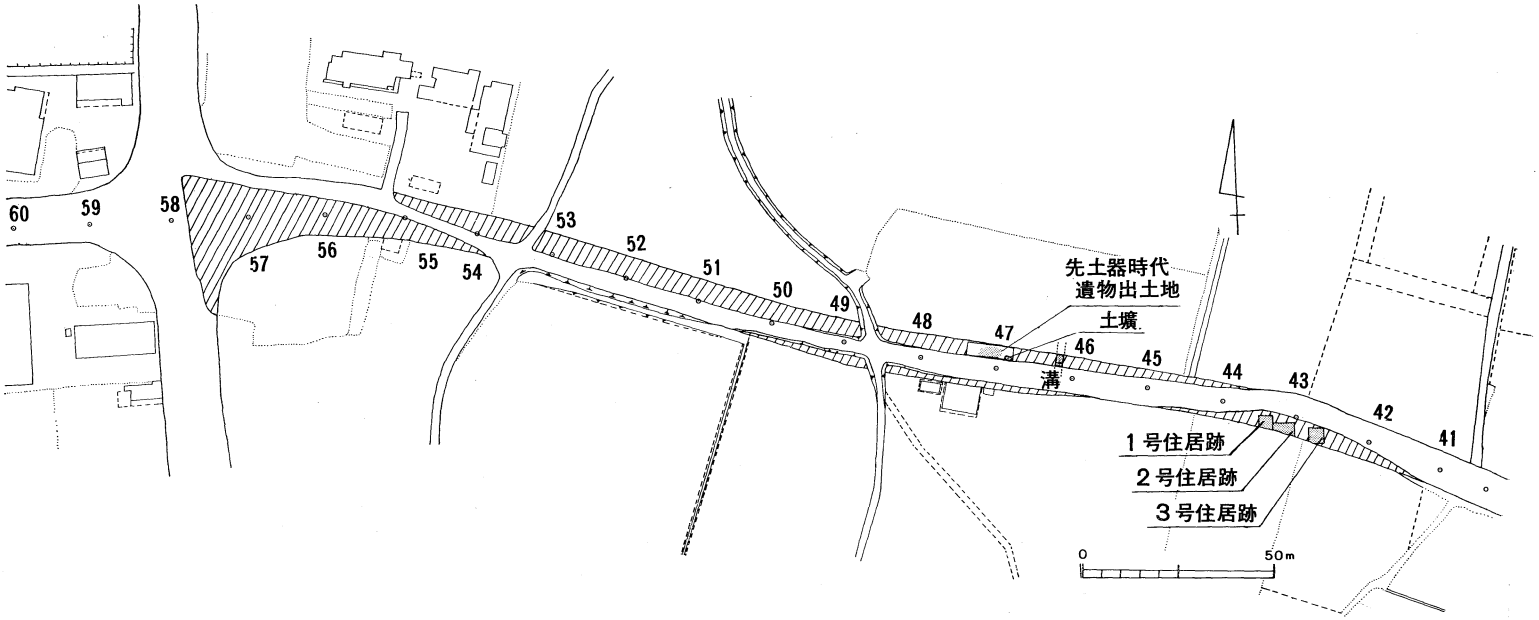
2　調査の経過

(1)　調査の方法

今回の調査は，町道北中一星の宮線の道路拡幅部分を対象とした。道路予定線の中心杭の番号でいえば№41～№58にあたる（図一１）。道路拡幅部分のみの調査であったために，調査地区西端の県道上根一塙線への取付け部分を除き，調査対象地区の最大幅は８mを超えるものではない。調査総面積は約２５００m^2であった。

当初調査期間については３週間（実働20日）程度考えていた。この期間と調査予定面積を併せ考え，更に中心杭№44～53にかけては山林であったことにより，調査はまず機械力による表土剥ぎから開始することとした。機械力による表土剥ぎは，人力によるそれよりもいくつかの観察事項を調査者から奪うことは否めない。しかし，費用と期間に制限される緊急調査では，機械力使用も止むを得ないとしなければならない場合が間々ある。機械力使用も止むを得ないと判断するのは調査担当者である。機械力導入を決定するときの一種後めたい気持を持つのはきっと筆者だけではあるまい。

機械力による表土剥ぎは多くの場合ローム層上面まで行なわれる。土層の色調の違いにより



図―1　星の宮A遺跡周辺図

遺構が確認し易いのは事実だが，確認面はあくまでも確認面であり，遺構がかつて構築された面とは異なるのも事実である。このような観点から，本調査の表土剥ぎは表土層の下位までとした。本調査では先土器遺時代物群を検出した。もしローム層上面まで機械力によって削平したとしたら，先土器時代の遺物は検出し得なかったかもしれない。

本調査では，先土器時代遺物群１ヶ所，古墳時代，歴史時代あわせて３軒の住居跡，土坑１基，溝状遺構１条を検出した。以下は先土器時代遺物群の調査に際しとった方法について若干記しておく。

先土器時代遺物が検出された地点は道跡予定線中心杭番号でいえば№47付近にあたる。この地点は現道拡幅部分北側であり，拡幅幅約４ｍと狭い部分であった。調査は当初グリッド法とした。２ｍ×２ｍのグリッドを道路中心線の方向に平行にまずは設定した（図版３の１）。しかし，調査地点は幅４ｍを限度とする狭いものであること，遺物の広がりは幅２ｍの範囲では把握できないことなどから，グリッドに囚われず，拡幅部分全域を一律に掘下げてもそれ程の支障は無いと思われた。よって調査担当者相互の協議のうえ，グリッド法による調査は取止めることとした。調査区は頭初設けたグリッドを南北に拡張する形で広げられ，結果的には幅４ｍ長さ12ｍのトレンチとなった。層位の観察はトレンチの北辺（ここでは道路拡幅部分の北辺）にて行なうこととした。トレンチの西端近く幅２ｍは，深層観察とより下位の文化層の有無確認のため，鹿沼パミス層下位まで掘下げた。

(2) 調査日誌抄

昭和54年９月12日（晴）

発掘調査現地に調査担当者集合，調査方法などの検討，調査範囲・期間の確認を行なう。益子町教育委員会，真岡土木事務所へ挨拶・打合せに行く。

９月13日・14日

プレハブ設置，発掘器材の運搬・遺構の所在確認。

９月17日～９月21日

９月17日作業員集合。人力による遺構の確認作業。中心杭№，43～44付近，道路南側拡張予定部分より住居跡２軒確認（西側より１号，２号）。２号住居跡は１号住居跡によって切られている。中心杭№46付近より南北に延びる溝状遺構が検出される（21日）。中心坑№47付近，道路北側拡張予定部分よりチャート製，珪板岩製の剥片（№２）各１片ずつ検出される（21日）。両剥片ともローム層中より検出されたため，先土器時代遺物群の存在が予想される。先土器時代遺物群調査のためのグリッドを設定する（２×２ｍ，６個）。中心杭№47付近より長方形の土坑確認する。溝状遺構，土坑それぞれに１号を付す。

９月22日～９月27日（９月23日，25日，28～30日雨のため作業中止）

22日，遺構確認状況の写真撮影。１号土坑，１号溝状遺構の覆土掘下げを開始する。埋積土の状況観察のためそれぞれの遺構内に十字形のベルトを残す（幅10～15㎝）。

26日，22日の作業継続。先土器調査グリッド（以下プレグリッドと略する）の調査開始。Ⅲ層（Ⅲの3本文参照）上面より掘下げる。グリッド番号は西より1，2……の順とする。Ⅲ層下には，凸凹面をもって境される七本桜・今市軽石粒混在する土層があることが判明（Ⅳ層）。この層は県中央部の七本桜・今市軽石層に比定することができるか否か担当者間の議論となる。

27日，午前雨のため作業できず。プレグリッドⅣ層下位まで掘り下げる。剥片・砕片数点の出土をみる。より下位に文化層があると思われる。

10月1日～10日（10月2～3日，10日雨のため作業中止）

1日，1号土坑完掘。埋積土断面図，土坑平面図作成。1号溝状遺構完掘。溝の東側斜面に径20㎝程度のピットが穿たれている。埋積土の状況からピットは溝に伴うとみられる。

4日，1号，2号住居跡掘下げ開始。それぞれ十字形に埋積土観察のためのベルト（幅30㎝）を残す。

5日，プレグリッドⅤ層上位まで掘下げる。50点程の砕片・剥片を検出。一ケ所の礫群の存在が予想される。炭化物の検出はない。

1号住居跡と2号住居跡の重複部分を注意しつつ両者の掘下げ継続。2号住居跡の埋積土中よりは須恵器の検出は全くない。

8日，プレグリッドⅤ層上位まで掘り下げた段階で，遺物分布図作成，各量物のレベルを入れる。

2号住居跡，北壁やや東寄りに小さな張り出しを検出。カマドの可能性を考えた。

10月11日～10月20日（10月19日台風）

この10日間は，住居跡及び溝状遺構の調査に主として傾注した。作業員の数が少ないためプレグリッドの調査を併行して行うのは困難であった。

12日，2号住居跡（以後は2Hと略する。同様に1Hは1号住居跡である。）掘下げ完了。床面は堅くしまっているが，ローム面ではなく，ロームブロックと黒色土の混土が貼ってある中央に炉がある。焼土の量は少ない。北西隅に貯蔵穴がある。

16日，1Hカマドを残し，掘下げ完了。床面のしまり具合は一様ではない。住居跡中央に凹みあり。ここと2Hとの重複部分には貼床がみられる。

17日，3H（3号住居跡）を確認する。カマドが付設され，ロクロ製の土師器坏破片の検出されることから1Hとほぼ同時期の住居跡と見られる。2H北壁やや西寄りに検出された壁の切り込みは，焼土・粘土などが確認されないことからカマド以外の施設と考えられる。

18日，（台風20号の影響で小雨模様）

午前中にて作業中止。2H・1Hの写真撮影。3H確認状況写真撮影。2H，1Hの埋積土断面図作成を急ぐ。

19日，台風20号

20日，昨日の台風のために，1H・2Hともに冠水する。断面図用ベルトは崩壊，2H内の

貯蔵穴内にも泥土堆積。午前中住居跡内の水のかき出し，清掃を行う。調査参加者皆泥まみれとなる。住居跡の調査は水の引くのを待って行うこととなる。プレグリッドも冠水したため掃除する。清掃中，礫・砕片をそれぞれ数点検出した。Ⅳ層（Ⅳ－3本文参照）は今市・七本桜軽石粒を多量に含む層であるが，木根などによる撹乱が著しい。

10月22日～10月31日

この期間も住居跡調査を中心作業とした。

22日，3Hの埋積土掘下げ開始

23日，1H中の細部（周溝・柱穴など）調査。中央部に円形（径約1*m*）のピット確認する。ピット上面には貼床が認められるため，住居跡構築以前のものと判断される。3H昨日の作業継続する。東壁と北壁に2基のカマドが付設されている。

調査員桜岡，郡馬県埋蔵文化財センターのプロパー職員採用試験に行く。

24日，3H，埋積土断面観察用ベルトを残しほぼ掘下げ完了。北壁取付けのカマドは2基の芋穴によって一部破壊されている。

午後，雨のため作業中止。

27日，3H，全景写真撮影。調査員桜岡は本日をもって栃木県教委文化課退職。明後日より群馬県埋文センター勤務。残念であるがいたし方ない。記念写真撮影を行う。

29日，1H，2H，3Hの平面図作成及び1H，3Hカマド周陛埋積土断面図作成開始。

31日，1H～3H、1号土坑，1号溝状遺解の調査終了。

11月1日～11月12日（11月10日は雨のため作業中止）

この期間はプレグリッドの調査を行う。Ⅴ層以下の掘下げ開始。Ⅴ層中に文化層の中心があるようである。Ⅴ層上位より，剥片・砕片・礫など多量出土する。

プレグリッドを全てⅥ層（ソフトローム層）まで掘下げたところで，遺物群の広がりは巾2*m*のグリッド内ではとらえきれないと判断する。付近は幅約4*m*の狭い道路拡幅部であるので遺物の確認される部分全面に調査区を拡張した。但し，調査区の拡張はプレグリッドの方向を基本にして行い，後の位置復元と平面実測の際の基準線としてプレグリッド設定時の坑，水糸は残した。

1日にはⅤ層中位より河原石十数個よりなる礫群の上面を検出した。礫群の下底は，後の調査によりⅥ層（ハードローム）上面に接する位置にあることが判明。

剥片，砕片はⅤ層上位～中位にかけて最も多く検出された。礫群周辺では礫群の上面と同レベル（Ⅴ層中位）にて多くの遺物が検出されたが，礫群の下面（Ⅵ層上面）にまで及ぶものはない。遺物の出土層位にはこのように礫群周辺と他の場所にて二つのまとまりが認められた。これはそのまま平面的にも2つのまとまりとして把えられた。これは二つの文化層に分けられるのか否か調査担当者相互の協議となったが，接合資料の検討をまって結論を出すこととした（10日）。

11月9日には，宇都宮大学教育学部教授阿久津純氏に，出土層位の確認をいただく。

11月12日，遺物群の分布図作成。遺物それぞれの出土レベルを入れ，全ての遺物を取挙げる。更により下位の文化層の有無を確めるためⅦ層を掘下げる。少くともⅦ層中に文化層はないと判明。多少の心残りはあるが，調査費用，期間の制約から本日をもって調査を断念する。

11月13日

益子町教育委員会，真岡土木事務所に調査終了報告。発掘器材撤収。作業事務所の清掃。

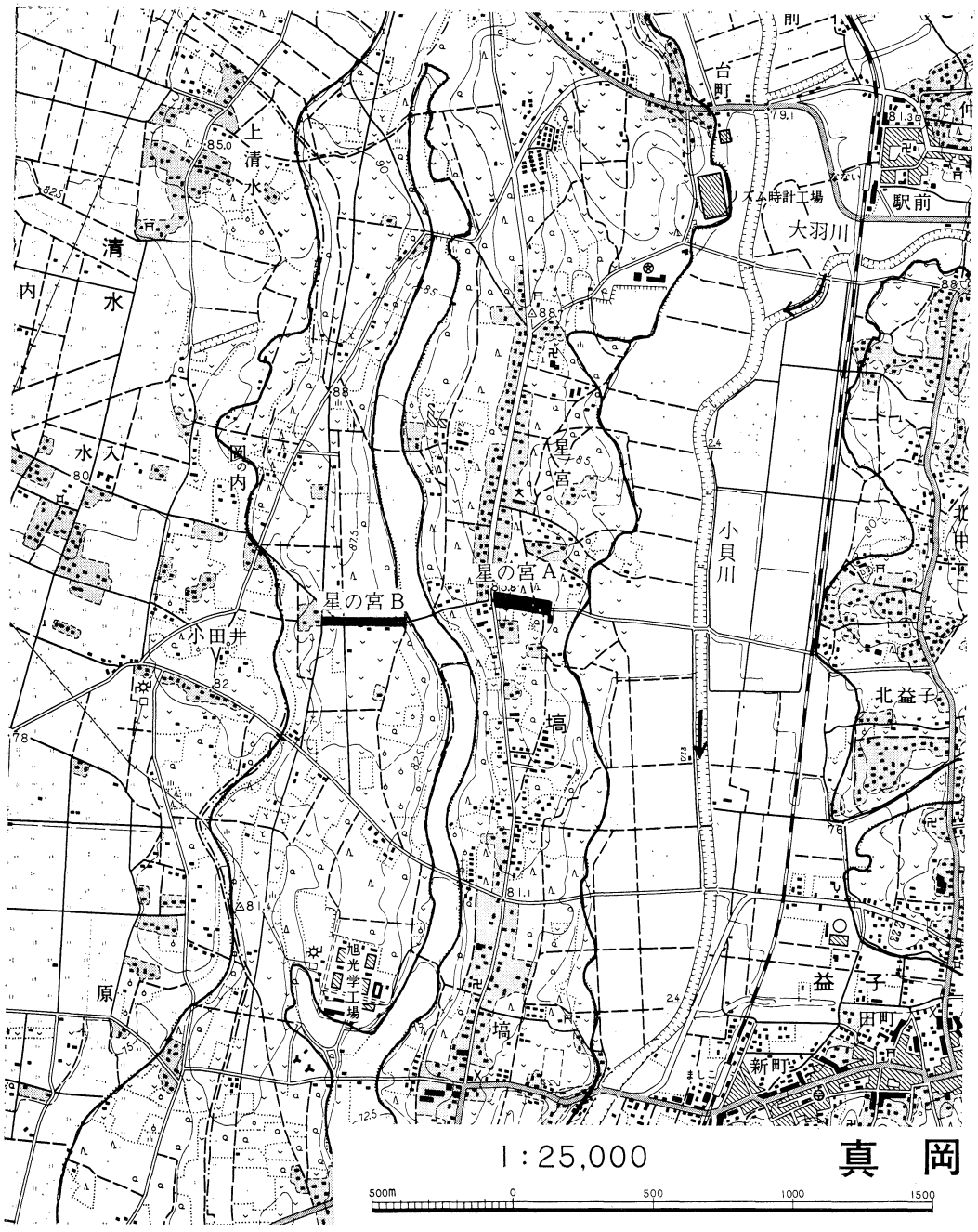
Ⅱ　遺跡の環境

1　遺跡の立地（図―2，3）

星の宮A遺跡は，芳賀郡益子町大字星の宮字東浦に所在し，益子町の中心地より北西方向約1.5㎞に位置する。

星の宮A遺跡が立地するのは，小貝川右岸の洪積台地（宝木面相当）の東縁にあたる。この台地は芳賀郡市貝町稲毛田付近から，真岡市根本まで南北に細長く延びている。幅約1000～1500㎡，長さ約15000㎡の規模を有している（図―4）。台地は東側では小貝川による狭長な沖積地をはさんで喜連川近陵（Ⅲ―1本文参照）と対時し，西側に一段低い洪積台地（田原面相当を接続させて五行川による比較的広い沖積地に面している（図―2）。遺跡付近では台地は幅約1000㎡をはかり，中央の幅約100㎡の沖積地によって東西二筋に分断されている。遺跡はこの東側部分に載る（図―3）。

遺跡は台地の東縁近くの緩斜面上に立地する。標高は83～86㎡をはかる。東側水田面との比高は最大で5㎡程度であった。遺跡付近は耕作などにより部分的には削平されていたが，ほとんどは山林となっており，その旧地形はそれ程の変化は受けていないものとみられた（但し現道部分は別である。）。



図—2　星の宮A，B遺跡位置図（太線は台地の縁辺を表わす）

2　周辺の遺跡

真岡市・益子町周辺の洪積台地や喜連川丘陵上及び八溝山地鶏足山塊西斜面には，先土器時代より歴史時代にわたる数多くの遺跡が確認されている。本遺跡は小貝川の西側に形成された洪積台地上に載る。小貝川は現在狭長な沖積地の中を南流している。本遺跡は出土遺物からみて古墳時代から歴史時代までの集落跡である。これらの集落跡はこの沖積地を利用して，かつて農耕を営んだ人たちの住居の場であろう。以下は時間的に本遺跡と関係の深い周辺の遺跡を図示し，概要を説明したものである。

星の宮ケカチ遺跡[1]（図—3の3），本遺跡の北方約1.3*km*に位置し，昭和50年4月に調査が実施された。検出遺構は住居跡24軒・掘立柱建物8棟等。遺物としては特に円面硯・石帯・ハート型装飾品・佐波理の匙が注目される。これらの遺物より塔法田遺跡との関係がうかがわれる遺跡である。調査者は集落形成時期の中心を9世紀前半としている。本遺跡の須恵器坏型土器の底部はヘラ切り離しのままで，ほとんど調整されることはない。益子町滝ノ入・倉見沢窯跡の製品に類似していると思われる。

星の宮浅間山古墳（図—3の4），ケカチ遺跡の南側に位置し，古墳時代前期の前方後方墳とされる。

風戸塚古墳（図—3の6），小貝川左岸の河岸段丘上に位置し，古墳時代後期の截頭円錐台形を呈する古墳。

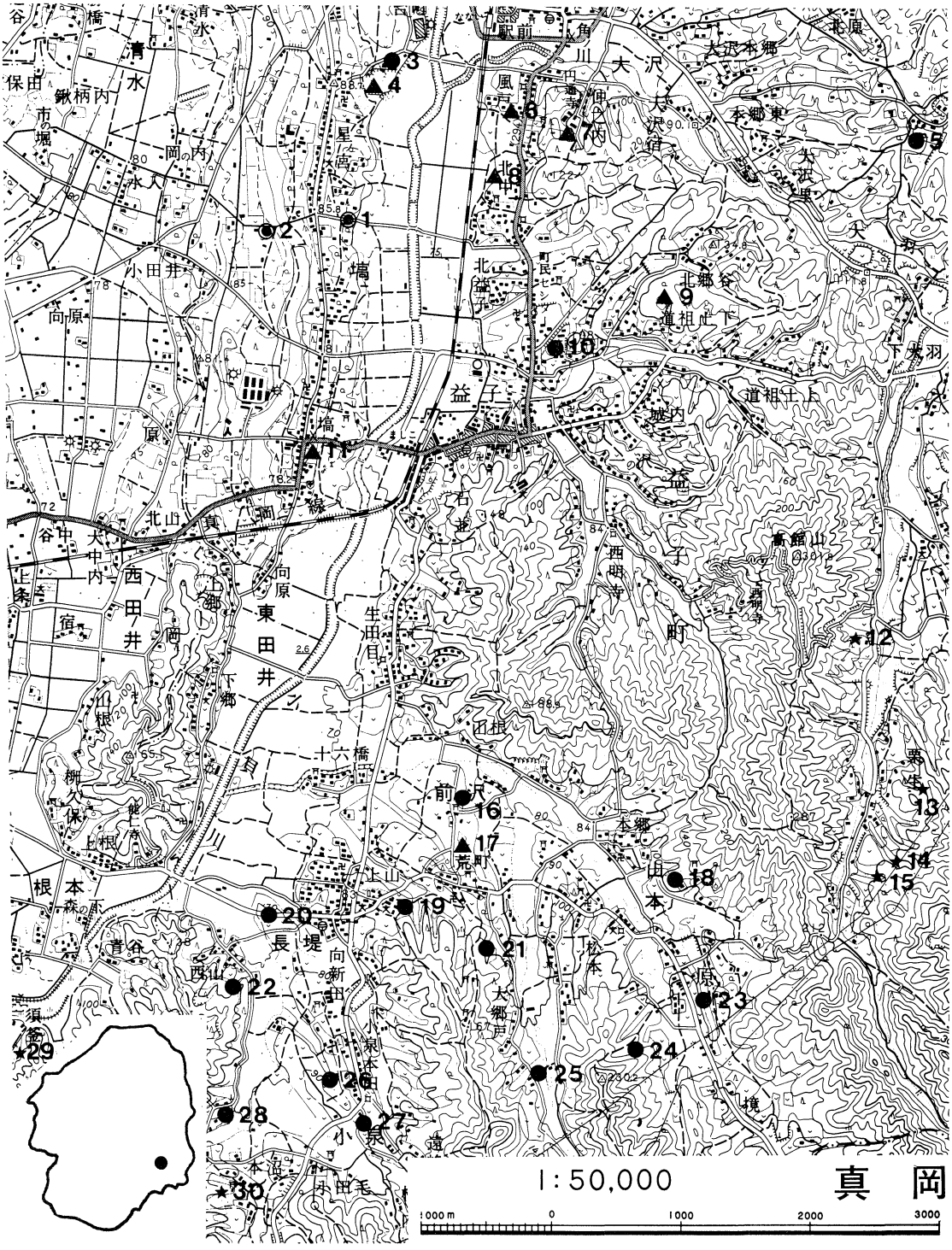
入定塚古墳（図—3の7）、南北に延びる尾根上に位置し，前方部が北に向く前方後円墳（又は後方墳）。

地郷谷古墳群（図—3の9），天王塚古墳を中心として，周囲に28基の古墳が存在する。天王塚古墳は古墳時代後期の前方後円墳で，昭和30年に調査が実施され，白銅鏡・青銅鈴・環頭大刀等多くの遺物が出土した。

大羽古窯跡群（図—3の12〜15），雨巻山山麓で大羽川の支流によって開析された沢の緩斜面に構築され，栗生地内の脇屋・東山・滝ノ入・倉見沢の4地点で確認されている。滝ノ入窯跡は昭和29年・倉見沢窯跡は昭和43年に調査され，両窯跡とも半地下式無階段登窯が1基検出された。遺物は須恵器坏が多量に出土し，坏底部と蓋内面にヘラ記号を施したものが多い。また，須恵器坏はヘラ切り離しのままで，調整は施されない。底径は口径の½以下のものが多く胎土は荒い小礫を含んでいる。滝ノ入窯跡からは女瓦も出土している。操業時期としては滝ノ入窯跡は10世紀前半頃，倉見沢窯跡は8世紀を中心に平安初期に考えられている。

本沼古窯跡（図—3の30），小貝川左岸の茨城県岩瀬町より延びる丘陵斜面。昭和50年に確認された。本窯跡出土の須恵器坏の器高は低く，底部はヘラ切り離しのままで，調整は施されない。口径に対し底径が½以上のものが多いと言われる。他に瓦片の出土も認められるので瓦窯跡が存在する可能性もある。

以上より，古墳の分布は狭長な沖積地をのぞむ台地・丘陵上に位置していることがわかる。また，洪積台地面には星の宮浅間山古墳等一・二例を除いて古墳は少なく，ほとんどが小貝川


1:50,000
真　岡
1000 m
0
1000
2000
3000
駅前
大沢本郷
北原
大沢
本郷東
大沢東
大羽
下大羽
北郷谷
道祖土下
道祖土上
城内
益子
塙
小田井
尚原
北山
真岡線
西明寺
高館山
西明寺町
石根
十六橋
前沢
荒町
本郷
上山
長堤
向新田
大郷戸
松本
西山
青谷
上郷
下郷
東田井
西田井
生田目
小泉
小田毛
本沼
境
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

図―3　周辺の遺跡

表一1　周辺の遺跡

図版番号	遺跡名	所在地	概要	備考
1	星の宮A	益子町　星の宮	先土器時代・古墳～歴史時代集落	昭和54年に県教委により発掘調査
2	〃　B	〃　〃		昭和56年に県教委により発掘調査
3	〃　ケカチ	〃　〃	歴史時代集落(石帯・佐波理匙等)	昭和50年に益子町教委により発掘調査
4	〃　浅間山古墳	〃　〃	前方後方墳1基	
5	新福寺	〃　新福寺	古墳時代後期の石室3基 弥生時代の土壙1基	昭和54・55年に県教委により発掘調査
6	風戸塚古墳	〃　風戸	古墳時代後期の円墳1基(径33m)	県指定史跡
7	入定塚古墳	〃　大沢寺前	前方後円墳又は後方墳1基(長43m)	県指定史跡
8	堂平古墳	〃　北中	前方後円墳1基	
9	北郷谷古墳群	〃　道祖土	天王塚を中心に28基の古墳 天王塚古墳(長43m)	昭和30年早稲田大により天王塚を発掘調査
10	聖ケ丘	〃　北益子	縄文・弥生・土師器散布地	県史資料編考古一に出土土師器掲載
11	バッカン塚古墳群	〃　塙	円墳4基	
12	脇屋古窯跡	〃　栗生	大羽古窯跡群の1つ	
13	東山　〃	〃　〃	〃	
14	滝ノ入　〃	〃　〃	〃　半地下式 無階段登窯10世紀前半頃	昭和29年早稲田大により発掘調査
15	倉見沢　〃	〃　〃	〃　半地下式 無階段登窯8世紀中心	昭和43年益子町教委により発掘調査
16	前沢台	〃　前沢		
17	狐塚古墳群	〃　〃	狐塚古墳(長25m)を含め前方後円墳2基，円墳3基	
18	八幡宮前	〃　山本	土師散布地	
19	田野中学校庭	〃　田野	縄文・土師散布地	
20	長堤	〃　長堤	弥生後期土師(和泉・鬼高)の住居跡	昭和50年県教委により発掘調査
21	荒町南	〃　荒町	土師散布地	
22	西山南	〃　西山	土師散布地	
23	西原	〃　原	土師散布地	
24	三の宮神社西	〃　松本	縄文・土師散布地	
25	大郷土	〃　大郷土	古墳時代・歴史時代集落	昭和53年県教委により発掘調査
26	小泉分校北	〃　小泉	土師散布地	
27	〃　南	〃　〃	縄文・土師散布地	
28	本沼	〃　本沼	歴史時代集落	昭和54年県教委により発掘調査
29	須釜古窯跡群	〃　須釜	窯跡6基 奈良から平安時代	
30	本沼古窯跡群	〃　本沼	小開析谷ごとに3群の分布 平安時代	

左岸の八溝山地鶏足山塊に多いことが知れる。しかし図示していないが，喜連川丘陵東斜面上には星の宮ケカチ遺跡を代表として途切れることもないほど土器の散布が認められ，多くの集落が存在すると思われる。また，益子町南部の雨巻山山麓などには，本県の古窯跡群として著名な窯跡群が存在する。

これらの他に本遺跡と関連の深いものとして，塔法田堂遺跡[3]・大内廃寺跡を挙げねばならない（これらの位置は付図の範囲上示せなかった。）。塔法田堂遺跡は星の宮A遺跡の西方約4.2㎞に位置し，芳賀郡衙跡と推定されている。大内廃寺跡も星の宮A遺跡の西方約4.3㎞で塔法田堂遺跡の南方約0.6㎞に位置する。特に星の宮ケカチ遺跡より出土した石帯[1]等の遺物は，郡衙の官吏関係者とのつながりを思わせる。

古窯跡群のうち調査されているのは滝ノ入[4]・倉見沢[4]の2遺跡のみである。この遺跡群より須恵器が供給されたと言われるのは星の宮ケカチ遺跡の他に真岡市籠谷の井頭遺跡(7)等が知られている。やはりこの頃周辺の遺跡にも同様にこの遺跡地帯から供給されたであろうと思われ，本遺跡もその一つとみられる。

文　献

(1)　「星の宮ケカチ遺跡」川原由典他　益子町教育委員会　昭和53年3月

(2)　「栃木県の考古学」大和久震平・塙静夫共著　昭和47年6月

(3)　「栃木県史」資料編・考古一　栃木県史編さん委員会　昭和51年3月

(4)　「下野の古代窯業遺跡」大川清，栃木県教育委員会　昭和51年1月

(5)　田熊清彦・染木誠両氏の御教示による

(6)　「益子の文化財」下野新聞社　昭和45年12月

(7)　「井頭」大金宣亮他，栃木県教育委員会　昭和49年3月

Ⅲ　栃木県の先土器時代遺跡と星の宮A遺跡

1　栃木県の地形と関東ローム層

本論に先立ち栃木県の地形と，先土器時代の遺物包含層である関東ローム層について概観しておきたい。（図―4参照）

(1)地形

栃木県は地形的に，東部山地，中央部低地，西部山地の三地形区に分けることができる。（阿久津1976，1979）

ⓐ東部（八溝）山地

東部山地は福島，茨城との県境に沿って南北に連なり，八溝山地とも呼ばれる。西縁は那珂川・小貝川の流路によって中央部平地と分離されている。幾つかの横谷[1]によって八溝・鷲子・鶏足の三山塊に分かれる。八溝山塊は八溝山（1012m）を主峰に600～1000m，鷲子山塊は400～500m，鶏足山塊は300～500mと南部に行く程高度は低くなる。各山塊とも浸食が進み多

くの小谷が発達している。小谷には大小河川によって形成された小規模な台地が見受けられる。当地域における先土器時代遺跡は鶏足山塊のこういった台地上に多く所在する。

ⓑ西部山地

北部山地は北部より那須火山，高原火山とその周辺の山地，帝釈山地，日光火山とその周辺の山地及び足尾山地の五地域に分けられる。ここではこれらのうち先土器時代と関連の深い高原火山とその周辺の山地，足尾山地について述べる。

高原火山とその周辺の山地

県の北部中央にある山地で，大佐飛・高原塩谷の三山地に分けられる。山地の東側は関谷構造線[2]によって那須野ヶ原，喜連川丘陵と境し，西縁は男鹿川，鬼怒川の谷によって帝釈山地日光火山とに分離されている。大佐飛山地は県境に沿って1700〜1900*m*の山が連なり分水界をなす。高原火山は前黒山（1678*m*）を中心とする塩原火山と釈迦ヶ岳(1794*m*)，鶏頂山（1766*m*）を中心とする高原火山（狭義）とにわけられる。高原火山の東，南部は溶岩台地が開けている。この台地上及びその南側の塩谷山地に数ヶ所の先土器時代遺跡が確認されている。

足尾山地

中禅寺湖—大谷川の流路以南の山地をいう。同山地の西は県境に沿って南流する渡良瀬川によって限られ，東縁は今市—栃木を結ぶ山麓線によって，南縁はほぼ国鉄両毛線を境に平野部に接している。北西部は600〜1300*m*の起伏量の多い山地からなり，東南部は600*m*以下の小起伏山地よりなる。北より黒川，大芦川・粕尾川・永野川などの南東流する河川によって山地の東部は著しく開析されている。南部では秋山川，旗川などが南流し平野部にて渡良瀬川に合流する。先土器時代遺跡はこれらの河川によって開析された小谷の台地上に所在する。

ⓒ中央部平地

中央部平地は北から高久丘陵・喜連川丘陵・県中南部の台地及び低地の四地形区に分けられる。これらのうち先土器時代遺跡の多く所在するのは喜連川丘陵，県中南部の台地である。

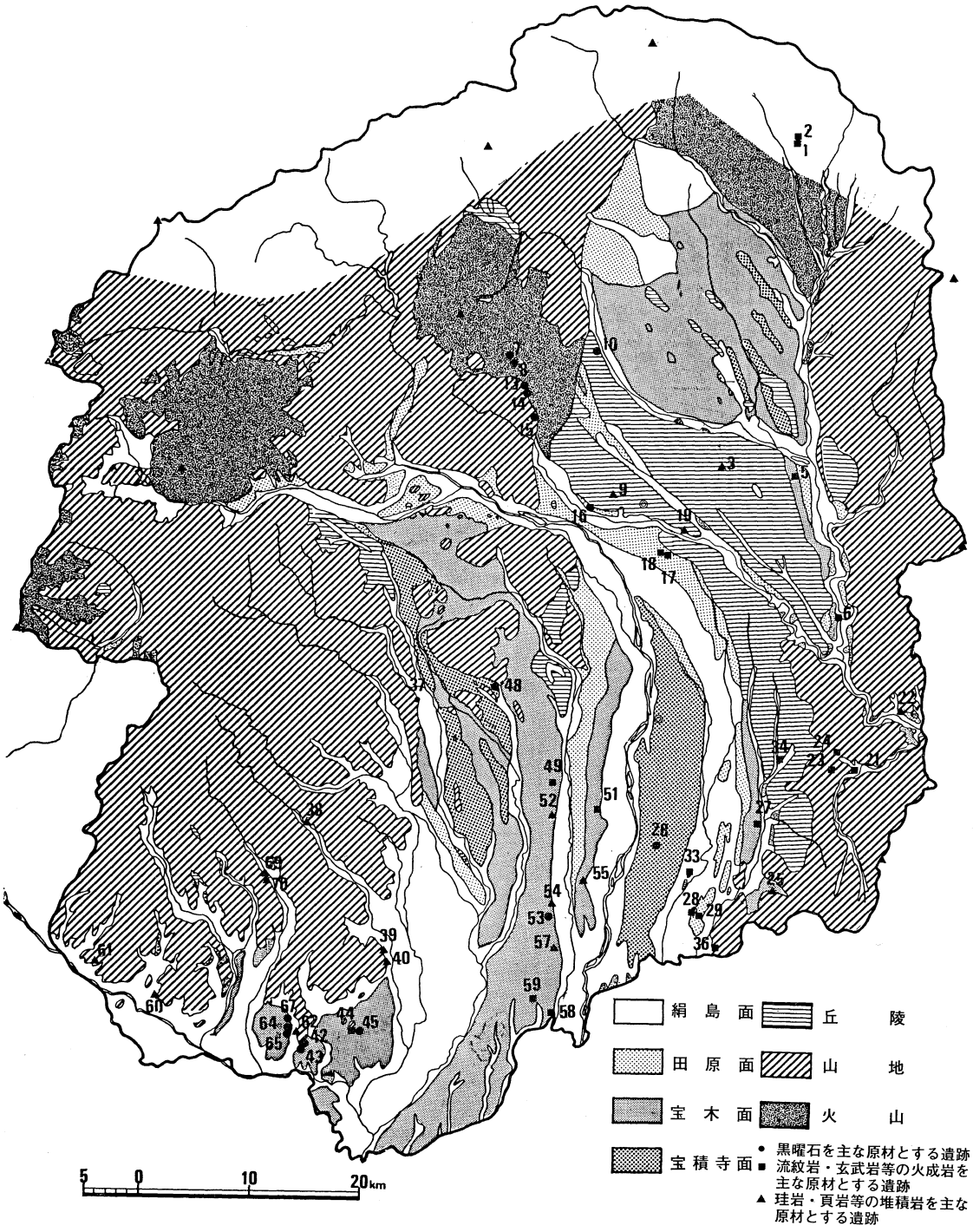
喜連川丘陵

高原火山南東麓から矢板・喜連川・益子にわたる地域に分布している。北部は標高約 400*m* 南部益子付近は 120*m*を示し，南東に向かって低くなっている。南東流する荒川とその支流によって丘陵は開析され小谷によって刻まれている。上面には平担面，流路沿いには小規模な河成段丘をつくっている。先土器時代の遺跡はその段丘面上に多い。

中南部の台地及び低地

県内中南部は鬼怒川，思川（いずれも南流する）などの大小河川によって形成された幾筋かの洪積台地（河成段丘）及び沖積低地からなる。これらの台地及び低地は高位より宝積寺面・宝木面・田原面及び絹島面の四地形面に区分されている（図—4）（阿久津1954，1957・関東ローム研究グループ1965）。

絹島面を除く三地形面は全て関東ローム層に覆われている。そのため各ローム層の層序関係を基準にして，各地形面の時間的関係を決定することができる。宝積寺面は鬼怒川東岸の氏家



図―4　栃木県地形区分図及び先土器時代遺跡分布図

表—2　栃木県先土器時代遺跡地名表（1）

番号	遺跡地図番号	遺跡名	所在地	立地	産出層位	遺物（　）は石質	文献
1	541	逃室上東畑	那須町豊原逃室	丘陵斜面	小川S直下	細石核・削器など(流紋)彫器（玉髄）	辰巳・渡辺 1,963
2	541	逃室佐台	那須町豊原逃室	丘陵斜面	田原ローム上位	尖頭器(流紋)，削器(珪)	〃
3	515	琵琶池	大田原市 藤沢琵琶池	丘陵斜面	片岡S直下	尖頭器？（頁）	海老原 1,963
4		二ツ室塚周辺	湯津上村小船渡	段丘(宝木面)		石核・剝片（頁），削器（安山）	中村 1,975
5	853	三輪仲町	小川町三輪仲町	段丘(宝木面)		ナイフ（安山），尖頭器（流紋）	田代 1,973
6		宮原	烏山町宮原	舌状台地		握斧（安山）	芹沢 1,968
7		高原A	矢板市長井高原	尾根端部	小川S直下	大形剝片，使用痕ある剝片（黒曜）	岩上 1,978
8		高原B	矢板市長井高原	丘陵端	田原ローム上位	尖頭器（黒曜）	〃
9	1,167	十文字	矢板市玉田十文字	丘陵斜面		尖頭器（硬質砂）	
10	1,611	上伊佐野	矢板市上伊佐野	丘陵		剝片（黒曜）	
11	2,205	植賀明神社前	矢板市上伊佐野	山麓台地		剝片（黒曜）	
12		塩河原	矢板市塩田	山麓台地		尖頭器（珪）など	
13	479	鳥羽新田箒根神社境内	塩谷町鳥羽新田	山地裾部	暗色帯上位	ナイフ，石核，剝片（黒曜）	田代 1,975
14		百反畑	塩谷町鳥羽新田	山麓台地	小川S直上	尖頭器など	〃
15	1,404	堂畑A	塩谷町上寺島堂畑	山麓	暗色帯最下位	礫器？（流紋），礫（黒曜）	田代 1,966
16	1,405	諸杉	塩谷町大宮諸杉	段丘(宝木面)	片岡S直上	尖頭器（流紋），スクレイパー（頁），剝片	海老原 1,963 田代 1,966
17	1,432	狭間田b	氏家町狭間田	段丘(宝木面)	今市P直下	有茎尖頭器(流紋)，剝片	〃 〃
18		治武工門	氏家町上野	段丘(宝木面)	田原ローム最上位	尖頭器（頁）	海老原 1,979
19		猿塚	喜連川町 早乙女野辺山	丘陵		有茎尖頭器（頁）	中村 1,964
20		西根B	高根沢町西根	丘陵	田原ローム最上位	有茎尖頭器（珪，流紋）	

表—3　　栃木県先土器時代遺跡地名表（2）

番号	遺跡地図番号	遺跡名	所在地	立地	産出層位	遺物（　）は石質	文献
21	222	源土原	茂木町牧野源土原	山麓台地		ナイフ（珪，安山），尖頭器（鉄石英），剥片	中村 1,980
22		小深	茂木町小深片倉	山腹		尖頭器（頁）	中村 1,964
23		天矢場	茂木町天子乙	山腹	今市P直下	有茎尖頭器（安山），スクレイパー（瑪瑙）	中村・橋本 1,972
24		刈宿	茂木町坂井刈宿	山腹		有茎尖頭器（安山）	大坪 1,964
25		山居台	益子町山本	山地斜面		礫器，尖頭器，握斧，ルバロア形石核（砂，珪，流紋）	谷島 1,968
26		前沢山根	益子町山本	山地縁辺		握斧（流紋）	〃
27		星の宮A（東浦）	益子町塙	段丘（宝木面）	黄褐色ローム下位（ソフトローム）	石刃（珪板），削器（珪質流紋），ハンマー（砂），剥片（珪）など	岩上 1,980
28	194	磯山	真岡市東大島磯山	独立丘陵斜面	暗色帯上位	ナイフ，彫器，石核（流紋），楕円形石斧（玢）	芹沢 1,977 中村・山越 1,974
29		大塚	真岡市東大島大塚			ナイフ（珪化木），スクレイパー（流紋）	中村 1,980
30		猿山	真岡市亀山，猿山	段丘（宝積寺面）		尖頭器（黒曜）	大坪 1,964
31		八木岡	真岡市八木岡	段丘（田原面）		細石刃（黒曜），剥片（流紋）	栃木県史 1,976
32		南高岡	真岡市南高丘	段丘		剥片（流紋）	〃
33		城内	真岡市城内（真岡小校庭）	独立丘陵		剥片（流紋）	〃
34		前窪	市貝町市塙・駒込	舌状台地	田原ローム上位	尖頭器（珪質流紋）	中村 1,979
35		高林	市貝町高林			削器（頁）	
36		打越（おっこし）	二宮町水戸部打越	舌状台地		尖頭器（玄武）	中村 1,976
37		坂田北	鹿沼市西鹿沼町	山地谷頭	田原ローム最上位	細石核，細石刃（黒曜），礫（流紋）	栃木県史 1,979
38	1,077	星野	栃木市星野町台	山麓台地	田原ローム～宝積寺ローム	珪岩製前期旧石器～後期旧石器	芹沢 1,966 1,968等
39	1,078	後山	栃木市薗部町後山	山腹		珪岩製前期旧石器	
40		向山	栃木市平井町	丘陵斜面	田原ローム～八崎P直下	珪岩製前期旧石器～後期旧石器	栃木県史 1,979

表—4　栃木県先土器時代遺跡地名表（3）

番号	遺跡地図番号	遺跡名	所在地	立地	産出層位	遺物（　）は石質	文献
41		藤岡神社脇	藤岡町藤岡			削器（頁）	栃木県史 1,979
42	372	後藤	藤岡町都賀	段丘（宝木面）		ナイフ（黒曜），掻器（鉄石英），尖頭器など	〃
43		後藤西	藤岡町後藤	段丘（宝木面）		ナイフ（頁）	田代 1,977
44		赤塚	岩舟町静和	段丘（宝木面）	暗色帯下位	ナイフ（頁）	
45		赤羽根	岩舟町静和	段丘（宝木面）	田原ローム上位	切出形ナイフ（黒曜），礫器（砂）	
46		下津原	岩舟町下津原	段丘（宝木面）	田原ローム上位	剥片（珪板）	
47		細谷正策氏蔵	岩舟町			有茎尖頭器	
48		上の原	宇都宮市戸室・上の原	山麓台地		石錐，刃器状剥片，細石核（黒曜）	宇都宮市史 1,972
49		雀宮	宇都宮市雀宮町612	段丘（宝木面）		尖頭器（安山），石核（安山，玄武），石刃（安山）	中村 1,966
50		青柳茂良氏蔵	宇都宮市雀宮町			尖頭器（頁），有茎尖頭器（珪）	
51		瑞穂野団地	宇都宮市瑞穂3丁目	段丘（宝木面）	暗色帯中位	剥片（流紋）	斎藤 1,974 岩上 1,977
52		権現山北	宇都宮市茂原花欠	段丘（宝木面）	田原ローム中	有茎尖頭器（流紋，珪），スクレイパー（珪）	五十嵐 1,979
53		木の宮	上三川町多功木の宮	段丘（宝木面）	田原ローム中	石刃，スクレイパー，剥片，切出形ナイフ（黒曜）	
54		舗飛内	上三川町多功舗飛内	舌状台地	ローム層中	切出形ナイフ，剥片（珪）	
55		仏沼	上三川町上蒲生・仏沼	段丘（宝木面）	田原ローム中	剥片（硬質頁）	中村 1,971
56		山王	上三川町本郷・山王			ナイフ（頁）	中村 1,980
57		薬師寺南	南河内町薬師寺	段丘（宝木面）		尖頭器（珪板），剥片（珪）	橋本 1,979
58		西の台	小山市萱橋西の宮	段丘（宝木面）		尖頭器（流紋）	栃木県史 1,979
59		木郷前	小山市出井・本郷前	段丘（宝木面）	田原ローム上位	ナイフ（珪化木，黒曜），彫器（珪化木）など	
60		大久保	足利市大久保町	山腹		珪岩製前期旧石器	芹沢 1,967

表—5　栃木県先土器時代遺跡地名表（4）

番号	遺跡地図番号	遺跡名	所在地	立地	産出層位	遺物（　）は石質	文献
61		平石	足利市山下町	山地		珪岩製前期旧石器	
62		原	佐野市西浦町原	山地斜面		掻器（珪）	佐野市史 1,975
63		平木山	佐野市犬伏仲町	段丘（宝木面）		石刃（黒曜）	〃
64		上林	佐野市高萩町上林	段丘（宝木面）		尖頭器(黒曜),石核(珪),ナイフ（珪質流紋）	〃
65		下林	佐野市高萩町下林	段丘（宝木面）		ナイフ（珪）	〃
66		上富士	佐野市富士見町上	山腹		珪岩製前期旧石器	
67		伊勢山	佐野市伊勢山町	独立丘陵		ナイフ（黒曜）	
68		随岸坊	田沼町戸奈良	山腹		剥片（珪）	栃木県史 1,979
69	926	山菅洞穴	葛生町山菅河原端	石灰洞穴		葛生原人人骨	
70	927	前河原洞穴	葛生町山菅前河原	石灰洞穴		葛生原人人骨	
71		小河原溜西	市貝町				
72		大溜東	鹿沼市池ノ森			剥片	五十嵐 1,979
73		大林	鹿沼市上石川		ローム層中	石核，剥片	〃
74		中泉87	壬生町中泉87		ローム層中	石核，剥片	〃
75		瓦作	宇都宮市大谷町瓦作			剥片	〃
76		富士見台	宇都宮市下欠町富士見台			尖頭器	〃
77		オシメヅクシ	宇都宮市江曽島町オシメヅクシ			石核	〃

町勝山から宝積寺，真岡，下館にわたって南北に分布する宝積寺台地，鹿沼市黒川東岸の鹿沼台地がこれに属する。宝積寺ローム層以上の関東ローム層全層準を堆積させている。宝木面は宇都宮市上町か石橋—小山にわたる宝木台地，河内町岡本から上三川にわたる岡本台地，今市市市街地から日光街道に沿って分布する今市台地（扇状地），足尾山地の南縁部の岩舟付近，佐野市の犬伏台地等である。被覆ローム層は宝木ローム層以上である。田原面は田川左岸の田原台地，鬼怒川左岸の蒲須坂台地，黒川右岸の壬生台地等である。被覆ローム層は田原ローム層以上と考えられる。この他宝積寺ロームより古期の戸祭ローム層を宇都宮市北部赤坂付近と喜連川丘陵の一部で小範囲に見ることができる。

(2) 関東ローム層（阿久津1954・1957，関東ローム研究グループ1965）

台地や丘陵の上面を覆うテフラは関東ローム層の名で総称されている。先土器時代の遺物を包含するのは，現在のところ珪岩製前期旧石器群を除けば，田原ローム層，宝木ローム層の上位に限られている。関東ローム層は黄褐色の火山灰からなっており間に数層の軽石層などをはさんでいる。

宇都宮付近の関東ローム層の標準層序は宇都宮市満美穴の段丘崖などにみられる。[3] 上位より田原・宝木・宝積寺の三ローム部層に分けられる。田原ローム層は層厚約1.5m，七本桜軽石層，今市軽石層，火山灰層の三層からなる。上位は表土に覆われる。七本桜，今市軽石層は男体火山を給源とする。今市軽石層下位の火山灰層は宝木ローム層上位の暗色帯に接している。喜連川丘陵に分布する田原ローム層中には片岡・小川のニスコリア層が含まれる。宝木ローム層は厚さ4m，上位より火山灰層，鹿沼軽石層，火山灰層の順となる。最上部は暗色帯と呼ばれる有機質を多量に含む層がある。鹿沼軽石は赤城火山の噴出物である。下位の火山灰層と鹿沼軽石の接する部分にも一条の暗色帯がある。この火山灰層中には三層の軽石層が認められる。宝積寺ローム層は厚さ15mあり上部と下部に分けられる。上部は厚さ4mで中位に満美穴スコリア層をはさむ。下部は風化の進んだ火山灰層で間に真岡軽石層をはさむ。

各層準の年代については，^{14}C 法などの測定年代によって，七本桜軽石層と今市軽石層の境界が12,000〜14,000年前，田原ローム層基底が20,400年前，宝木ローム層下部が40,000年前，鹿沼軽石層は40,000年よりは古くはないとされる。

（註）

(1) 馬頭—大子，茂木—長倉などの横谷によって北より八溝，鷲子，鶏足の三山塊に分けられる。

(2) 断層活動をともなった地質構造線で，木の芽沢から塩田まで南北に延びる。

(3) 関東ローム研究グループ編「関東ローム」には上位よりA_1A A_3の名称が与えられているが，それぞれ田原，宝木，宝積寺ローム層と同義である。

2　栃木県の先土器時代遺跡（図—4）

1980年時点までに紹介，確認された県内の先土器時代量跡は総計70ヶ所を数える。これらを表示したものが表—2～4である。またこれらのうち主なものについて栃木県の地形区分図[1]（関東ローム研究グループ1965を基本にした。）に載せたものが図—4である。地名表に含めた以外にも幾つかの遺跡が知られていること，先土器時代のものか否か検討すべきものも含まれていることは注意を要する。なお文献の欄には各遺跡について最初に触れた文献の著者名とその発表年を記した。これら文献については報文末に挙げた。図—4に載せた遺跡数は53ヶ所である。ドットは遺跡の位置とともにそれぞれの遺物に利用された主な原材（石質）を表わす。番号は地名表の番号である。

分布を概観すると，いくつかの集中地区がある。それと箇条書的にまとめると次の通りとなる。

①，高原火山とその南に接続する塩谷山地（№.7～8，13～15）

②，矢板から烏山にかけての喜連川丘陵とその周囲に接続する洪積台地上（№.3，5～6，9～10，16～19）

③，八溝山地南部（鶏足山塊）及びその西側南北に延びる洪積台地上とその周辺（№.21～29，33，36）

④，宇都宮から南へ延びる宝木台地と鬼怒川以西の洪積台地上（№.48～49，51～55，57～59）

⑤，足尾山地の支谷に形成された台地上と足尾山地の縁辺（№.38～40，60～61）

⑥，足尾山地の南端に接続する洪積台地上（№.42～45，62，64～65，67）

地形的には，宝木面に比定される洪積台地[2]の縁辺部が選ばれることが多い。また以上の6地区のうち，原産地との関連で注意すべきものは①及び③である。①は黒曜石を主な原材とする遺跡群の所在する地区。③は流紋岩，安山岩などの火山岩を主な原材とする地区。①は高原火山系の黒曜石原産地を控えた地区である。③は第四系の凝灰岩層中にノデュールの形で入り込んだ流紋岩などを産する地を控えている[3]。

県内の先土器時代量跡の利用原材と地域性は中村紀男氏[4]（中村1980），田代寛氏[5]（田代1975）によって注目されていた。遺跡総数の少なさは否めないが，この分布状況は，本県における先土器時代遺跡群を地域的なまとまりとして把握し得る可能性を呈示する。なお①に含まれる遺跡は高原火山溶岩台地縁辺に多く認められ，標高500～700*m*に位置する。同様に②は鶏足山地の小支谷にみられる小規模な洪積台地上と，南流する河川によって形成された南北に延びる台地の縁辺に立地する。標高は200～300*m*である。

これらが地域的なまとまりとしてどのような形で把握し得るかは剥片剥離技術の点からも今後検討する。

（註）

(1)　図は関東ローム研究グループによる関東ローム地質図を利用したものである。地質図と

はふつう表土層下の層についてのみの分布状況，或いは特定の層についてのみの分布状況を表わすものであるが，例えば宝積寺ローム以上のローム層を載せる地形面を宝積寺面というのであるから，関東ローム地質図は地形面分布図（地形区分図）的な性格を持っている。

(2) 阿久津純1955，1957などの命名による。

(3) 提橋昇氏（栃木県立博物館設立準備室主幹）の御教示による。

(4)，中村氏はその磯山遺跡の発掘調査の結果から，石器製作原材に良質な原石に恵まれなかった地域として③地区を把えようとしている。

(5) 田代氏は地域性云々については直接言及してはいないが，黒曜石原産地を控えた烏羽新田遺跡周辺（①地区）の綿密な遺跡調査の重要性を指摘した。更に①地区は田原ローム層に鍵層の発達の良いことから，この地区が編年研究上大きな意味を持ち得るとしている。

3 星の宮A遺跡の層位

星の宮A遺跡の載る台地は宝木面に対比される。従って被覆ローム層は宝木ローム層以上と考えられる。宇都宮市周辺における田原宝木ローム層については Ⅲ—1に前記した。星の宮A遺跡の田原・宝木ローム層も宇都宮周辺のそれと大差ない。特徴的な堆積物としては，七本桜・今市軽石，鹿沼軽石などがある。宝木ローム層中には二枚の暗色帯を認めることができる。（阿久津1955・1957，関東ローム研究グループ1965）このうち上位の暗色帯上面をもって田原ローム層と宝木ローム層の境界としている。

田原ローム層と宝木ローム層とを境する暗色帯は北関東では降灰休止期にあたるとし，立川ローム層下部層の堆積時期に対比される（関東ローム研究グループ1965）。また，立川ローム中の二枚の暗色帯（武蔵野台地に広く認められる。）に連続するものとされている。換言すれば，田原ローム層は立川ローム中暗色帯より上の層準に相当し，宝木ローム層は立川ローム層下部層から武蔵野ローム層のいずこかに相当することになる。但し，宝木ローム部層中の鹿沼軽石層以下は武蔵野ローム層中のいずこかに対比されている。つまり，宝木ローム部層中の鹿沼軽石層より上の火山灰層は立川ローム層中に対比される可能性がある。

星の宮A遺跡での発掘調査地区の層序は次のように分けられた（図—5）。

Ⅰ層～Ⅲ層：表土層，Ⅰ層は腐植土層，Ⅱ層は黒褐色土層，Ⅲ層には少量のローム粒を含む

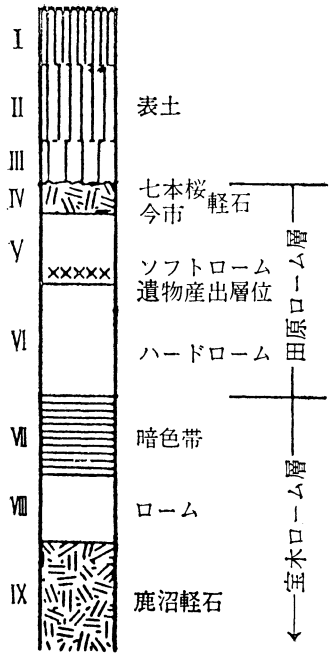
Ⅳ層：黄褐色土層，七本桜・今市軽石粒を多量に含む。宇都宮付近の七本桜，今市軽石層に相当する。

Ⅴ層：黄褐色火山灰層（ソフトローム）

Ⅵ層：暗黄褐色火山灰層（ハードローム）粒層より緻密。

Ⅶ層：暗色帯，上下の火山灰層に比べてやや黒味を帯びる。炭化物が混入することがある。

Ⅷ層：黄褐色火山灰層，著しく粘土化が進行している。下位に黄色軽石粒を含む。



図—5　星の宮A遺跡，田原，
宝木ローム層模式柱状図

Ⅸ層：黄色軽石層，鹿沼軽石層である。

以下については不明である。Ⅳ層からⅥ層が田原ローム層，Ⅶ層以下は宝木ローム層である。七本桜・今市軽石層を含む田原ローム層はその供給源が主として男体山などの日光火山とされ，鹿沼軽石層は同様に赤城火山とされる。

星の宮A遺跡の先土器時代遺物群の包含はⅤ層上位から下位の約20㎝の間に限られている。検出された礫群の下底はⅤ層下位にある。図—5の×印はその位置を表わしている。これを南関東（主として武蔵野台地）の立川ローム層の中に強いて位置づけるとしたら，彼の層準でいうⅢ層からⅣ層上部の間のいずこかに相当するものと推測する。なお，後述するが，星の宮A遺跡出土遺物はⅢ層出土石器群に近いものと考えられる。

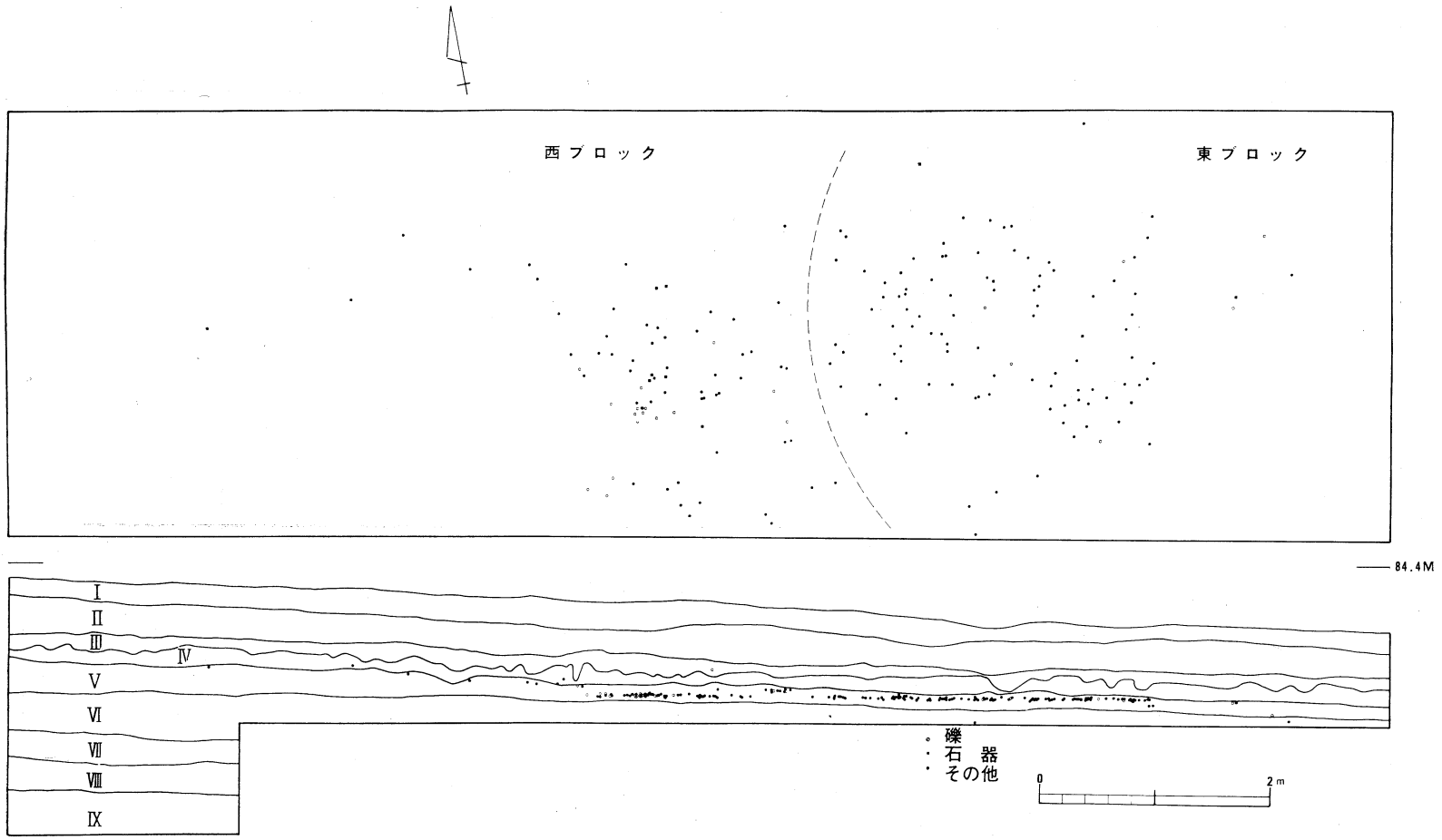
Ⅳ　発掘調査

1　先土器時代

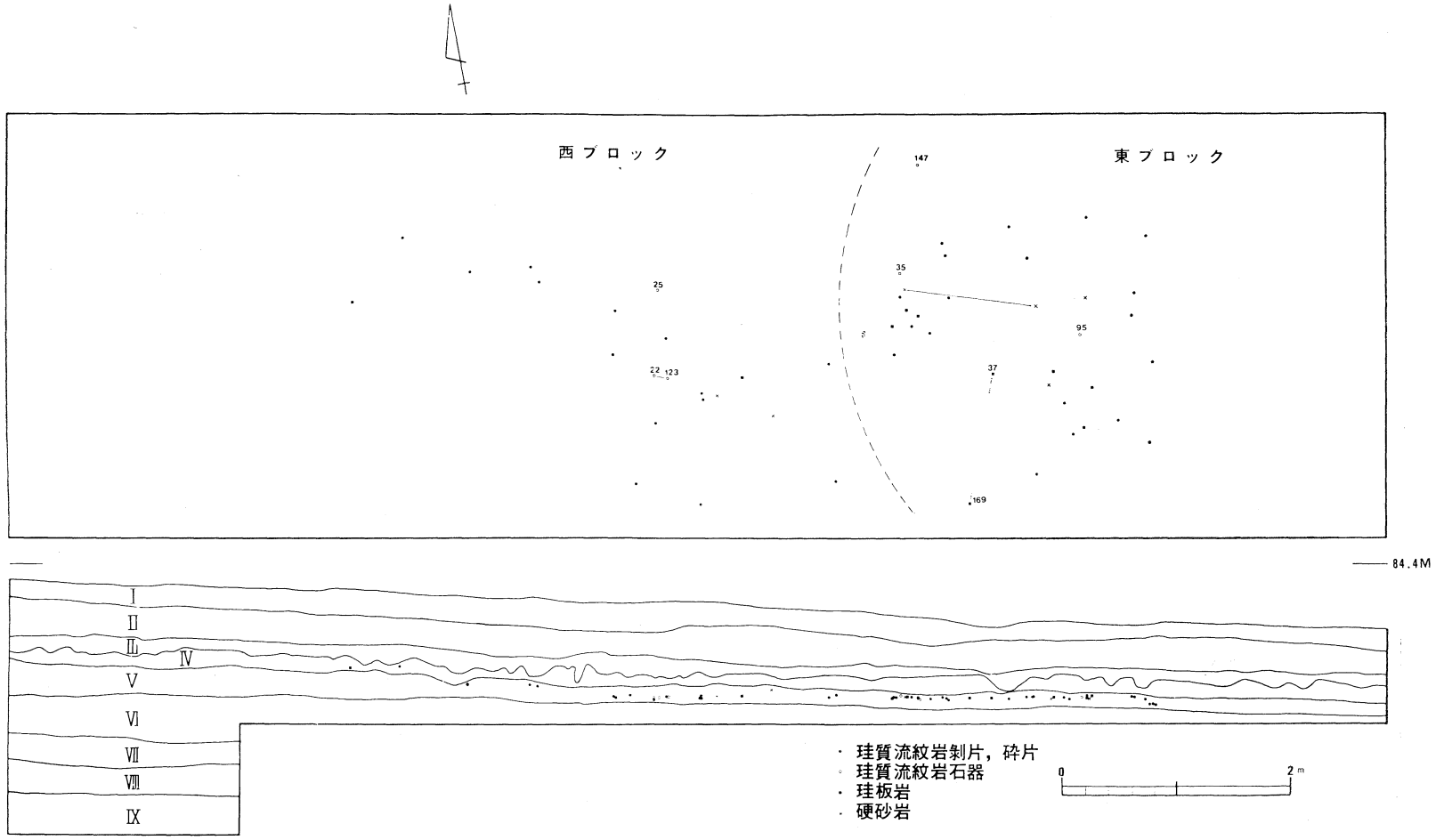
(1)遺物の遺存状態

（*a*）遺物の平面分布　検出した遺物の総数は202点である。このうち原位置の明らかなものは190点を数える（石器の種類及び石質，各々の全体量に占める割合は表—10に掲載した）。これらの分布状況をみると，平面的に東西2個所の集中部が認められる（図—6）。これらを東ブロック，西ブロックと呼称する。ブロックが東西2個所あることは，出土礫群の分布状況によっても確認することができる（図—9）。更に遺物各々の出土レベルを投影した断面図にてもそれらは知れよう。また以下に述べるようにこれら東西2個所のブロックにはいくつかの相違点がある。しかし，その境界をどこにするか明確な線引きをすることはできない。ここでは，東西2ブロックの遺物出土状態の概要を記しながら，各々の相異点についてまとめる。

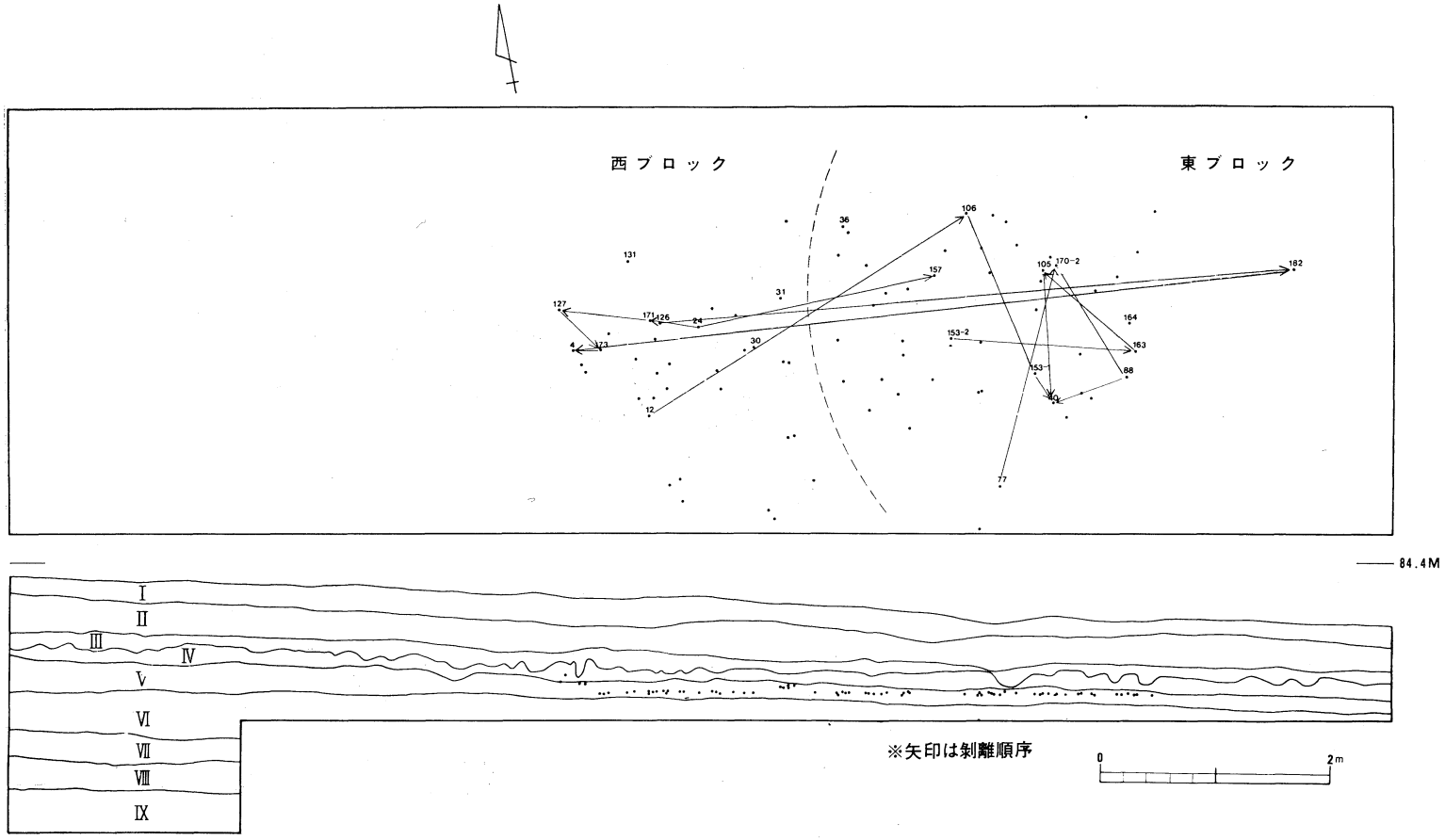
東ブロック；東西約3.5*m*，南北約3*m*の範囲に遺物は集中していた。一ブロックのほぼ全容をつかむことができたものと考える。東ブロックの中では9個の礫を検出した。礫の出土状態は西ブロックに比べてより散漫である（図—9）。9個の礫のうち3個は西ブロックの礫と接合する。検出資料の総数は112点，石質からみたその構成はチャート65点，珪質流文岩「①[1]」18点同②4点，珪板岩9点，硬質砂岩3点，細粒砂岩4点，石英斑岩2点，頁岩2点，その他4点である。石器の構成は削器2点（図—10の147，図—17の166），石刃1点（図—10の169＋



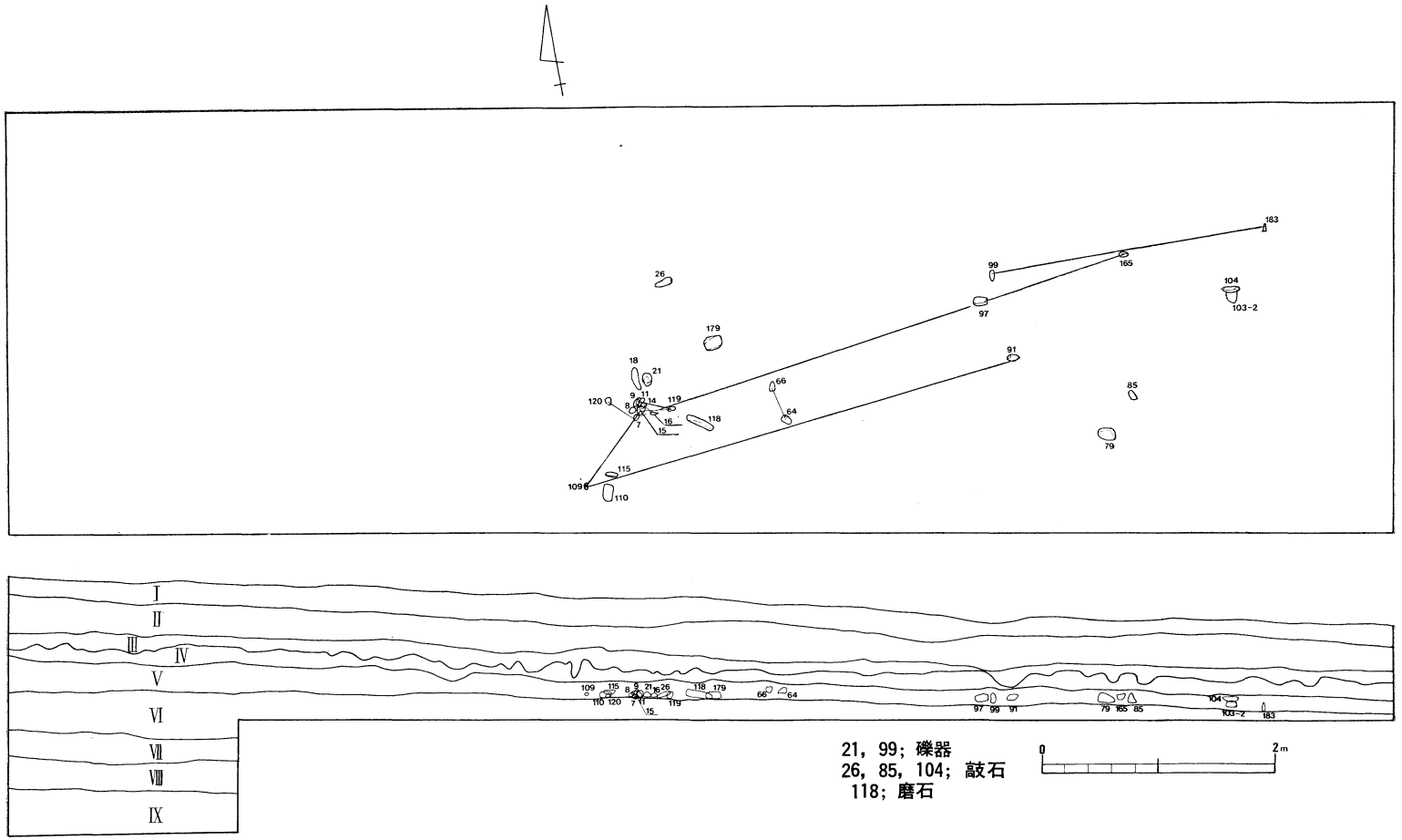
図—6　遺物平面分布図



図—7　遺物平面分布図（珪質流紋岩，珪板岩，硬砂岩）



図—8　遺物平面分布図及び接合関係（チャート）


183
99
155
104
103-2
26
97
179
91
18
21
66
85
120
9
8
7
14
119
16
15
118
64
79
115
109
110
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
21，99；礫器
26，85，104；敲石
118；磨石
0
2m

図—9　遺物平面分布図（礫）

37），礫器1点（図—16の99），敲石2点（図—16の85・104），剥片・砕片あわせて105点よりなる。

これらの資料はⅤ層(2)中位から同層上位にかけて約20㎝の上下幅をもって検出された（図—6）。このうち最集中部位（基準層位）[3]はⅤ層中位とみられる。これは西ブロックの基準層位より，同じⅤ層のうちとはいえ，やや上位となる。

資料総数に占める礫検出個数の割合は約8％である。西ブロックにおけるそれよりかなり低い。これは後述するが，東西2ブロック各々の性格の違いに所以しているものと考える。

剥片・破片のほとんどは珪質流紋岩，珪板岩，硬砂岩，チャートの四種類に分かれる。これらは接合関係などから更に七種類以上の個体別資料に分けられる。

西ブロック；東西約2㎞，南北約2.4㎞の範囲に遺物は集中していた。ブロックの西側の一部には19個の礫よりなる礫群が検出された。検出資料総数は78点である。石質からみたその構成はチャート36点，珪質流紋岩①15点，同②2点，珪板岩2点，硬砂岩2点，細粒砂岩15点，石英斑岩3点，頁岩1点，その他2点である。石器の構成は削器1点（珪質流紋岩①，図—10の25，123＋22），礫器1点（図—16の21），敲石（図—16の26），磨石（図版18の118）剥片・砕片あわせて72点よりなる。

これらの資料は，礫群の位置するⅤ層下底を最下位としてⅢ層下位までの約30㎝の幅をもって検出された。このうち最集中部位はⅤ層下位に認められる。[6]礫群の下底，つまりⅤ層最下底（図—9）を西ブロックの基準層として良かろう。[7]

礫検出個数の資料総数に占める割合は約24％である。東ブロックよりかなり高くなる。

（b）東西2ブロック間の相違点

東西2ブロックの遺存状況について以下の点に相違をみることができる。

①，出土遺物の垂直分布（図—6）

②，出土礫の集中度（図—9）

①について；図—6の堆積土層断面図における遺物の垂直分布の状況をみると，それぞれの基準層位に差異がある。つまり東ブロックでは基準層位はⅤ層下位にあり，西ブロックのそれはⅤ層の中位から上位と認められる。しかし，出土層準を考慮しないで定規をあてれば，ほぼ水平に分布していることがわかる。

東西2ブロックを検出した地区は西高東低の緩かな傾斜地にある。自然堆積する土層は後世の撹乱がない限り，各土層堆積時の地形のエレベーションに即応する。当地区の各土層には多少の凹凸はあるが，層の逆転・人為的な撹乱などは全くない。各層は現地形の示すようにいずれも西高東底に緩かな傾斜をもって堆積している。

東西2ブロックは接合資料の分布（図—8，図—9）でみる限り同時間内に存在していたものである。とすれば東西2ブロックの遺物の垂直分布が地形に対応していないのはなぜか。

②について；西ブロックには19個の礫が出土している。東ブロックでは9個である。また東ブロック出土礫のうち3点は西ブロックの礫と接合する（図—9）。遺物の水平移動のメカニズムはいくつか考えられようが，東ブロックの接合礫3点はもともと西ブロックに所属してい

たものとすれば，東ブロックの礫個数は5個となる。更に西ブロックには10数個からなる礫の集中部がある。この10数個の礫は全て火を受けた痕跡が[8]認められる。中のひとつはタール状の付着をもつものがある。東ブロックにはこのような集中部はない。西ブロックの礫の集中部については，いずれの礫も赤化していること（火を受けたことによる），それらが集中していることなど，やはり炉址的な性格を認めることができよう。

この他，東西2ブロック各々は，礫器・敲石，又は磨石など石器製作或いは道具製作に係るものをそれぞれもっている。

（c）遺物の遺存状態の示すもの

以上の遺物の遺存状態について次のようにまとめることができる。

①，本遺跡では東西2つのブロックが検出された。

②，これら2ブロックは，遺物の接合関係で見る限り，同時的に残されたものである（図―8）。

③，遺物はⅤ層上位から下位にかけて包含されていたが，その基準層位は礫群の下面，Ⅴ層下位にある。

④，東西2ブロックはそれぞれ，敲石等の導具或いは石器製作に関係の深い遺物を持っていることから，ともに石器製作の場であったとみることができる。

⑤，西ブロック検出の礫群はおそらく炉址的な性格を持つ。

⑥，東西2ブロックは，それぞれ別々に形成されたが，ひとつの有機的な関係をもつもの，いわゆるユニット[9]として把握できる。

（註）

(1)，当遺跡にて出土した資料のうち珪質流紋岩にはその硬度・色調から二種類に分けられる。それぞれ珪質流紋岩①及び②とした。詳細は出土遺物の項参照のこと。

(2)，本文65頁「Ⅲ―3，星の宮A遺跡の層位」参照のこと。

(3)，ここでは遺物の垂直分布の最集中部位或いは礫群の下底をこのように表現した。

(4)，註(1)に記したように珪質流紋岩は二種類に分けられる。チャートは接合関係から三種類に分けられる。

(5)，註記(2)を参照。

(6)，礫群下底（Ⅴ層最下底）よりはやや上位である。

(7)，相模野台地の月見野遺跡群の調査（明治大学考古学研究室，月見野遺跡調査団；1969，「概報月見野遺跡群」）では，礫群と石器群のいはば法則的な上下の位置関係の把握から礫群がひとつの生活面を限定する可能性を指摘している。本報告でいう基準層とは半ばその生活面を意識している。

(8)，火を受けた痕跡とは表面が赤化しているものをいった。表面の赤化している礫は，本遺跡出土のものは全て破損礫である。

(9)，遺物の単なる地点分布1ケ所をユニット或いはブロックと称するならば，星の宮A遺跡

は2ユニット或いは2ブロックに亘って分布したことになる。ここでは神奈川県小園前畑遺跡（鈴木次郎・小野正敏 1972；「小園前畑遺跡発掘調査報告書」神奈川県綾瀬町教委）で主張されたように，遺物の集中分布（遺物の平面的な最小単位）を「ブロック」として把え，いくつかのブロックの有機的なまとまりを「ユニット」として考えることにした。

(2)出土遺物

遺物は東西2ブロックと2個所の集中部をもって検出された。このブロックは先述のとおり同時的に存在していたものである。従って出土遺物については，東西2ブロックをとりまとめて記述する。

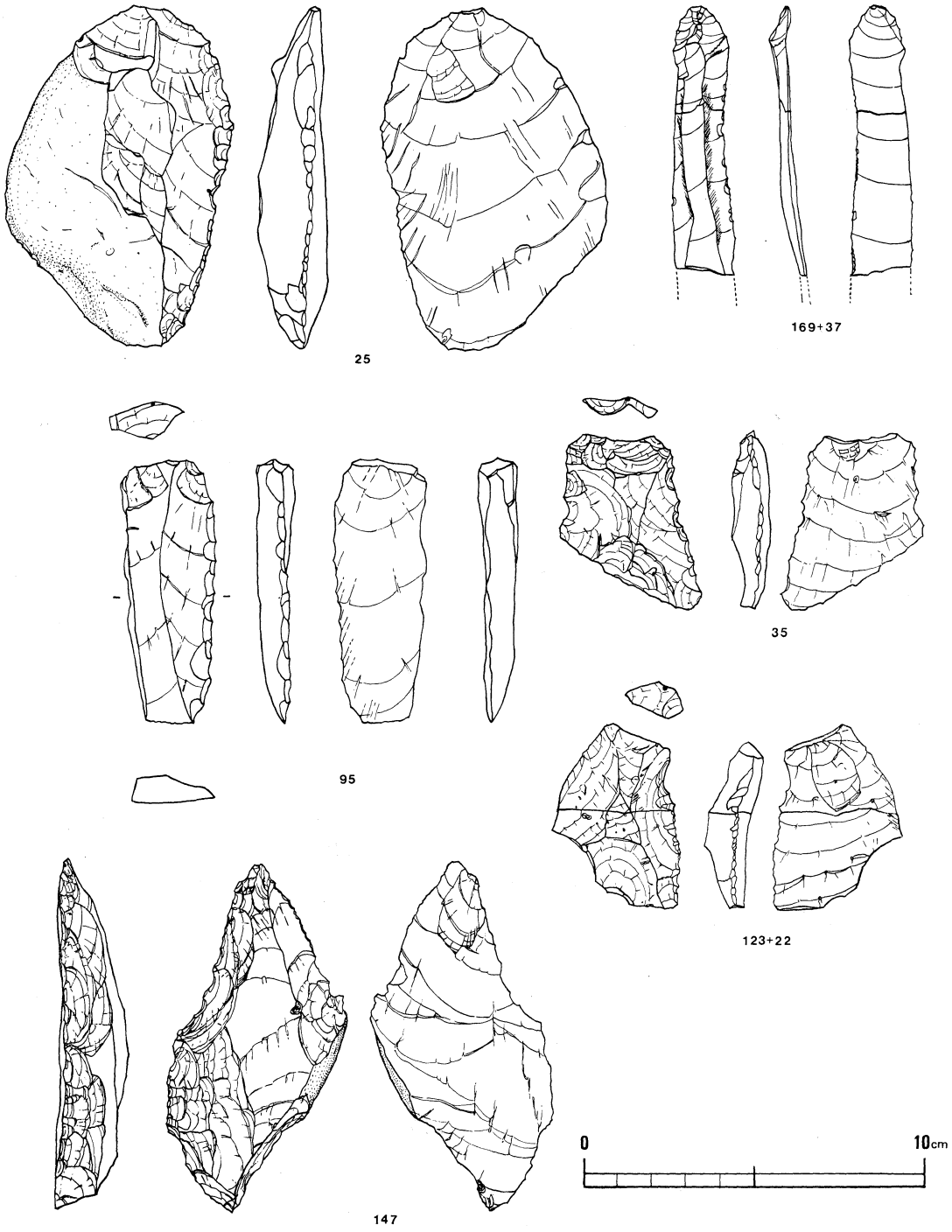
今回検出した遺物総数は202点を数える。これらについて器種毎に大別すれば次のとおりとなる（石器の種類及び石質について，各々の全体数に占める割合は表—10に掲載した）。削器7点（図—10，図—13の167，図—17の166），石刃1点，剥片・砕片それぞれ82点・80点，礫器3点，敲石4点，礫22点，その他2点。

削　器

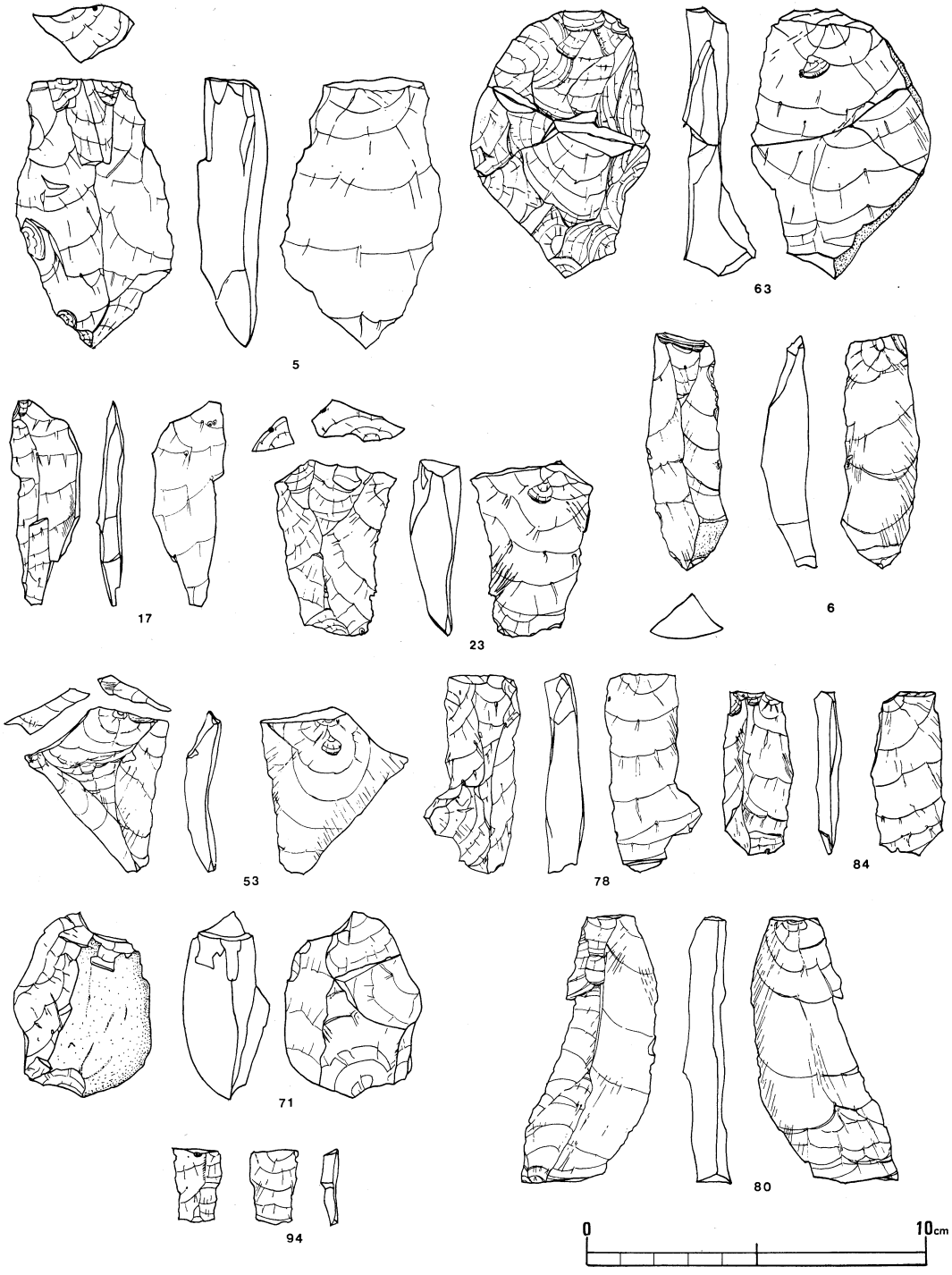
削器として掲載したものは，図—10の25，35，95，123＋22，147・図—13の167・図—17の166の7点である。器の大小はあるが，いずれも剥片が素材となっている。更にいずれも背面の一縁辺にのみ刃部作出のためのリタッチを見ることができる。石質はチャート製の166を除き，全て珪質流紋岩①[1]製である。これらは素材となった剥片毎に25と147，95と167，35と123＋22と166の三種に分けることができる。それぞれを仮りに削器①，同②，同③とする。

削器①；大型の剥片を素材としたものである。両者とも背面の一部に自然面を残す。素材となった剥片は別片剥離の早い段階に剥離されたものであり，同石質の他の剥片とは異なっている。25は背面左側に大きな自然面を残す。同面右側縁にのみ刃部作出のためのリタッチをみる。背面右側には主要剥離面（裏面）と剥離方向を同じくするネガティブな剥離面が四条みられるこれは目的的剥片剥離による痕跡ではなく，本剥片の刃部を作上げるための剥片調整剥離痕であろう。147は部厚い剥片が素材となっている。背面右側の一部に自然面を残す。主要剥離面にはバルブは残されていない。背面の刃部作出のために取去られたものであろう。背面には主要剥離面の剥離方向とは逆のネガティブな剥離面が3～4条みられる。背面左側には背面のネガティブな背離面に直交する9つの剥離と細かいリタッチによって刃部作出がなされている。本器は剥片の一縁辺にあるリタッチによって一応削器としたが，バルブが取去られている尖端部分にも意味があろう。尖頭器の未製品である可能性もあるものと思う。

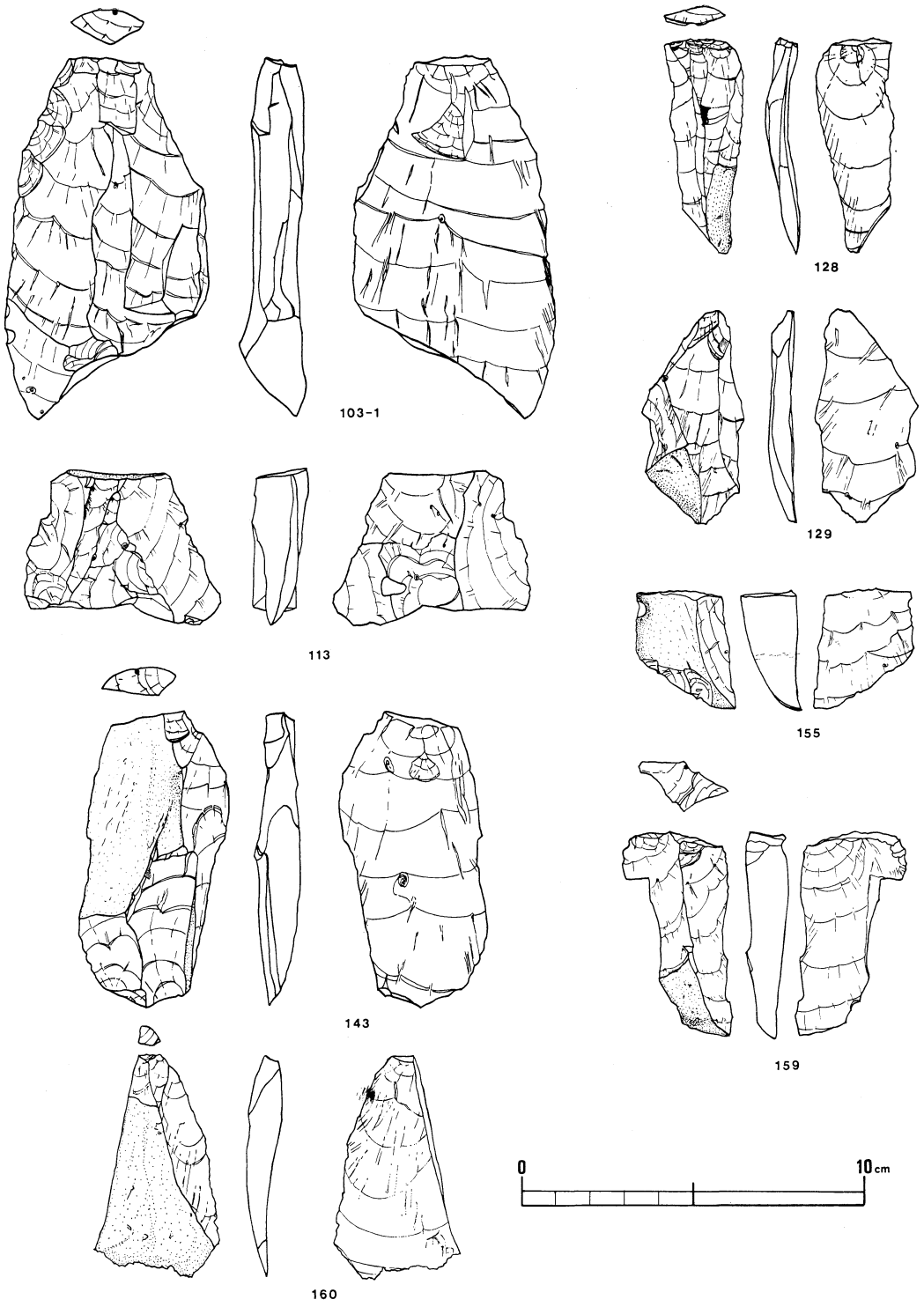
削器②；石刃に近い剥片が素材となったものである。これらの素材となった剥片が，本遺跡の目的的剥となるものであろう。95の素材となった剥片は形態的に石刃に似る。このような剥片を剥離するための石核はかなり形の整っていたものであろう。背面右側縁に刃部作出のためのリタッチがみられる。背面には主要剥離と剥離方向を同じくする二条のネガティブな剥離面がある。95と同等な剥片の剥離痕であろう。167は背面左側縁に刃部作出のための疎なリタッ



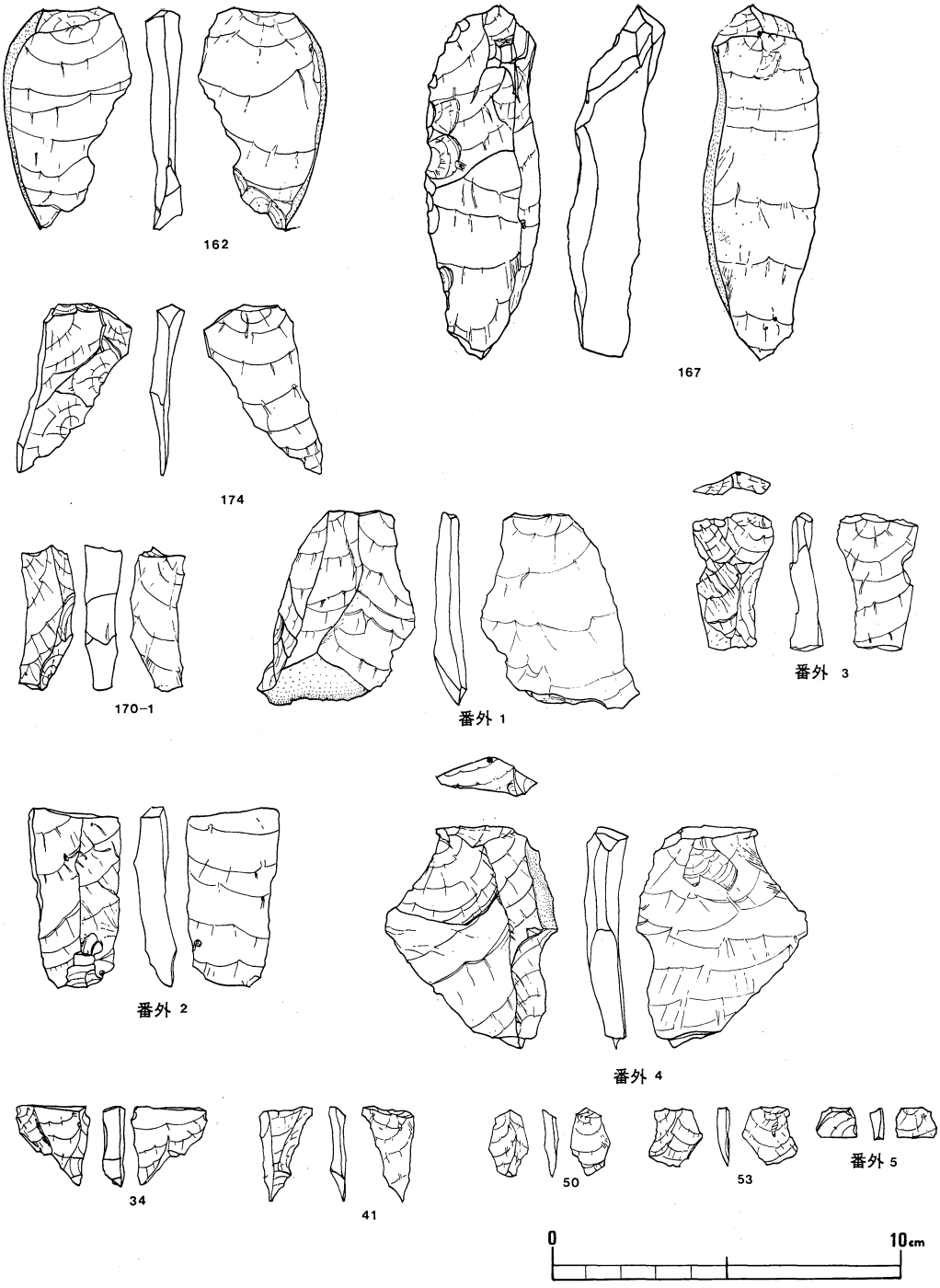
図—10　出土石器実測図



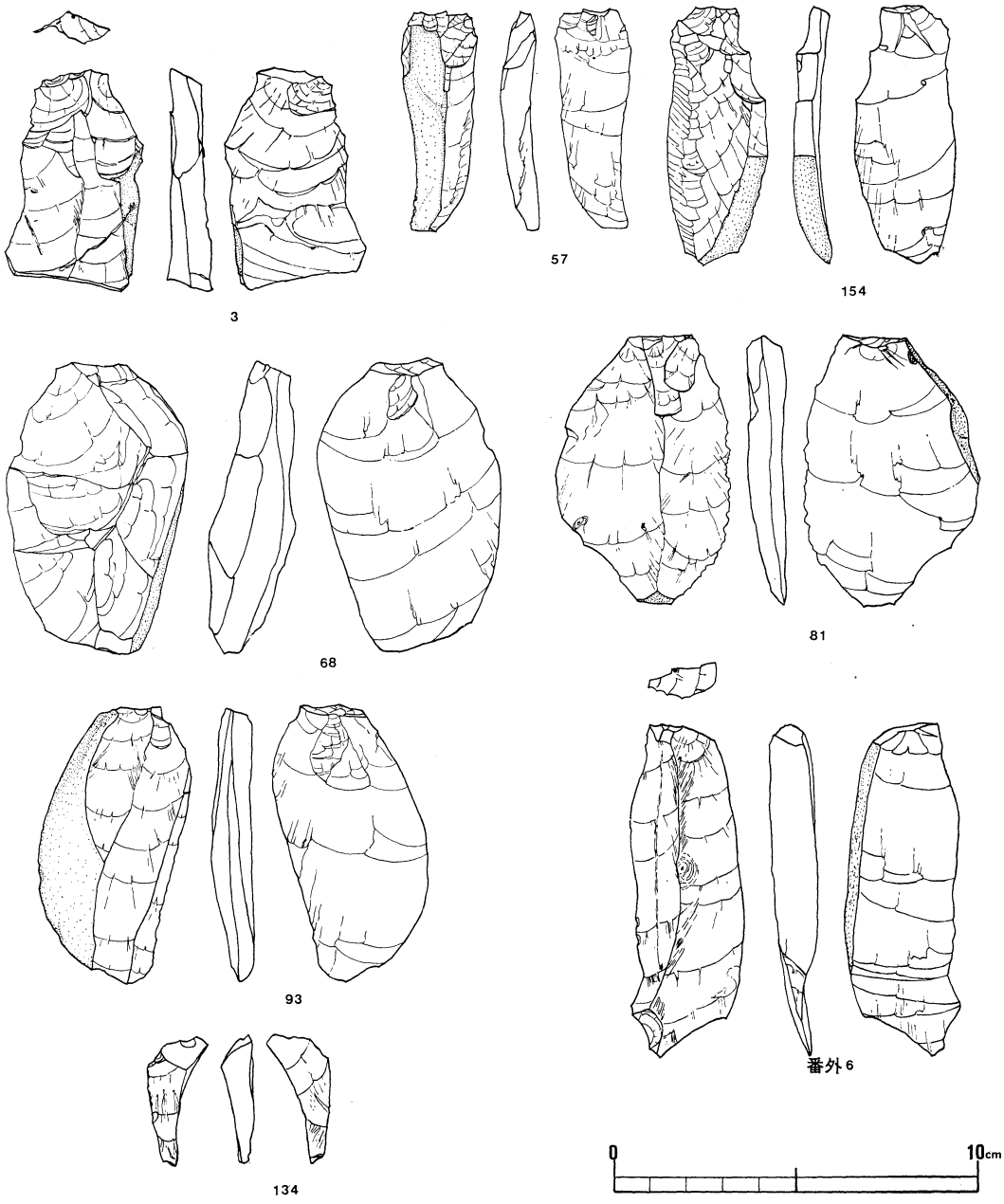
図—11　出土遺物実測図（珪質流紋①）



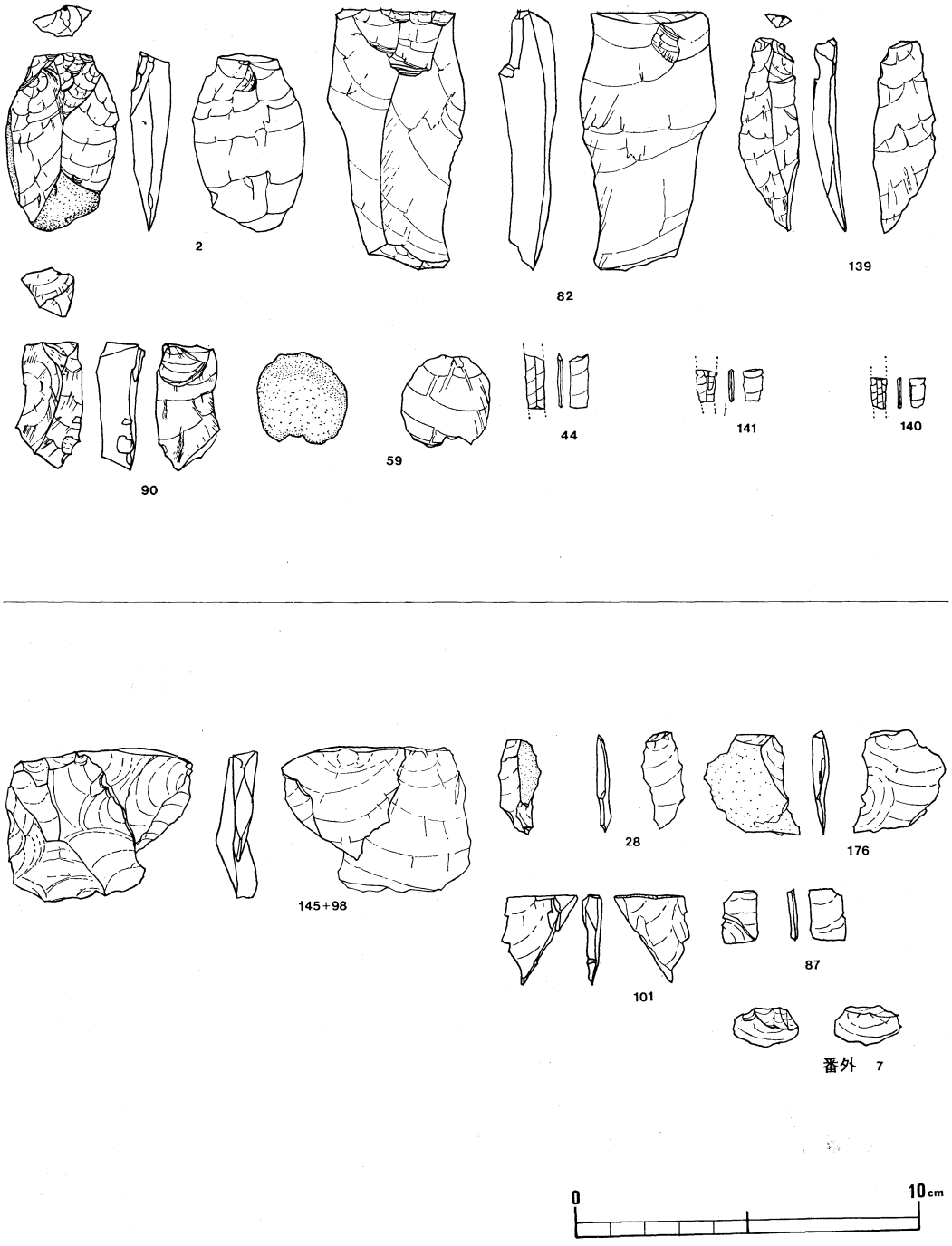
図—12　出土遺物実測図（珪質流紋岩①）



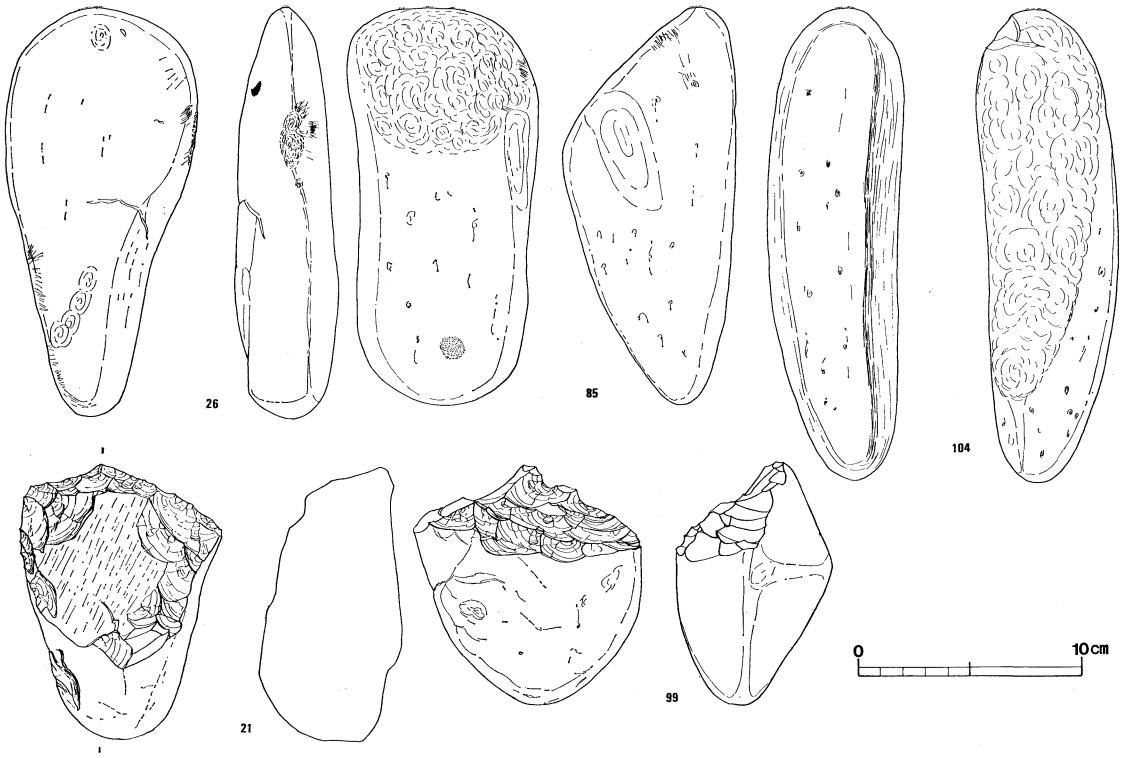
図—13　出土遺物実測図（珪質流紋岩①）



図—14　出土遺物実測図（珪質流紋岩②）



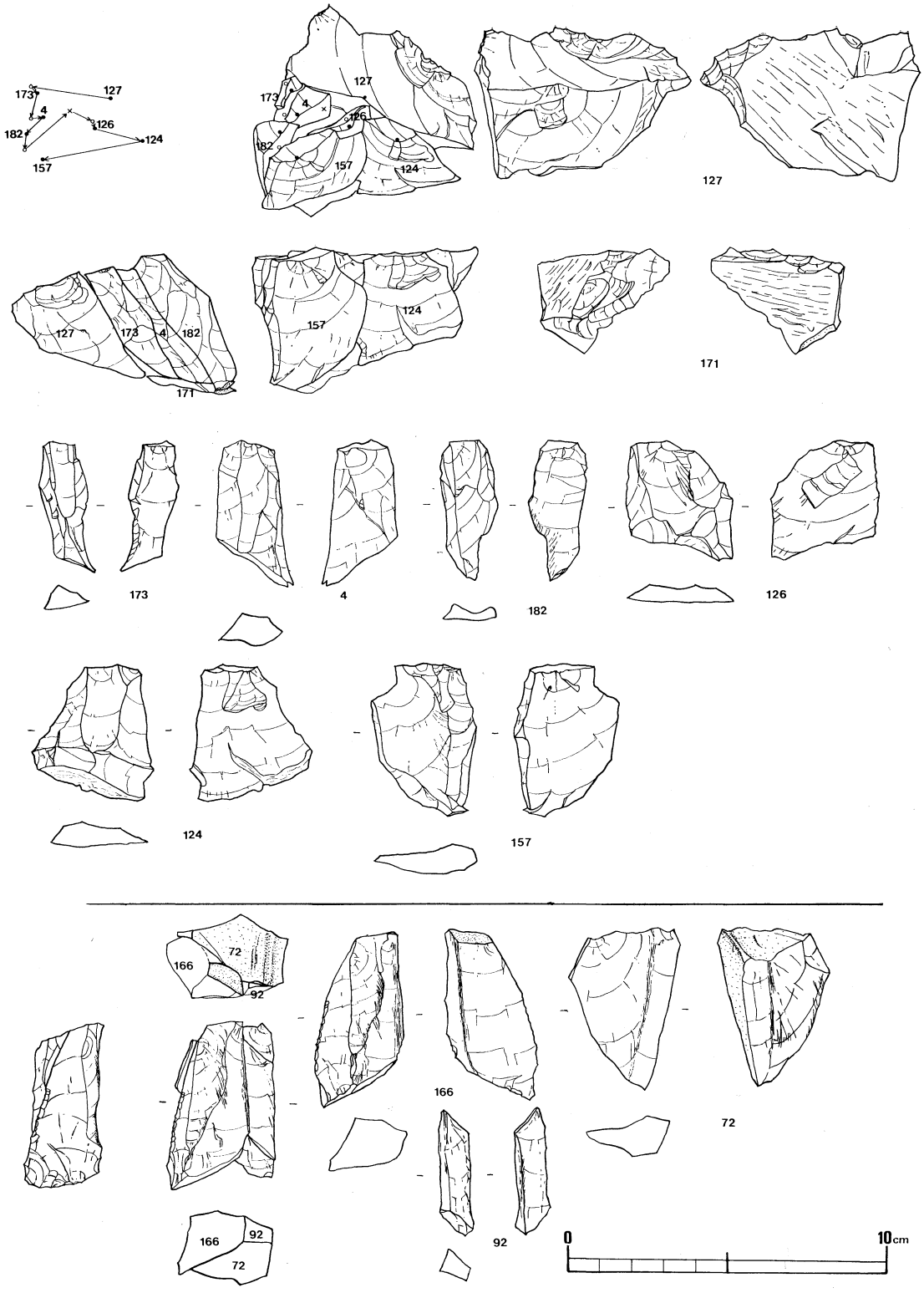
図—15　出土遺物実測図（上，珪板岩，下，硬砂岩）



図—16　礫器，敲石実測図

チがある。比較的部厚い縦長の剥片が素材となっている。背面には二条のネガティブな剥離面が残る。その剥離方向は主要剥離面のそれと同一である。主要剥離面の左側に一面自然面が残る。剥片剥離過程のうち95などよりは早く剥離されたものであろう。

削器③;長さに比べて幅の広い剥片が素材となったものである。削器②に利用された剥片とは異なった剥離の方法による。削器②の素材となった剥片は図上から下へという規則的な剥離によって作られたものである。その石核はおそらく打面転移などあまり行なわない円筒形乃至は円錐形の形態であったと推量される。対して削器③の素材となった剥片は背面のネガティブな剥離面から窺われるように各剥片の剥離方向は一定していない。つまりこれらの剥片の母体となった石核はおそらく一定した打面を持たない不定形のものであったことが思量される。35は菱形の薄手で幅広の剥片が素材となっている。背面右側縁に刃部作出のためのリタッチが窺える。リタッチはそれ程密なものではない。背面には2方向のネガティブな剥離面がある。いずれも主要剥離面の剥離方向とは方向を異にする。このことは，少なくとも本剥片の剥離以前に剥がされた2枚の剥片はそれぞれ打面を別にしていることを意味しよう[2]。123+22も35と同様幅広の定形的ではない剥片が素材となったものである。背面右側縁に刃部作出のためのリタッチがみられる。リタッチの上半分はやや抉りがある。抉り入り削器(ノッチドスクレイパー)として考



図—17　出土遺物実測図（チャート接合資料）

え得るかもしれない。背面には3方向のネガティブな剥離面を持つ。いずれも主要剥離面の剥離方向とは異なる。166はチャート製である。背面左側縁に細かいリタッチがある。背面には2方向のネガティブな剥離面があるため一応削器③とした。

削器は以上の三種に分けられる。この三種に共通する特色を述べておく。いずれの削器についても，刃部作出のためのリタッチは背面の一縁辺にのみ施されている。

石刃（図—10の 169 +37）

珪板岩製である。両側縁におそらく使用痕であろう歯こぼれがみえる。完形品ではないが，意図的に切断されたものか否かは不明である。石刃の出土は，本遺跡の剥片剥離方法の基本に石刃技法があったことを示唆していよう。

礫石器

礫器（図—16の21と99）

二点検出されたがいずれも硬砂岩製である。硬砂岩製の剥片・砕片は6点出土したが，いずれも目的的な剥片とは言い難い。従ってこの二点は硬砂岩製の剥片のための石核とは考えなかった。いずれも礫の一面にステップを多く残す粗雑な剥離によって刃部が作られている。形態的にはチョッパーに似る。重量はそれぞれ，800 g・810 g を量る。

敲石（図—16の26，85，104）

四点検出された。いずれも比較的大型のものであり，砂岩製である。26は足裏形の形態であり，敲痕は図面右側（図—16）の一部に窺える。重量は約 775 g を量る。85は横面形三角形を呈する。横面三角形であるため面は五面あるが，そのうちの一面全体に敲痕がある。重量は約1670 g を量る。104は細長い礫が使用され，その一面に敲痕が残る。重量は約1190 g を量る。

磨石（図版—18の118）

一点検出された。石英斑岩製。断面不整四辺形の細長い自然礫が利用された。二点に磨痕が窺える。重量は約1570 g を量る。

本遺跡にて検出された礫石器は以上の三種である。礫石器のうち磨石・敲石は一般的に調理具的なものと考えられる。特に縄文時代，これらは石皿などとセットとなり植物性食料の製粉のための道具としてとらえられ易い。果たしてどうか。敲石にみられる敲痕，磨石の磨痕はいずれも敲具或いは磨具としての使用の結果できるものである。従って敲石・磨石を得るには適当な自然石の採集で事足りよう。つまり原石への加工を施す必要はない。いわば消耗品的なものである。よって廃棄も簡単に行われよう。対して石皿は入念な加工を要する。いわば備品的なものである。備品的なものの存在は人間の一定場所への定住を意味する一面があろう。本遺跡において備品的な道具の検出はない。今回検出した敲石・磨石はむしろ何らかの道具の製作に使ったものであったと考える。

剥　片

ここではチャート製剥片以外のものについて述べる。今回検出された剥片及び砕片は，大きく次の三種に分けることができる。目的的剥片[4]，石核調整時できた剥片，その他刃部作成のリ

タッチの際出きた砕片と礫器の刃部を作上げる際できた剥片である。更にこのうち目的的な剥片は，各々の形態から二種に分けられる。これはそれぞれ目的的剥片①，目的的剥片②と仮称する。

目的的剝片①；削器②の素材となった形態の剥片をいう。縦長の剥片であり，95で代表されるように石刃技法的な剥離方法に拠ったものと思量される。掲載した遺物番号でいえば，図—10の95・図—11の5，6，80・図—12の103—1，128，143・図—13の167，番外2，番外2・図—14の3，57，154，81，93，番外6・図—15上段の2，82，139などがそうである。

これらにみられる共通の特徴は，背面のネガティブな剥離面の方向がいずれはほぼ同一であること，それと主要剥離面の方向が一緻していることである。各々の剥片は母体となった石核から連続的に剥離されたひとつにしか過ぎない。しかし，各々の剥片に残された打面或いは背面のネガティブな剥離痕により母体となった石核は検出されなくとも，その打面調整のあり方，石核そのものの形状についてある程度の推量は可能である。目的的剥片①の示す特徴は次のことを意味しよう。これら剥片を剥離する上で打面の大きな転移はない。また剥片の打面も平担面であり調整されたものである。[5] これらの特徴から①の母体となった石核は円筒形乃至は円錐形に近い整備されていたものであろう。これらの石質は珪質流紋岩①及び同②である。

目的剝片②；削器③の素材となった形態の剥片をいう。横長幅広の剥片である。石刃技法などの定式的な剥離方法には拠ってはいない。掲載した遺物番号でいえば，図—10の35，123＋22・図—11の23，53，63・図—12の113・図—13の番外1，同4・図—14の68などとなる。これらにみられる共通の特徴は，背面のネガティブな剥離面の剥離方向が一定していないこと，従って主要剥離面の方向とはほとんど一致しないことである。これはこの種の剥片剥離の際，打面の転移が度々なされていたことを示している。23，53のように同一剥片に二面の打面があることがそれを示唆しよう。これら剥片の母体となった石核はそれ程整備されたものではないことが思量される。例えば円礫の形態の調整をほとんどせずに，任意の場所を打面として利用していたものであろう。各剥片の背面上端には打面調整のためのチッピングなどはみられないこれら剥片の石質はいずれも珪質流紋岩①である。

本遺物群の目的的剥片①と同②の存在は，削器②，③の存在とともに本遺跡遺物群の編年的な位置づけに有効なものである。[6] ①，②とも比較的大形の剥片であることも同様に有効なものと考える。

石核調整剝片；石核の打面或いは形状の調整のための剥片をいう。定形的なものではなく，器面に大きな自然面を残すことが多い。掲載した遺物番号でいえば，図—11の75・図—12の155・図—13の170—1・図—14の134・図—15上段の95，59などである。

接合資料（図—17）

本項ではチャート製の接合資料について述べる。

資料①（図—17上段）；剥片8片が接合する。これらの資料は図—8に示したように東西2

ブロックに亘って分布する。これは東西2ブロックが同時的に残されたためであることを示している。接合資料のうち7を除く全ての剥片が同一の打面より剥離されている。打面には一回の剥離による大きな剥離面が利用されている。石核は検出されなかった。剥離順序を図式的に示せば次の通りとなる（図—17左上隅参照）。

171‥→127→○→173→○→4→182→○→○→○→126→124→157

このうち○は検出されなかったが，剥離された剥片のあったことを示している。打撃点は同一打面にあり（但し171は除く），大まかに左右ジグザグに移動している。173～157に至る12片以上の剥片剥離の打撃点は幅約4cmの範囲で移動している。

これらの剥片は幅広なものが多く，124・126・157などが目的的なものであったろう。形態的には目的的剥片②に似る。[7] 127・171は，おそらく石核調整剥片となろう。

資料②（図—17下段）；72・92・166の3片のみが接合する。打面には自然面が利用された。

以上の出土遺物について次のようにまとめることができる。

①，削器は①，②，③の三種認められる。このうち②，③の素材となった剥片の形態は本遺物群の目的的剥片の大別に一致する。

②，石刃のあることから，本遺物群の剥片剥離の方法の基本に石刃技法があった。

③，敲石は，セットとなる石皿等の検出のないことから何らかの道具製作に使用されたものと考える。

④，剥片は，目的的剥片①，②と石核の調整剥片，その他に分けられる。目的的剥片①，②の存在は本遺物群の編年的な位置づけに大いに有効なものである。[8]

（註）

(1)，珪質流紋岩は組成鉱物密度の疎密から①，②の二種に分けた。①はより粗い石質のものを謂い図—10～図—13にあげたものがそれに当たる（但し図—10の169十37は石質を思にする。）図—14に掲げたものはより緻密な石質のものであるため珪質流紋岩②とした。①②には各々の剥片の形態的な差異はない。基本的には同様な剥離方法によって作られたものである。

(2)，剥片のみで各々の母体となった石核の形態を思量することは危険であるが，削器②に利用された剥片の剥離のためにはかなり調整された石核が必要であろう。対して削器③の素材となった剥片は，例えば円礫を任意に剥離していったとしても作り得るものであろう。本遺跡の目的的剥片には削器②の素材となったようなもの，削器③のようなものの二種あるこのことは，本遺跡の石器群の編年的な位置を考定する上で非常に重視すべき点のひとつである。例えば，東京都小金井市西之台遺跡B地点（東京都教委1980「小金井市西之台遺跡B地点—Nishinodai Loc. B」）の調査で指摘されたⅢ層下層文化の不足分を補い得るもののひとつであると考える。

(3)，チャート製剥片は，他の石質のそれと大きさ，形態に異なる様相が窺える。それはおそ

らく石質とその硬度，原石の大きさなどの差異によるものであろう。ここでは背面に見られる方向の一定しないネガティブな剥離面があることから削器③に分類した。チャート製の剥片については接合資料の項で述べる。

(4)，削器の素材として利用された剥片の形態がその判別の基本となる。

(5)，目的的剥片①の打面は石核の打面調整によってつくられた面である（打面作成の剥離によってつくられた）。また多くの剥片の背面上端部（打面近く）には細かいチッピングをみることができる。（例えば5，103－1，128，167，2，82などに特徴的である）。このことは各々の剥片剥離の際，打面の入念な調整を施したことを意味していよう。

(6)，註(2)参照

(7)，但し目的的剥片②は背面に不定方向の剥離がみられる。つまりその剥離過程の中で打面転移が度々あったのに対し，チャート製にはそれがない。

(8)，これら剥片の他，図—15の44，140，141が注目される。これらについてはその石核は不明であったが，細石刃として考えている。141は裏面左側縁に微細な剥離痕がある。

表—6　先土器時代出土遺物番号表（1）

番号	種別	石質	備考	番号	種別	石質	備考
1	小礫	1—b		29	砕片	1—b	
2	剥片	4—a	背面末端自然面	30	剥片	1—a？	
3	剥片	3—a	背面右側自然面	31	剥片	1—b	背面自然面
4	砕片	1—b		32	剥片	1—b	
5	剥片	2—a		33	砕片	1—b	背面自然面
6	剥片	2—a	背面一部自然面	34	剥片	2—b	
7	礫	礫 2	被焼成・128,165と接合	35	削器	2—a	背面右側辺加工
8	礫	礫 2	被焼成	36	剥片	1—b	
9	礫	礫 2	被焼成109と接合	37	石刃	5—a	両側辺使用痕，169と接合
10	剥片	1—b		38	砕片	1—b	
11	敲石	礫 1	側縁に敲痕，被焼成	39	砕片	1—b	
12	砕片	1—b		40	砕片	1—b	
13	砕片	1—b		41	砕片	2—b	
14	礫	礫 2	被焼成，16と接合	42	砕片	1—b	
15	礫	礫 3	被焼成，91と接合	43	砕片	1—b	
16	礫	礫 3	被焼成，14と接合	44	剥片	5—a	細石刃に似る
17	剥片	2—b		45	砕片	1—b	
18	礫	礫 3	一部磨き？	46	砕片	1—b	
19	砕片	1—b		47	砕片	1—b	
20	剥片	1—b		48	剥片	7—b	
21	礫器	礫 1	背面右側自然面	49	砕片	1—b	
22	削器	2—a	背面右側辺加工，123と接合	50	砕片	2—b	
23	剥片	2—a		51	砕片	1—b	
24	砕片	1—b		52	剥片	1—b	
25	削器	2—a	背面右側辺加工，左側自然面	53-1	砕片	2—b	
26	敲石	礫 1	側面一部に敲痕	53-2	剥片	2—a	
27	砕片	1—b		54	砕片	1—b	
28	剥片	6—b	背面右側自然面	55	砕片	2—b	

※ 石質の項目　1，チャート　2，珪質流紋岩①　3，珪質流紋岩②　4，珪板岩①　5，珪板岩②　6，硬砂岩　7，その他

礫1；敲石，礫器，磨石　礫2；一部欠損　礫3；完形

剥片及び砕片　a；目的的剥片　b；石核調整剥片など

表—7　先土器時代出土遺物番号表（2）

番号	種別	石質	備考	番号	種別	石質	備考
56	砕片	1—b		84	剥片	2—b	
57	剥片	3—a	背面左側自然面	85	敲石（台石？）	礫 1	平担面に敲痕
58	剥片	1—b		86	砕片	1—b	
59	砕片	4—b		87	砕片	6—b	打面自然面
60	剥片	1—b		88	砕片	1—b	
61	砕片	1—b		89	剥片	7—b	打面自然面
62	石核？	1—b	剥片剥離面は片面のみ	90	剥片	4—b	
63	剥片	2—b	背面左側辺自然面	91	礫	礫 1	被焼成，15・119と接合
64	礫	礫 2	被焼成，66と接合	92	砕片	1—b	
65	剥片	1—b	片面節理面	93	剥片	3—a	背面左側自然面
66	礫	礫 2	被焼成，64と接合	94	剥片	2—b	
67	砕片	1—b		95	削器	2—a	背面右側辺加工
68	剥片	3—a	背面右側自然面	96	剥片	7—b	打面自然面
69	剥片	1—b	片面節理面	97	礫	礫 2	被焼成
70	砕片	7—b	片面自然面	98	剥片	6—b	打面自然面
71	剥片	2—b	片面自然面	99	礫器	礫 1	１８３と接合
72	砕片	1—b		100	剥片	1—b	打面自然面
73	砕片	1—b		101	砕片	6—b	
74	砕片	1—b		102-1	砕片	6—b	打面自然面
75	砕片	1—b	片面自然面	102-2	砕片	1—b	
76	剥片	1—b	片面節理面	103-1	剥片	2—a	
77	砕片	1—b		103-2	礫	礫 2	被焼成
78	剥片	2—b		104	敲石	礫 1	片面全面敲痕
79	礫	礫 3	被焼成	105	砕片	1—b	
80	剥片	2—a		106	砕片	1—b	
81	剥片	3—a	背面末端自然面	107	砕片	1—b	片面自然面
82	剥片	4—a		108	砕片	1—b	
83	剥片	1—b	片面自然面	109	礫	礫 2	被焼成，９と接合

※ 石質の項目
1，チャート　5，珪板岩②
2，珪質流紋岩①　6，硬砂岩
3，珪質流紋岩②　7，その他
4，珪板岩①

礫１；敲石，礫石，磨石
礫２；一部欠損
礫３；完形

剥片及び砕片
a；目的的剥片
b；石核調整剥片など

表—8　先土器時代出土遺物番号表（3）

番号	種別	石質	備考	番号	種別	石質	備考
110	礫	礫 3		138	剥片	1—b	
111	剥片	7—b	打面自然面	139	剥片	4—a	
112	剥片	1—b	片面自然面	140	剥片	3—a	細石刃に似る
113	剥片	2—b	打面自然面	141	剥片	3—a	細石刃に似る
114	剥片	1—b		142	砕片	1—b	
115	礫	礫 3	扁平な河原石	143	剥片	2—a	背面右側自然面
116	砕片	1—b		144	砕片	1—b	打面節理面
117	剥片	7—b	打面自然面	145	剥片	6—b	打面自然面
118	磨石	礫 1	4面に磨痕	146	剥片	7—b	打面自然面
119	礫	〃 2	被焼成，91と接合	147	削器	2—a	両側縁尖端加工
120	礫	〃 2	被焼成，7，165と接合	148	砕片	1—b	
121	剥片	1—b	片面節理面	149	砕片	1—b	
122	剥片	1—b	打面自然面	150-1	砕片	1—b	
123	削器	2—a	背面右側辺加工，22と接合	150-2	剥片	7—b	
124	砕片	1—b	片面自然面	151	剥片	1—b	
125	剥片	1—b	片面自然面	152	砕片	1—b	
126	砕片	1—b		153-1	剥片	1—b	打面自然面
127	砕片	1—b		153-2	剥片	1—b	打面節理面
128	剥片	2—a	背面右側辺に使用痕	154	剥片	4—a	背面右側辺自然面
129	剥片	2—b		155	剥片	2—b	片面自然面
130	砕片	1—b	片面自然面	156	剥片	7—b	打面自然面
131	剥片	1—b		157	砕片	1—b	
132	砕片	1—b	片面自然面	158	剥片	1—b	
133	剥片	1—b		159	剥片	2—b	背面末端自然面
134	砕片	3—b	打面自然面	160	剥片	2—b	背面自然面
135	砕片	1—b		161	剥片	1—b	片面節理面
136	剥片	1—b	背面右側辺自然面	162	剥片	2—b	
137	砕片	1—b	片面自然面	163	砕片	1—b	

※ 石質の項目
1，チャート　5，珪板岩②
2，珪質流紋岩①　6，硬砂岩
3，珪質流紋岩②　7，その他
4，珪板岩①

礫1；敲石，礫器，磨石
礫2；一部欠損
礫3；完形

剥片及び砕片
a；目的的剥片
b；石核調整剥片など

表—9　先土器時代出土遺物番号表（4）

番号	種別	石質	備考	番号	種別	石質	備考
164	砕片	1—b		174	剥片	2—b	
165	礫	礫 2	被焼成，7，165と接合	175-1	砕片	1—b	
166	砕片	1—b		175-2	砕片	6—b	片面自然面
167	剥片	2—a	背面左側辺に使用痕	176	砕片	1—b	
168	小礫	1—b		177	砕片	1—b	
169	石刃	5—a	両側辺に使用痕37と接合	178	砕片	1—b	
170-1	剥片	2—b		179	礫	礫 2	砕片4片と接合
170-2	砕片	1—b		180	石核？	1	剥片剥離面は片面のみ
171	砕片	1—b		181	砕片	1—b	
172	剥片	1—b		182	砕片	1—b	
173-1	砕片	1—b	打面節理面	183	礫器	礫 1	94と接合
173-2	砕片	1—b					
番外			掲土等より出土	番外			掲土等より出土
1	剥片	2—a		7	砕片	6—b	
2	剥片	2—a		8	砕片	1—b	
3	剥片	2—b		9	砕片	1—b	
4	剥片	2—a		10	砕片	1—b	
5	砕片	2—b		11	砕片	1—b	接合資料3
6	剥片	3—a		12	砕片	1—b	接合資料3

※　石質の項目　1，チャート　2，珪質流紋岩①　3，珪質流紋岩②　4，珪板岩①　5，珪板岩②　6，硬砂岩　7，その他

礫1；敲石，礫器，磨石　礫2；一部欠損　礫3；完形

剥片及び砕片　a；目的的剥片　b；石核調整剥片など

表—10 先土器時代遺物数量表

種別 / 石質	削器	剥片	砕片	礫器	敲石	磨石	礫	石核?	計	%
チャート	1	27	71				5	2	106	53
珪質流紋岩	6	34	4						44	22
珪板岩		11							11	6
硬砂岩		2	4						6	3
細粒砂岩				3	4		12		19	9
頁岩		4					1		5	2
石英斑岩						1	4		5	2
その他		5	1						6	3
計	7	83	80	3	4	1	22	2	202	100
%	3.5	41	39.5	1.5	2	0.5	11	1	100	100

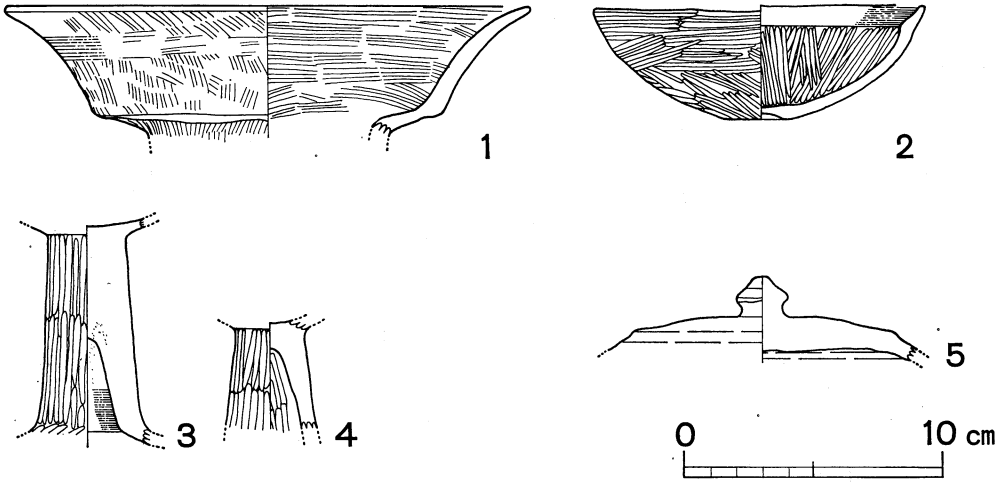
2　古墳時代

2号住居跡（図—19）

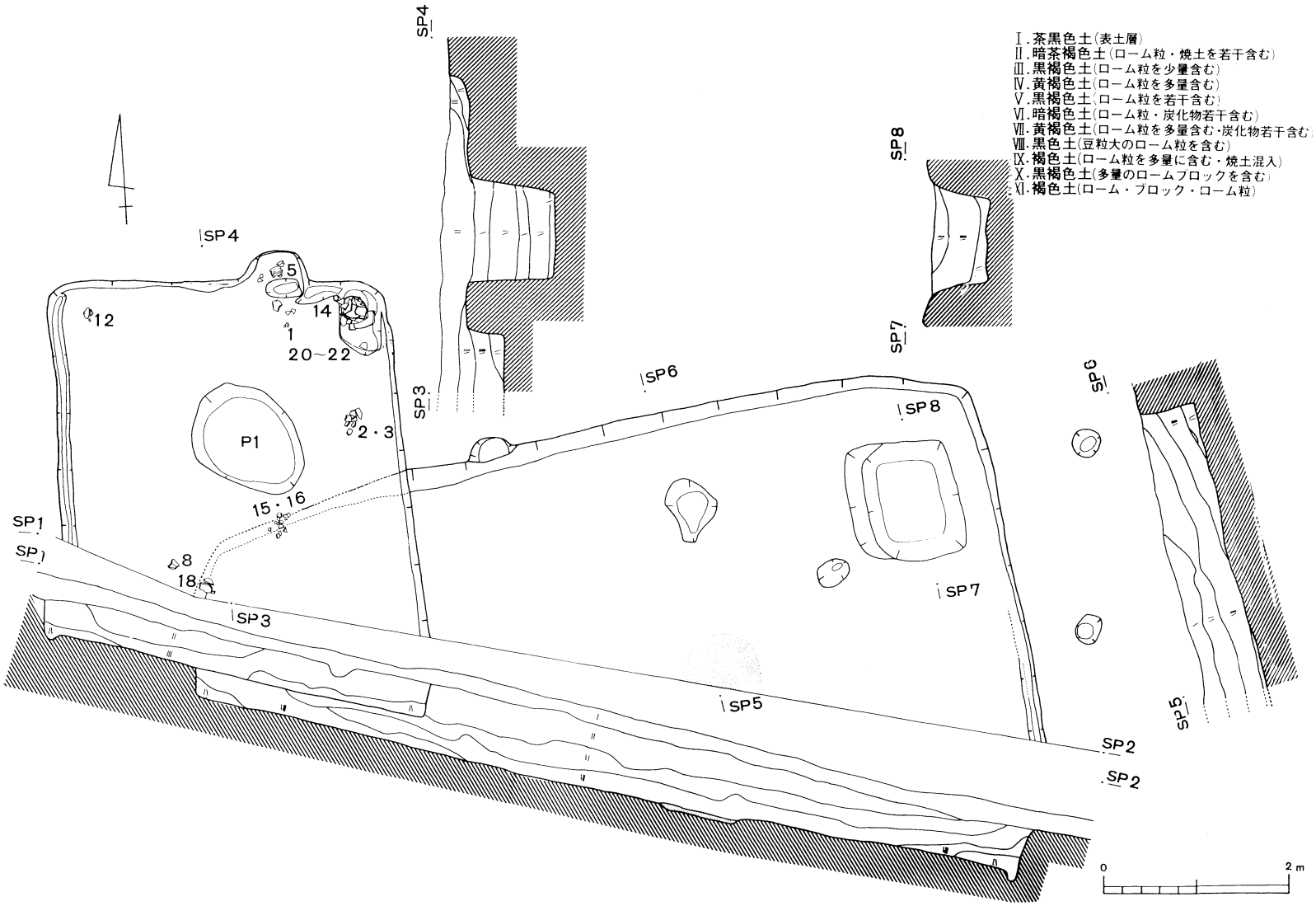
本住居跡の南半は調査区外にあり全掘できなかった。北西コーナーは1号住居跡に切られていたが,本住居跡床面上25㎝に1号住居跡床面がつくられていたので,本住居跡を確認することができた。住居跡の平面形は方形になるものと思われる。北辺の壁の長さは8.3m，壁は高さ50〜60㎝で床面よりほぼ垂直に立ち上る。床面はロームと黒色土を使って貼り床されており，固く踏みしめられている。炉跡は住居跡中央部からやや北よりの床面で検出され，何等施設のない単純な地床炉であった。炉の径は長径約90㎝の楕円形を呈し，焼土が厚さ約2㎝堆積していた。炉底面のロームもぼろぼろに焼けていた。壁溝は，東壁下のみに幅約10㎝，深さ5㎝程度のものが検出された。柱穴は床面が貼り床のため検出できなかった。住居跡の東外側に径約30㎝，深さ20〜30㎝のピットが2本検出された。住居跡北西隅から方形(長径1.2×短径1m・深さ60㎝）を呈する貯蔵穴が検出された。また北壁中央部のやや西よりに，逆U字状の約15㎝の切り込みが検出された（図—19）。これは床面より上約30㎝の壁に切り込まれていた。切り込み底面には微量だが焼土が有り，その前面の住居跡覆土中にも焼土が含まれていた。

住居跡の埋没土はレンズ状堆積をしており，自然堆積と思われる。貯蔵穴の埋没土は住居跡のものと同じで，堆積も同じ様子である。

遺物（図—18）　図示し得たのは5個体である。北壁近くの床面より，体部が半球形を呈し底部は上げ底で内面に稜をもつ土師器坏形土器（図—18の2）が出土した。床面よりやや浮きの状態で，ハケ調整されている土師器高坏口縁部（図—18の1）と高坏脚部（図—18の3，4）が出土した。また覆土中より須恵器蓋形土器（図—18の5）が出土したが，住居跡に伴うものではなかろう。住居跡の時期は古墳時代前期に含まれると思われる。



図—18　2号住居跡出土遺物



図—19　1号住居跡，2号住居跡

表—11　　2 号 住 居 跡 出 土 遺 物 一 覧 表

土器番号	出土位置	器種	法量 cm	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	覆土	高坏？	20.2 —— ——		外面上部を斜位方向のハケの後，横位のハケ，中位以下は縦方向のハケ調整。内面は横位のナデ調整。	砂粒を含む焼成不良外面淡赤褐色内面赤褐色を呈す	土師器坏部のみ残存
2	カマド横床面	坏	12.8 4.4 2.4	底部は上げぞこで小さく，体部は半球形状を呈し，口縁部はやや外反する。内面に稜をもつ。	外面は横方向ヘラミガキ，内面口縁部横ナデ，稜より下は縦方向ヘラミガキ調整。	砂粒を多く含む焼成良好内外面赤褐色を呈す	土師器完形
3	覆土	高坏（脚部）	—— —— ——	脚部は直線的に立つ。	外面縦方向二段のヘラミガキ，内面は横ナデ調整。	砂粒（白色粒）を含む焼成良好淡褐色を呈す	土師器脚部のみ
4	覆土	高坏（脚部）	—— —— ——		外面縦位のヘラミガキ，内面はあらい縦位のヘラナデ。	砂粒（白色粒）を含む焼成良好赤褐色を呈す	土師器脚部破片
5	カマド横	蓋	—— —— { 2.0 1.5	天井部はやや偏平で珠状のツマミを有す	天井部外面回転ヘラ削り調整，ツマミは貼付。	砂粒を含む焼成良好灰色を呈す	須恵器口縁部欠損

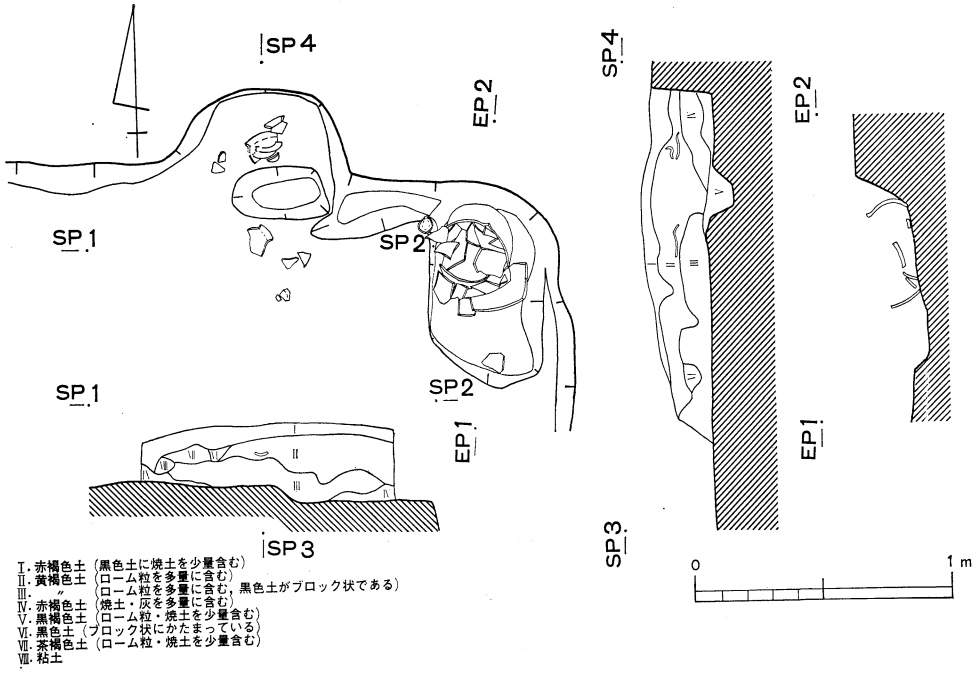
3　歴史時代

1号住居跡（図—19）

本住居跡の南半分は調査区域外のため全容はつかめない。北辺の長さは3.6*m*であり，平面形は方形を呈すると思われる。残存壁高は35*cm*前後で，ほぼ垂直に掘り込まれている。床面は黒色土とロームブロックを使って貼り床されており，固く踏みしめられている。特にカマド前面は硬い。また2号住居跡と重複している住居跡南東部で明瞭な貼り床が認められた。ロームブロックを厚さ5*cm*前後硬く敷きつめていた。壁溝（幅10*cm*・深さ5*cm*前後）は西壁下のみである。柱穴は確認できなかった。北東隅は皿状（深さ約5*cm*）に凹んでおり，須恵器高台付坏（図—14）と甕（図—20〜22）が出土した。22は押し潰された様に出土したが，復原の結果完形になった。床面中央部からは平面形が楕円形（長径1.3×短径1*m*・深さ1*m*）の土坑（P_1）が検出された。土坑の覆土はロームブロック層とロームブロック・黒色土の混土層が互層状にみられることなどから，人為的に埋め戻されたものと思われる。なお住居跡の埋没土はレンズ状堆積を示しており自然堆積と思われる。この住居跡の埋没土の中に土坑開口部は現われていない。また土坑開口部は貼り床がなかった。この二点により土坑は住居跡が埋没する初期に掘られ，

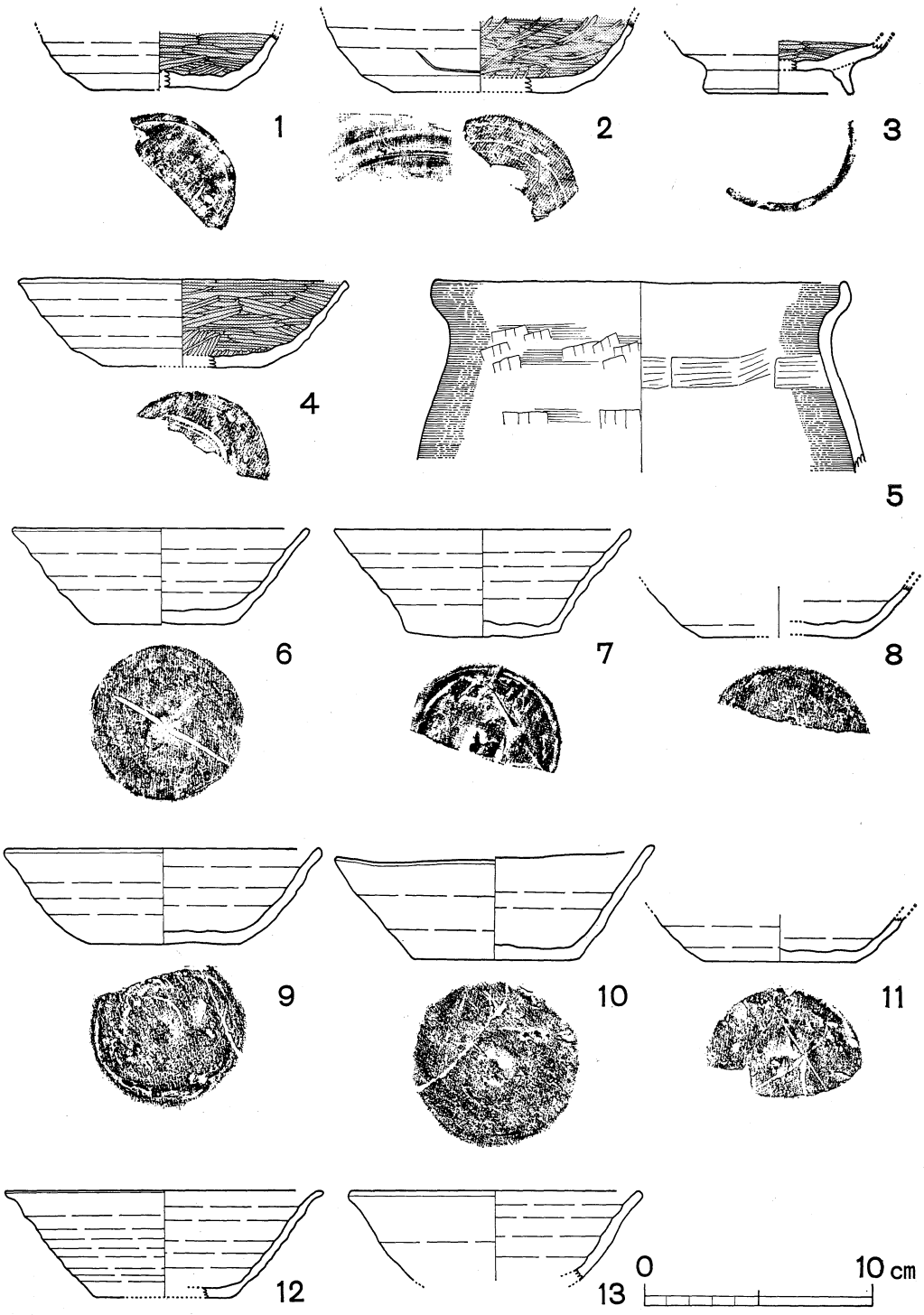
すぐ埋め戻されたものと思われる。但しその用途等については不明である。

カマド（図—20）北壁中央から東よりに壁を逆U字状に掘り込んで構築している。しかし北壁すれすれに通っている農道によって煙道部のほとんどは破壊されている。天井部，袖部は遺存しない。カマド底面は火床からなだらかな傾斜で立ち上る。火床に焼土は残っていない。焚き口部の下には楕円形（長径40×短径20㎝・深さ5㎝前後）のピットが掘られていた。

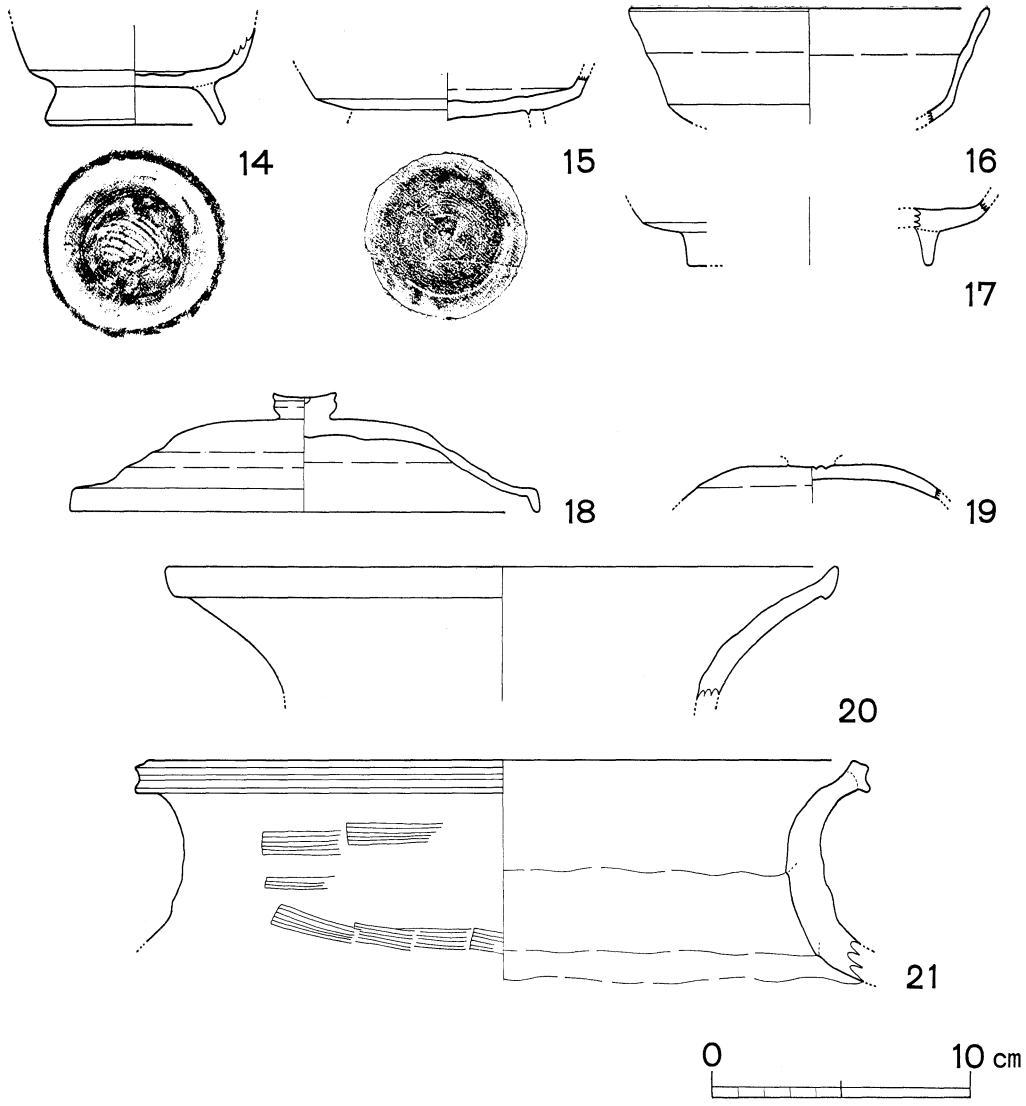


図—20　1号住居跡カマド

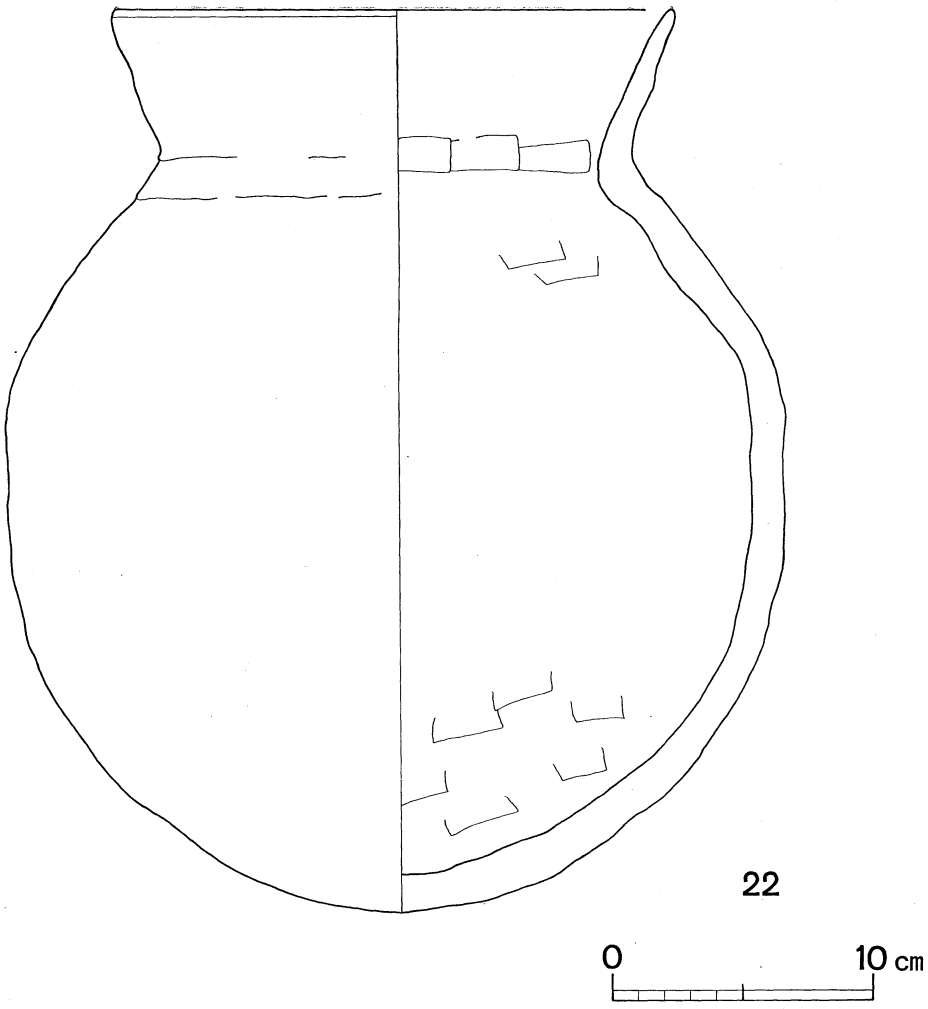
遺物（図—21～23，図版—20）　出土したのは22個体分と2，3号住居跡出土遺物と比べ比較的多かった。床面から出土したものは1～4，7～9・12・13・15～19，カマド付近からは5・6・10である。なお北東隅の凹みからの出土遺物については前記しておいた。土師器坏1・2・4はすべて体部がやや内湾ぎみに立ち上る器形をもち，4で代表される様に底径は口径の½か，それ以下になると思われる。底部はヘラ切り離しで，体部下端に回転ヘラ削り調整が施されている。2は体部外面に刻字がある。須恵器坏（6～9，10～13・16）はすべて回転ヘラ切り離しのままである。底径は口径の½か，それ以下である。体部の立ち上りは，体部が丸みをおびているもの（13），やや内湾ぎみに立ち上るもの（8・9・11），直線的に立ち上るもの（6・7・10・12・16）と三種類がある。しかし体部の立ち上り方は異なるが，底部の切り離し技法・底径と口径の比などからは須恵器坏に時間差は認められない。須恵器高台付坏（14・15・17）は高台貼りつけで「ハ」の字状を呈す。14のみ底面に糸切り離し痕がみられる。本遺跡出土遺物のうち唯一の底部切り離し例である。須恵器甕形土器は20～22である。そのうち22のみ完形であり，胴部は球形を呈し，口縁部は短かく外反する。紐積み成形されており，体部や



図—21　1号住居跡出土遺物 (1)



図—22　1号住居跡出土遺物 (2)



図—23　1号住居跡出土遺物 (3)

や上位で接合してつくられている。口縁部は叩いた後横なでを行う。胴部接合上位部は平行叩き目で，下位は底部まで左り回りの平行叩き目である。

3号住居跡（図—24）

本住居跡は南西隅がわずかに調査区外にかかるのみで，ほぼ完掘できた。北辺の長さは約4.6*m*，東辺の長さは約3.9*m*で，平面形はほぼ方形を呈する。住居跡はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は黒色土とロームブロックを使って貼り床され，固く踏みしめられている。特にカマド前面は硬い。しかし四隅は非常にやわらかい。南西隅は皿状に凹んでいる。壁溝（幅15～20*cm*，深さ5～8*cm*）は北壁下にはなく，途ぎれ途ぎれに検出された。柱穴は確認できなかった埋没土はレンズ状堆積で，自然堆積を示す。特に埋没土の状態から南側と西側より埋まったものと思われる。カマドは北壁と東壁から2基検出された。

表—12　　1号住居跡出土遺物一覧表（1）

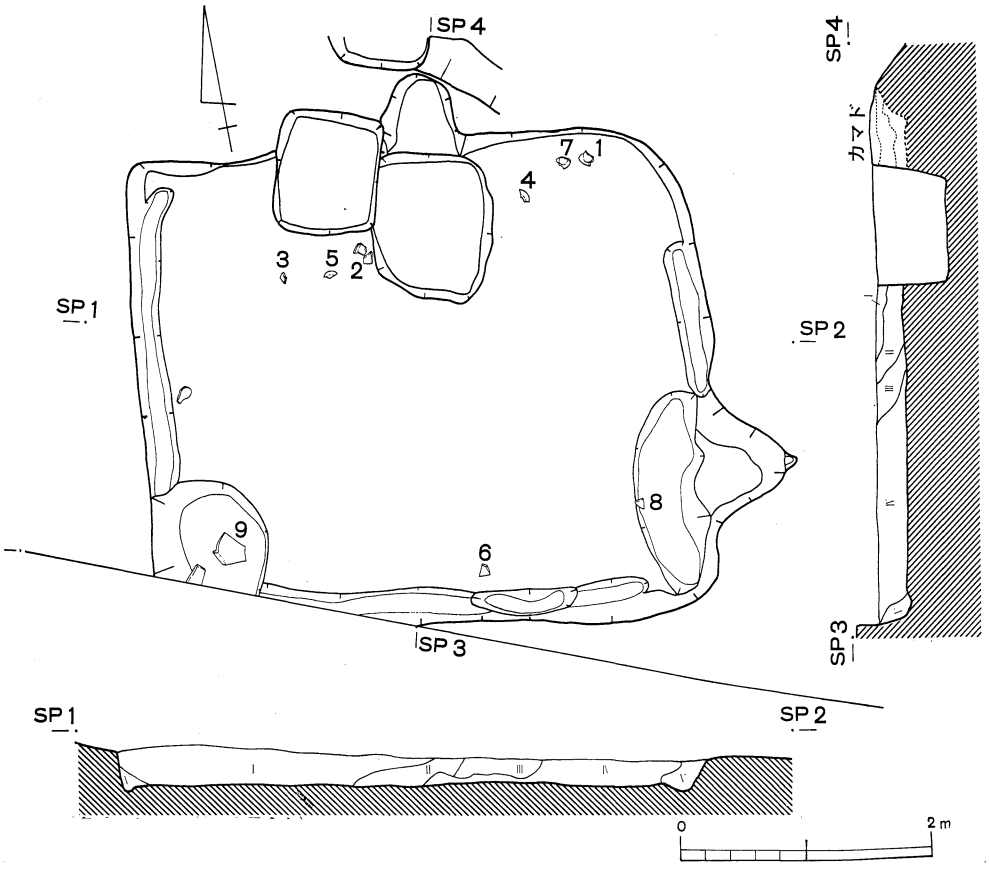
土器番号	出土位置	器種	法量 cm	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	床面	坏	—— —— (6.0)	体部はやや内湾気味に立ち上る。	ロクロ成形。底部全面と体部下端回転ヘラ削り。内面は全体丁寧なヘラミガキ。	微砂粒を含む焼成良好内面黒色，外面暗褐色を呈す	土師器胴部から底部破片 内面黒色処理
2	〃	坏	—— —— (7.6)	体は内湾ぎみに立ち上る。 体部下端にヘラ記号あり。	ロクロ成形。底部全面と体部下端回転ヘラ削り。内内底部が不定方向，胴部は横方向の後，斜位のヘラミガキ。	微砂粒を含む焼成やや不良内面黒色，外面赤褐色を呈す	土師器胴部から底部破片内面黒色処理
3	〃	高台付坏	—— —— (6.6)	高台は「ハ」の字状を呈す。	ロクロ成形。体部下端回転ヘラ削り。高台貼付。	微砂粒を含む焼成良好内面黒色，外面褐色を呈す	土師器底部破片 内面黒色処理
4	〃	坏	(14.5) 3.8 (7.0)	体部は内湾ぎみに立ち上り，口縁部はやや外反する。底部にヘラ記号あり。	ロクロ成形，底部・体部下端回転ヘラ削り。	微砂粒（長石）を含む焼成やや不良内面黒色，外面黒褐色を呈す	土師器⅓品 内面黒色処理
5	カマド付近	甕	(18.0) —— ——	口縁部は頸部より外反し，端部は内湾する。	体部外面は，縦方向ヘラ削りの後，横ナデ。内面は頸部をヘラ調整の後横ナデ。	微砂粒を含む焼成やや不良内外面淡褐色を呈す	土師器 口縁部破片
6	カマド付近	坏	13.0 4.2 6.4	体部は直線的に開き，底径は口径のほぼ½で小さい。底部外面にヘラ記号あり。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	粗砂粒を含む焼成良好 青灰色を呈す	須恵器，完形 口唇部に自然釉付着
7	床面	坏	(13.0) 4.7 (6.8)	体部は外反ぎみに立ち上り，底部外面の端部はやや突出ぎみ。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	長石粒・砂粒を含む酸化焔による焼成でやや不良灰褐色を呈す	須恵器 ½品
8	〃	坏	—— —— (6.8)	体部は若干内湾ぎみに立ち上る。底部に一部ヘラ記号あり。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	白色細砂粒を多く含む焼成良好灰色を呈す	須恵器胴部より底部破片
9	〃	坏	(14.0) 4.2 6.6	体部は内湾ぎみに立ち上り，口縁部がやや外反する。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	砂粒を含む焼成やや不良 灰色を呈す	須恵器½品
10	カマド付近	坏	14.0 5.1 7.2	体部は直線的に開くが，器体はややゆがんでいる。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	砂粒を含む焼成良好 灰色を呈す	須恵器完形
11	床面	坏	—— —— 6.6	体部は直線的に開く。底部にヘラ記号あり。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	粗砂粒（長石）を多く含む焼成良好灰色を呈す	須恵器 口縁部欠損
12	〃 北西隅	坏	(14.0) 4.7 (6.0)	体部は直線的に開き，口縁部は短く強く外反する。底部は小さく口径の½以下。やや薄手。内外面に「ひだすき」が現われている。	ロクロ成形。 回転ヘラ切り。	砂粒を多量に含む焼成良好青灰色を呈す	須恵器 底部欠損

※　法量の欄，上より口径・底径・器高（　　）は推定値

表—13　　1号住居跡出土遺物一覧表（2）

土器番号	出土位置	器種	法量 cm	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調	備考
13	床面	坏	(13.0) —— ——	体部は中位で一度ふくらみ，口縁は外反する。	ロクロ成形。	粗い砂粒を含む焼成良好青灰色を呈す	須恵器 口縁部破片
14	北東隅	高台付坏	—— —— (70)	底部は平らで「ハ」の字状の高台をなす。高台はやや高い。	ロクロ成形。静止糸切り後底部周縁を回転ヘラ削り。体部下端ロクロ撫で調整。	砂粒を含む 焼成やや不良 灰色を呈す	須恵器 底部破片
15	床面	高台付坏	—— —— ——	底部はやや凸面を呈し，立ち上りは角ばる。	ロクロ成形。回転ヘラ切り後，回転ヲ削り調整。 高台貼付。	微砂粒を含む焼成良好灰色を呈す	須恵器 底部のみ残存
16	〃 北西隅	坏	(14.0) —— ——	体部外面に軽い稜をなし，口縁部はほぼ直線的に開く。	ロクロ成形。	微砂粒を多く含む 焼成やや不良 灰色を呈す	須恵器底部欠損 口縁部に自然釉付着
17	床面	高台付坏	—— —— (13.0)	高台は高く「ハ」の字状を呈す。	ロクロ成形。 高台貼付。	微砂粒を多く含む 焼成良好 灰色を呈す	須恵器 底部破片
18	床面	蓋	18.2 4.6 {2.4 {1.0	口縁は反転気味に広がり，端部は短く折れ曲る。天井部は偏平。擬宝珠状ツマミを有す。	ロクロ成形。 天井部外面回転ヘラ削り。 ツマミは貼付。	長石等の粗砂粒を多量に含む 焼成良好 灰色を呈す	須恵器½品
19	床面 中央	蓋	—— —— {—— {——	天井部は偏平。	ロクロ成形。 天井部外面回転ヘラ削り。 ツマミは貼付。	微砂粒を含む 焼成良好 灰色を呈す	須恵器 口縁部，ミマツ欠損
20	カマド横 北東隅	甕	(26.0) —— ——	口縁部は大きく外反し，口唇部外面に稜を有す。		砂粒（白色，黒色粒等）を多量に含む 焼成良好外面暗灰色 内面灰白色	須恵器 口縁部破片
21	〃 北東隅	甕	(27.2) —— ——	口縁部は大きく外反し，口唇部に段をもつ凸帯が廻る。	外面に横位のナデ調整。	白色の粗砂粒を含む 焼成良好 灰色を呈す	須恵器 口縁部破片
22	カマド横 北東隅	甕	21.6 34.6	口縁部は「く」の字に外反し，体部底部ともに球状を呈す。	紐積み成形。外面全面タタキ目頸部内面横位のヘラナデ。体部内面縦位のヘラナデ。	粗砂粒（長石等）を含む 焼成良好 灰色を呈す	須恵器 完形

※　法量の欄，上より口径・底径・器高（　　）は推定値，{　は蓋のツマミ径及び高さ



図—24　3号住居跡

北カマド（図—25）　芋貯蔵穴によって，焚き口部，両袖部は撹乱されている。カマドは北壁中央に位置し，壁を逆U字形に掘り込んでいる。火床のロームは焼けており，焼土も多量に残っていた。火床がやや凹み，カマド底面はなだらかに煙道部へと続く。焚き口部は撹乱されて不明だが，かき出したものであろう多量の灰がカマド左前にたまっている。カマド構築材料（粘土等）は検出されなかった。カマド付近からの出土遺物はない。

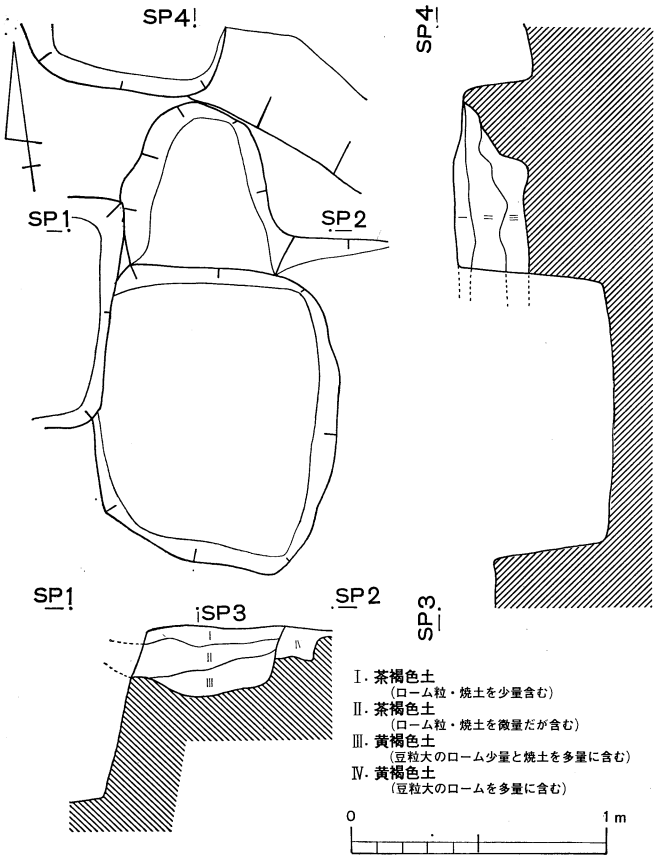
東カマド（図—26）　天井部，袖部は壊されている。東壁南よりの壁を逆U字状に掘り込んでおり，カマド底面は床部からなだらかに煙道部へ続く。火床部に焼土はなく，覆土にやや含まれていただけである。焚き口部の下には長楕円形ピット（長径1.5×短径0.5㎝，深さ20㎝）が掘り込まれている。その覆土はロームブロックを含む黒色土である。カマド付近からの出土遺物はない。

カマドの新旧　東カマドにはほとんど焼土が残っていない。また北カマドの火床には焼土が残っており，カマド前の床面にはかき出されたものと思われる多量の灰がみられた。東カマド

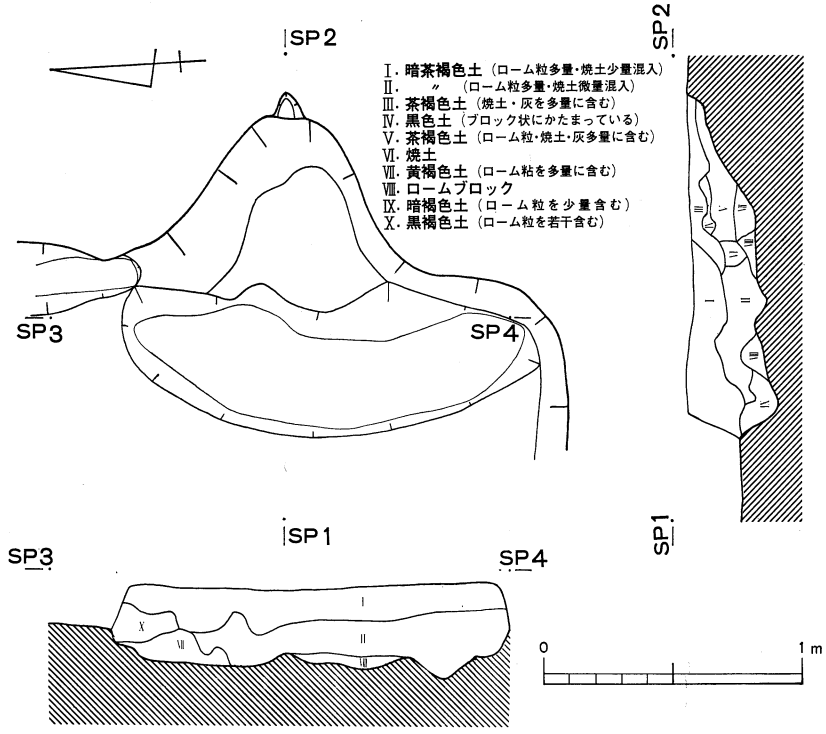
から北カマドへ移行したものと思われる。

遺　物　(図—27，図版—21)

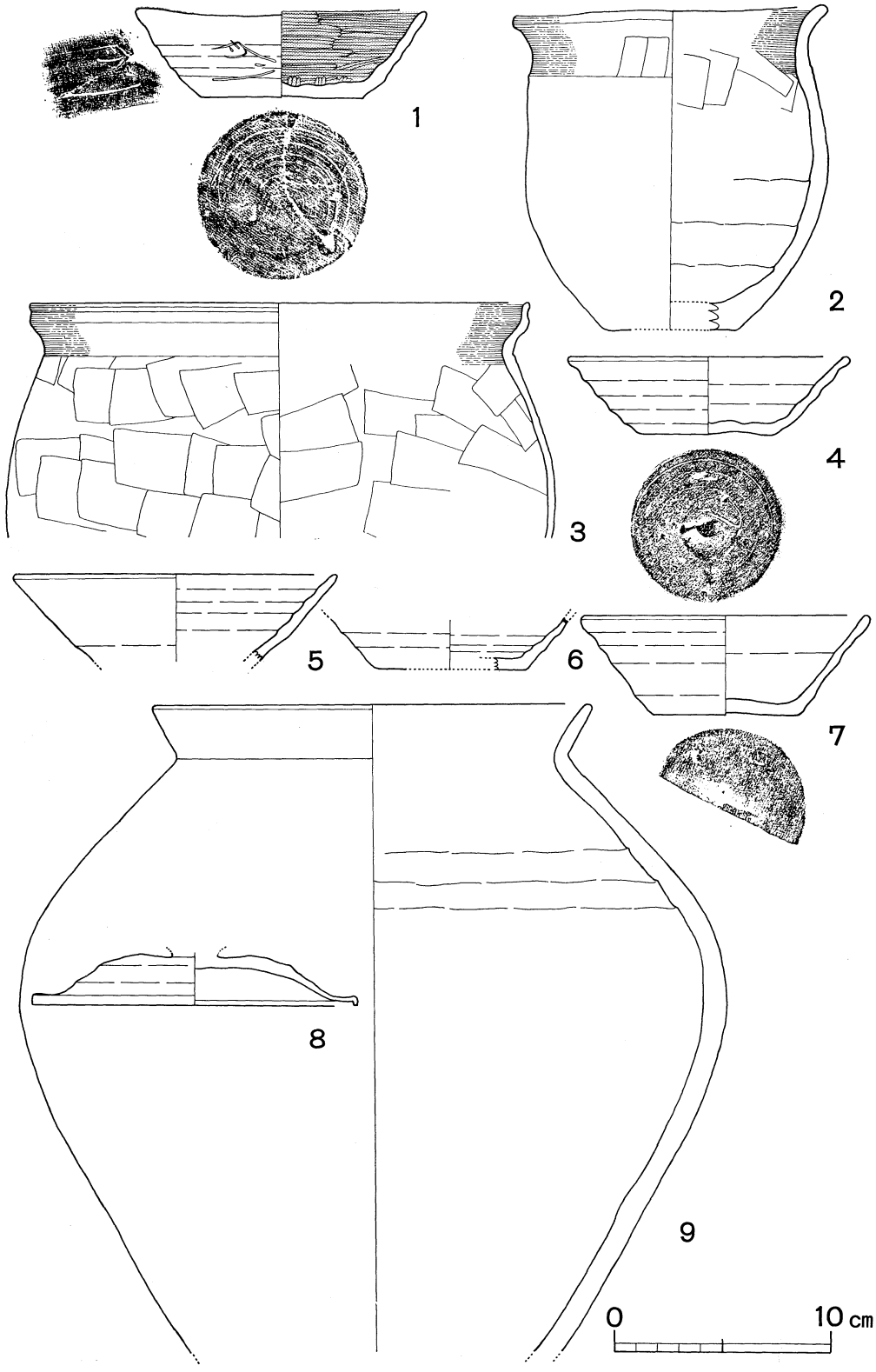
2・6・7は埋没土からの出土であり，他は床面上であった。1の土師器坏は回転ヘラ切り離しで，体部下端を回転ヘラ削り調整している。内面はヘラ磨きの後に黒色処理を施す。体部外面閣刻字がみられる。2，3は土師器甕である。2は頸部外面にやや稜を有し，粗砂粒を多く含む。3は口縁部断面がS字状を呈し，雲母と白色砂粒を含む。いわゆる下野型と呼称される甕と類似する。4～7は須恵器坏で，すべて回転ヘラ切り離しのままである。体部は直線的に立



図—25　3号住居跡北カマド



図—26　3号住居跡東カマド



図—27　3号住居跡出土遺物

表—14　　3 号 住 居 跡 出 土 遺 物 一 覧 表

土器番号	出土位置	器種	法量 cm	器形の特徴	調整の特徴	胎土焼成・色調	備考
1	北東隅	坏	13.6 5.1 9.0	体部は直線的に立ち上る。口縁部はややゆがむ。端部がすこし厚い。体部外面期ヘラミガキの文字有り。	ロクロ成形。底部回転ヘラ削り，外面の体部下端回転ヘラ削り，内面底部は一定方向の，体部は横位の丁寧なヘラミガキ。	砂粒を含む 焼成不良 外面淡褐色，内面黒色	土師器 完形内面黒色処理
2	覆土	甕	14.5 15 (6.2)	口縁部は短かく外傾し，体部はやや膨らみをもち底部にいたる。頸部外面にやや稜を有す。	口縁部内外面横ナデ，体部内面はヘラナデ調整。	粗砂粒を多く含む 焼成やや不良内外面赤褐色	土師器 底部欠損
3	北カマド前	甕	(23.0) —— ——	口縁部は短かく外反し，端部がけずりとられる。断面「S」字状を呈す。	体縁部内外面横ナデ，胴部内外面は横方向のヘラナデ調整。	雲母と白い砂粒を含む焼成良好暗褐色を呈す	土師器口縁部½残
4	北カマド近く	坏	(13.0) 3.6 6.2	体部は直線的に開き，口縁部はやや屈曲する。やや薄手である。器高がやや低い。	ロクロ成形，回転ヘラ切。	黒色粗砂粒を多く含む焼成やや不良淡灰色を呈す	須恵器½品
5	北カマド前	坏	(15.0) —— ——	体部は直線的に大きく開く。	ロクロ成形，内面に比べ外面のロクロ痕は明瞭でない。	砂粒を多量に含む 酸化焔による焼成で良好内外面灰褐色	須恵器 底部欠損
6	覆土	坏	—— —— (7.0)	体部は直線的に開く。	ロクロ成形。回転ヘラ切り。	微砂粒を含む焼成良好灰色を呈す	須恵器 底部から体部破片
7	〃	坏	(13.4) 4.6 (6.6)	体部は直線的に開き，端部の壁が厚くなる。	導クロ成形。回転ヘラ切り。	砂粒を含む焼成良好灰色を呈す	須恵器½品
8	東カマド前	蓋	(15.0) —— {—— ——	口縁部は反転気味に広がり，端部は垂直に下る。天井部は高く偏平である。	ロクロ成形。天井部外面回転ヘラ削り調整。	微砂粒を含む焼成良好灰色を呈す	須恵器ツマミ欠損
9	南西隅	甕	(20.2) —— ——	口縁部は短かく「く」の字状に外反する。胴部やや上位に強い張りを有す。	輪積み成形。全面タタキ目。内面は剥落している。	微砂粒雲母も若干含む焼成良好灰色を呈す	須恵器 底部欠損

※　法量の欄，上より口径・底径・器高（　　）内は推定値

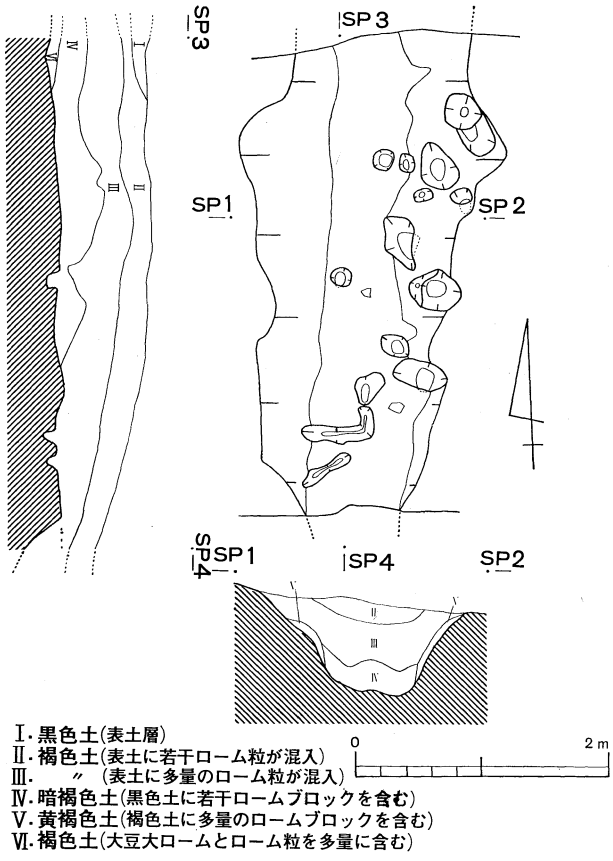
ち上る。4のみ器高がやや低い。

溝　（図—28，図版—11）

調査し得たのは南北に延びる溝の一部であり，その位置は住居跡の西側斜面にある。溝の走向は，その大部分が調査区外にあるため不明である。確認面（ローム上面）での幅は約1.5*m*，底面幅は約0.5*m*，深さは0.7～0.8*m*であり，断面形は緩いU字形を呈する。埋没土はレンズ状堆積を示し，自然堆積であろう。溝東側面斜上端部と底面立ち上り部にかけて小ピットが数個づ

つ検出された。上端部の小ピットの深さは40〜50㎝であり，斜面下のものは深さ40㎝のものや10㎝前後のものなど一定しない。だがピットの掘り方は溝の確認面以上では認められず，溝の掘り方を出してから検出された。このためピットは溝に伴うと思われる。溝西側斜面からこの様なピットは検出されなかった。これらの小ピットは溝に伴い構築された柵列の様なものではないかと思われる

遺物　溝の底面から，須恵器蓋破片と外面に鎬葉文をもつ青磁椀の口縁部破片が出土している。出土遺物は溝に伴うものと思われる。これらは1・3号住居跡出土遺物とほぼ同時期ではないかと思われる。

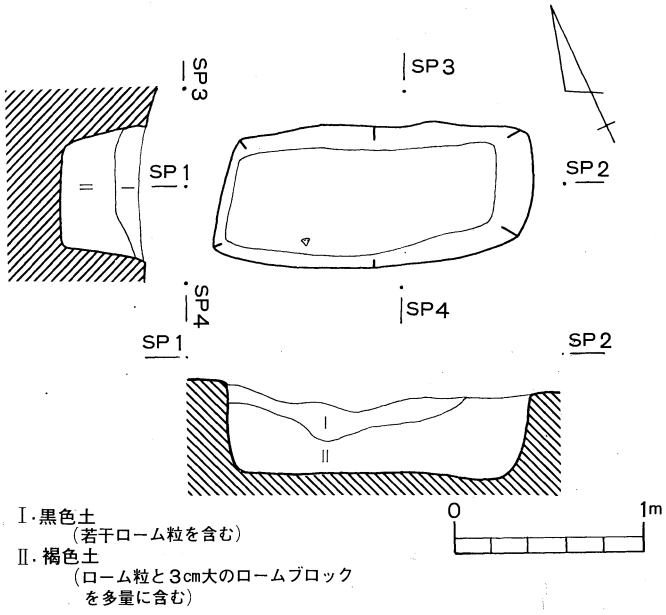


図—28　1号溝状遺構

土坑（図—29，図版—11）

本遺構は先土器時代遺物出土地点東側で検出された。平面形は長方形(長径1.6×短径0.7m)を呈す。壁高は約40㎝で，やや内側に掘り込まれている。床面は平だが柔かであった。

覆土はロームブロックを多量に含むしまりの悪い褐色土が大半で，その上に若干表土と同じ黒色土が堆積している人為的に埋められたものであろう。出土遺物はなく，時期性格ともに不明である。



図—29　1号土坑

V まとめ

1 先土器時代遺物について

——石器群の編年——

武蔵野台地の関東ローム層のうち立川ローム層のⅢ層中に生活面を置く石器群は，槍先形尖頭器を主体とするもの，細石刃を主体とするものの二種ある。[1] このうち槍先形尖頭器についてはⅢ層に文化層を持つ石器群より前にその萠芽がみられる。[2] 対して細石刃はⅢ層にいたってはじめて出現するものである。武蔵野台地のⅢ層に生活面のある石器群は，その組成内容から相模野台地の立川ローム層のうちＬ１Ｓ～Ｌ１Ｈのそれと対比される。[3] 但し後述するように，武蔵野を主なフィールドとする研究者と同様に相模野を対象とする研究者間では，武蔵野Ⅲ層に対比される石器群のとらえ方に多少の差異がある。

ここでは，武蔵野Ⅲ層中の石器群について二・三の遺跡を通して，本遺跡の石器群の編年的な位置を考察する。

西之台遺跡Ｂ地点[4]ではⅢ層中に三枚の文化層が検出された。それぞれ第Ⅲ上層文化，同中層文化，同下層文化と呼称されている。上層文化には上部では縄文草創期の土器片，下部には細石刃の一部が混在する。石器は安山岩製の大形両面調整尖頭器，各種削器，チョッパーに特徴がある。削器は比較的大形で表面に自然面を残すものである。縄文時代石器と類似性が高い。中層文化は黒曜石主体の石器群で，細石刃・同核に特徴を示している。下層文化は詳細な内容は不明であるが，安山岩・硬質頁岩を主体とした大形幅広剥片で特徴づけられる。石器にはチョッパー，削器がある。注目すべきなものは，剥片に縦長例と横長例の二種あることである。[5]

野川遺跡の第Ⅲ文化層石器群は，Biface point，Peffle tool，大形幅広のFlake と Core が特徴的である。石刃技法は既にない段階とされる。

武蔵野公園遺跡の第Ⅲ文化層石器群[7]は，組成内容からみて細石刃文化段階の資料とされる。石器は黒曜石製の半円錐形細石刃核と細石刃，大形の剥片を素材とし一端を尖らせる形態のスクレイパー[8]，その他剥片などである。剥片は西之台遺跡Ｂ地点第Ⅲ下層文化と同様縦長例と横長例の二種認められる。

以上三遺跡のⅢ層石器群をまとめると次のようになろう。

① 多様な尖頭器と細石刃の存在。

② 大形の剥片が素材となった各種の削器。

③ 縦長・横長の二種の剥片。

④ チョッパーなどの礫器の存在。

対して，本遺跡の石器群は[10]，削器①～③と目的的剥片①，②及び礫器に特徴がある。更に削器②，目的的剥片①より石刃技法的な剥片剥離方法の存在を考えることができる。また細石刃の可能性のある石器（図—15上段44，140，141）の存在もある。[11] 多少の差異はあるものの武蔵野台地でいえばⅢ層中に文化層のある石器群と本遺跡の石器群の対比は可能であると考えた。

更に強いて見れば，目的的剥片①及び②が，それぞれ武蔵野Ⅲ層の剥片の縦長例，横長例と同様であること，また本遺跡石器群は未だ確実な細石刃のないことから，西之台遺跡B地点の第Ⅲ下層文化の不足分の一部を補い得る資料とみられる。

武蔵野を主なフィールドとする小田静夫等[12]は，先土器(旧石器)時代を大きくⅠ～Ⅳ期の四段階に分ける。対して，相模野を主な研究舞台とする鈴木次郎・矢島国雄等[13]は同様にⅠ～Ⅴ期の五段階に分ける。本遺跡の石器群に係わりが深いのは武蔵野のⅢ層中に対比される石器の段階である。それは武蔵野でいえばⅡ期終末からⅢ期乃至はⅣ期，相模野ではⅤ期となる。それぞれの段階概念で大きく異なるのは武蔵野のⅢ層下位の石器群の位置づけにある。[14]

武蔵野Ⅲ層に対比される石器群は，比較的短時間のうちに，ナイフ形石器の激減，尖頭器の爆発的な増加，細石刃の登場更には土器製作の開始とそれぞれの事象が相互に絡み合いながら変遷していく複雑多岐な段階にある。これらを理解するには，石器群の段階的な把握も，組成石器の器種構成・各の量的な把握も大切なことではあるが，剥片剥離技術等の石器製作技法の検討がより重要であろう。石は粘土程の可塑性はない。各種石器の形態は素材となる剥片・石質等にかなりの制約を受ける。各種石器製作に際しては，それらの素材となる剥片等の作成により配慮しなければならなかった。各地域によって入手できた原石は異なる。しかし，各地域のある段階に同様な形態の石器を見いだすことができる。これは，石器製作技術ひいてはその素材となった目的的剥片剥離技術に，地域を超えた共通性のあったことを示している。石器そのものは広範囲な移動はしない。より広範囲に移動するものは各種石器の製作技法である。つまり石器製作のための剥片剥離等の技法である。かくて，各々の先土器時代の石器群における目的的剥片の抽出とその基本となった剥離技術の把握がかなり重要な研究課題となるのである。

本遺跡の目的的剥片は①と②の二種ある。それはこれらが素材となった削器②，③によって裏付けられる。目的的剥片①，②は，それぞれの背面に見られるネガティブな剥離痕，打面の形状によってそれぞれ異なった剥離方法によると推測された。本石器群の編年的な位置は，主としてこの二種の剥片の存在から考察した。

本遺跡の石器群の検討から，栃木県中南部の関東ローム層のうち田原ローム上半にみられるソフトロームの南関東の立川ロームへの位置付けについて多少の問題提起が出来るので以下に述べておく。

本遺跡の石器群の出土層位は，田原ローム上半のソフトなローム中にある。またこれらは南関東の武蔵野においては立川ローム最上位に含まれる石器群に対比できる。また相模野においては，L１Hに文化層を持つ石器群に対比できた。

(註)

(1) 鈴木次郎・矢島国雄，1978「先土器時代石器群とその編年」日本考古学を学ぶ(1)

(2) 白石浩之はナイフ形石器の剥片剥離技術と尖頭器の素材作出の過程が明瞭に分けられな

いことから，ナイフ形石器群と尖頭形石器群の技術基盤は類似性が高く共有部分が多いとした。（白石浩之，1981「尖頭器製作技術とその様相」野州史学第５号）つまりナイフ形石器の主体的な石器群の存る時期に尖頭器の出現を考え得ることになろう。

(3) 註(1)前掲書

(4) 東京都教委，1980「小金井市西之台遺跡Ｂ地点」

(5) 縦長例は本遺跡目的的剥片①に，横長例は同②にそれぞれ類似する。

(6) 小林達雄・小田静夫他，1971「野川先土器時代遺跡の研究」日本第四紀学会編

(7) 野川遺跡調査会，1973「武蔵野公園遺跡Ｉ」

(8) 本遺跡図―10の 147 に酷似している。この形態のスクレイパーはシステムＢの細石刃文化の遺跡で発見されることが多いとされた。

(9) 西之台遺跡Ｂ地点第Ⅲ下層文化は細石刃文化以前のものとされる。対して武蔵野公園遺跡は細石刃文化段階のものである。Ⅲ層の中下層は現実には判然と分離されないのではなかろうか。例えば同一時期に併存していても，また同一文化層中共存していても良いと思われる。横長の剥片については，武蔵野公園遺跡では両面加工尖頭器との関連でとらえている。

(10) 本文Ⅳ―１―(2)参照

(11) 細石刃核は検出されなかったので，まだ確実なものではない。

(12) 小田静夫・Ｃ・Ｔ―キリー，1979「Ｊapoese　Ｐaleolithic　„Chronology」，赤沢威・小田静夫・山中一郎，1980「日本の旧石器」など

(13) 註(1)前掲書など

(14) 小田等はⅡ期とⅢ期の違いを主としてナイフ形石器の有無に求めた。つまりナイフ形石器の多少残存する時期，Ⅲ層下位についてはⅡ期最終末とした（註12前掲書）。対して鈴木等はⅢ層に対比されるもの全て―相模野でいえばＬ１Ｓ～Ｌ１Ｈに生活面を持つもの―をⅤ期とする（註13前掲書）。これはおそらく石器群の出層層位の主として考慮する研究姿勢，対して組成石器群を主として考慮する研究姿勢の差異とみられる。筆者は，ローム層のより綿密な細分があれば，まづは層位を主とするのが妥当と考える。

2　歴史時代住居跡と出土遺物について

本遺跡より検出された歴史時代住居跡は1・3号住居跡の2軒であった。本項では出土土器を基にして住居跡の時期の検討は，出土土器の供給地の考察を行う。このうち時期については実年代を示す資料がないため，須恵器坏形土器の分類を基に，歴史時代土器の編年がなされている薬師寺南遺跡[1]と，近くに所在する星の宮ケカチ遺跡[2]出土土器群との比較の上に検討したい。

（1）　本遺跡出土の須恵器坏形土器の分類

本遺跡から出土した須恵器坏は合計12点（高台付坏を除く）とあまり多くはないが，器形・胎土などから次の様に分けることができる。

器型

Ⅰ類・底部から直線的に立ち上る（1号住―6・7・10・12，3号住―4～7）

Ⅱ類・底部からやや内湾ぎみに立ち上る（1号住―8・9・11，3号住―なし）

Ⅲ類・体部に丸みをおびている（1号住―13，3号住―なし）

この様に底部から体部の立ち上り方で3類に分けることができた。しかし全体的には幾つかの共通点もみられ，以下に略記する。

◦　口径と底径の比が½か，それ以下である。

◦　底部は回転ヘラ切り離しのままで，その後調整は施されない。（1号住―14のみに糸切り離し技法がみられる。）

なお，1号住―6・7・11底部にヘラ記号がみられる。1号住--12の内面にはヒダスキ痕がある胎土の分類

A類・粗砂粒，白色粒を多く含み，暗灰色・灰色を呈する。（1号住―6・8～13，3号住―6・7）

B類・粗砂粒，白色粒を少量含み，白灰色を呈する。（1号住―なし，3号住―4）

C類・胎土には砂粒の非常に少ない粘土を使用し，褐色を呈する。（1号住―7，3号住―5）

以上Ⅰ～Ⅲ・A～C類に分類することができた。本遺跡出土の須恵器坏はⅠ・A類に属するものが多い。

（2）　1・3号住居跡の時期

上述の須恵器坏の分類と，少数だが土師器坏も加え検討する。

本遺跡出土の土師器坏―1号住・1・2・4，3号住・1　計4点

これらの特徴を記すと，すべてロクロ成形され，底径と口径の比はほぼ½である。体部下端を回転ヘラ削り調整し，内面は入念なヘラ磨きが施され黒色処理される。1号住出土土器の体部はやや内湾ぎみに立ち上り，3号住出土土器の体部は直線的に立ち上る。

一方，薬師寺南遺跡歴史時代土器編年のうち9世紀代に含まれる土器群（須恵器・土師器坏）

の特徴[3]を記して比較してみたい。

第Ⅳ期（9世紀前半）

須恵器坏，底径が口径の½より大きく器高が低いもので底部全面をヘラ削り調整する土器の最終段階であり，ヘラ切り痕をそのまま残すものが多くなる。糸切りのものも少量出土する。

土師器坏　ロクロ土師器が本格的に使用される段階であるが，まだ器形的にばらつきがあるなお，ほとんどのものが底部全面を回転か手持ちヘラ削りしている。数例糸切りのものもある内面はすべてヘラ磨き後黒色処理を施している。

第Ⅴ期（9世紀半ば以降）

須恵器坏　ヘラ切りで底径が口径の½かそれよりも小さくなる特徴をもつ。また糸切りのものも少数存在する。

土師器坏　ロクロ技術が定着し器形が規格化され，大形の坏と小形の坏が区別されてくる。技法的には，内面のヘラ磨き，黒色処理が例外なく施されており，切り離し技法はほとんどが糸切りである。

ここに本遺跡の出土遺物を対比させると，須恵器坏は口径と底径の比が½かそれ以下で，底部はヘラ切り離しのままということよりⅣ～Ⅴ期（薬師寺南遺跡編年第Ⅲ群）に近い。また土師器坏は口径と底径の比がほぼ½で，底部回転ヘラ削り，内面はヘラ磨き・黒色処理を施すことより，Ⅴ期（薬師寺南遺跡編年Ⅳ群）に近い。

この結果，本遺跡の歴史時代住居跡は薬師寺南遺跡土器編年でいうところのⅣ～Ⅴ期（9世紀前半～半ば以降）という時期に近いと思われる。

一方，本遺跡のすぐ北に位置する星の宮ケカチ遺跡は薬師寺南遺跡のⅣ期（9世紀前半）を中心とする時期の遺跡であるとされる。星の宮ケカチ遺跡の須恵器・土師器坏の特徴を列記すると次の通りである。

◦須恵器坏は全てがヘラ切りのままで，底径は口径の½かそれ以下である。体部の立ち上りは直線的である。

◦土師器坏は底部全面と体部下端に回転ヘラ削り調整を施す。出土数は少なく，糸切り離しのものは確認されていない。

このことより本遺跡歴史時代土器は，星の宮ケカチ遺跡出土土器に類似するため，これと同時期か後出するものであろう。

以上時期の考察に関しては，薬師寺南遺跡の9世紀代土器群との比較の上で行なった。その結果，薬師寺南遺跡Ⅳ・Ⅴ群の土器と星の宮ケカチ遺跡出土土器には大きな違いがあることがわかる。これは同時期の本遺跡と薬師寺南遺跡の違いにも相通じるものであり，以下にそれを摘出してみる。

◦薬師寺南遺跡[4]では，9世紀前半まで量的に須恵器坏が非常に多く土師器坏は少ない。この様相は9世紀後半になると，須恵器と土師器の量は逆転する。土師器坏（ロクロ成形土器）の底部切り離しはほとんどが糸切り離しのままであり，一部に底部または体部下端も手持ちヘラ

削り調整したものがあるのみである。

◦本遺跡等では，9世紀代の土師器坏の出土量は非常に少ない（宇都宮市瑞穂野団地遺跡[5]においては，9世紀代と思われる遺構からの土師器坏の出土は確認されていない。）。また土師器坏については，底部糸切り離しは見られず，ほとんどが底部全面と体部下端に回転ヘラ削り調整を施している（この土師器坏に見られる技法は真岡市井頭遺跡[6]出土土器にも存在する）。

これら土師器坏の9世紀代における出土量と技法の相違はいかなることによるものであろうか。上記の土師器坏の技法の差異は，地域差・遺跡ごとの差によるものと考える。また須恵器坏の出土量は，遺跡と生産地（窯跡）との関係の深さによるものともみられる。

(3) 本遺跡出土須恵器の供給地

本遺跡出土の須恵器坏の特徴と，付近に存在する窯跡出土土器を比較して供給地を考えてみる。

滝ノ入[7]・倉見沢窯跡[8]出土遺物

両窯跡とも大羽古窯跡群であり，土器が類似しているため，共に特徴を記す。

◦ 体部は底部からほぼ直線的に立ち上がる。
◦ 口径と底径の比が½かそれ以下である。
◦ 底部はヘラ切り離しのままで調整は施されない。
◦ 胎土は砂粒を多く含む。
◦ 色調は暗灰色・灰色を呈す。
◦ 底部にヘラ記号のあるものが多く存在する。

他に滝ノ入窯跡出土のものの中に少数だが糸切り離しのものと，内面にヒダスキ痕がみられるものがある。

本沼窯跡群採集遺物

◦ 体部は底部からやや丸みをおびて立ち上る。
◦ 口径と底径の比は½以上と大きい。
◦ 器高が比較的低い。
◦ 底部はヘラ切り離しのままで調整は施されない。
◦ 色調は暗灰色・灰色を呈す。

須釜窯跡

現在は甕の破片しか採集されていない。

以上，調査が行なわれた窯跡は少なく，不明な点も多いが知れる範囲で記した。

本遺跡出土須恵器で上記の窯跡に出土遺物に類似すると思われるのは，Ⅰ—A類（1号住6・11・12・16，3号住6・7），滝ノ入・倉見沢窯跡出土遺物に類似する。また1号住6・7・10の底部にはヘラ記号があり，12にはヒダスキ痕がみられる。他に類似する遺物はみあたらない。このことより本遺跡出土須恵器坏形土器に個体のうち半数は滝ノ入・倉見沢窯で生産され，供給されたものと思われる。

(4) その他

1号住—2・3号住—1の体部下位にヘラ書きの刻字がみられる。1号住—2の坏形土器の体部下位にもヘラ書きの刻字と思われるものがみられる。3号住—1の刻字の書き順は「丿」「厂」「斤」（「勹」「斤」）「戸」「刋」とみられる。初画「ノ」の部分は全体の字のバランスからみると長過ぎるので，文字がもう一つ前に存在した可能性がある。或いは部首の一部かもしれない。読み方も不明であった。

文献

(1) 「薬師寺南遺跡」 栃木県教育委員会 昭和54年3月 本文編，歴史時代土器の編年 橋本澄朗・梁木誠

(2) 「星の宮ケカチ遺跡」川原由典他 益子町教育委員会 昭和53年3月 A・B区住居跡出土土器

(3) 注(1)前掲書205～209頁「実年代の考察」・211～213頁「ロクロ使用坏形土器について」

(4) 注(2)前掲書 まとめ

(5) 「宇都宮市瑞穂野団地遺跡」岩上照朗他 宇都宮市教育委員会 昭和53年3月 65頁「時期区分・第Ⅳ類型」

(6) 「井頭」大金宣亮他 栃木県教育委員会 昭和49年3月

(7) 「下野の古代窯業遺跡」 大川清 栃木県教育委員会昭和51年1月

「古代19・20合併」 滝口宏 大川清 早稲田大学 昭和31年

(8) 「益子の文化財・倉見沢窯跡」 大金宣亮 下野新聞社 昭和45年

先土器時代関係県内主要文献　（著者名五十音順）

阿久津純・1955），宇都宮周辺の関東火山灰層と河岸段丘（宇都宮大学研究論集第４号），1957宇都宮付近の関東ローム（火山灰）層（地球化学33），1957関東ローム層と無土器文化の層位について（下野地学会誌第２号），1962磯山遺跡の石器産出層位について（宇都宮大学々芸学部研究論集第11号）

五十嵐利勝・1979権現山北遺跡採集の石器について（権現山北遺跡宇都宮市教委埋文報告第５集）

岩上照朗・1978宇都宮市瑞穂野団地遺跡（宇都宮市教委埋蔵文化財報告第４集），1978矢板市長井高原山遺跡分布調査（栃木県立氏家高等学校研究集録11），1980星の宮Ａ遺跡（昭和54年度栃木県埋蔵文化財保護行政年報）

宇都宮市史編さん委員会，1979宇都宮市史第一巻原始・古代編第二章第一節旧石器時代

海老原郁雄1963大田原市佐久山発見の石器・塩谷町諸杉発見の石器（下野史学第16号），1965氏家町狭間田発見の石器二例（栃木県考古学研究７），1979治武エ門遺跡の石槍（昭和53年度栃木県埋蔵文化財保護行政年報）

大坪二三男，1964真岡市猿山出土の尖頭器（栃木考古学研究３）上三川町史編さん委員会，1979上三川町史資料編原始・古代・中世

斎藤一男，1974宇都宮市瑞穂野団地遺跡出土の石品（下野古代文化創刊号）

佐野市史編さん委員会，1975佐野市史資料編１原始・古代・中世

芹沢長介，1962旧石器時代の諸問題（日本歴史原始および古代Ⅰ岩波書店），1963栃木県真岡市磯山遺跡（日本考古学年報15），1968日群と古東京湾（日本文化研究所研究報告第４集），1977栃木県真岡市磯山旧石器時代遺跡出土資料磯山(東北大学考古学研究会考古学資料集第１冊），1966星野遺跡（栃木市星野遺跡第１次発掘調査報告），1968星野遺跡(栃木市星野遺跡第２次発掘調査報告），1970星野遺跡（栃木市星野遺跡第３次発掘調査報告），1974栃木市星野遺跡第４次調査報告(考古学ジャーナル90）

竹沢謙他，6319栃木県坂田遺跡調査報告（宇都宮大学歴史研究会）

田代寛，1966栃木県における先土器遺跡と遺物産出層位（栃木県考古学会誌第１集），1973ナイフ形石器二点資料紹介１（県史だより第14号），1975鳥羽新田遺跡発掘調査概報（栃木県教委）

辰巳四郎・渡辺瑞1963栃木県・那須町脇沢遺跡・逃室遺跡調査報告書（那須町教育委員会）

関東ローム研究グループ，1965関東ローム―その起源と性状―（築地書館）

栃木県史編さん委員会，1976栃木県史資料編考古一，1979栃木県史資料編考古二

中村紀男，1964栃木県茂木町小深発見の尖頭器（国大考古学会々報70），1964有舌尖頭器新資料(その１）塩谷郡喜連川町発見の例(栃木考古学研究４），1963資料紹介尖頭器（下総考古学研究会研究メモ６）1966宇都宮市雀宮発見の蔵骨器及び石器（栃木考古学研究14),1971仏沼遺跡（栃木日産遺跡），1976二宮町おつ越し遺跡出土の頭器について(県史だより第31冬），1979市貝町前窪遺跡出土の尖頭器について（県史だより第44号），1980真岡市磯山遺跡をめぐる二，三の問題（栃木県史研究19），1980栃木県内出土のナイフ形石器をめぐる二，三の覚え書き（栃木県考古学会誌第５集）

中村紀男・橋本澄朗，1977天矢場遺跡（栃木県埋蔵文化財報告書第４集）

中村紀男・山越茂，1974磯山遺跡発掘調査報告（栃木県教委）

橋本澄朗他，1979薬師寺南遺跡（栃木県埋蔵文化財報告書第23集）

塙静夫，1977栃木県の考古学第二章第一節～第五節（郷土考古学叢書　吉川弘文館）
谷島静訓，1964ゴム長はいて磯山まで―磯山遺跡発見まで―（栃木考古学研究３），1980茨城県西およびその縁辺における旧石器遺跡（那珂川の史遺跡第２集）
山越茂，1964二ツ室塚発掘調査概報本論３出土遺物(3)その他の遺物（栃木県教委）

Ⅵ　おわりに

星の宮Ａ遺跡の発掘調査において先土器時代の資料が検出されたのは全く偶然なことであった。星の宮Ａ遺跡は頭初奈良・平安時代の集落跡であると予想されていた。調査は現道の拡幅部分のみ約2500㎡が対象であった。そのため調査者自身それ程重要な調査ではなかろうと考えていたのである。

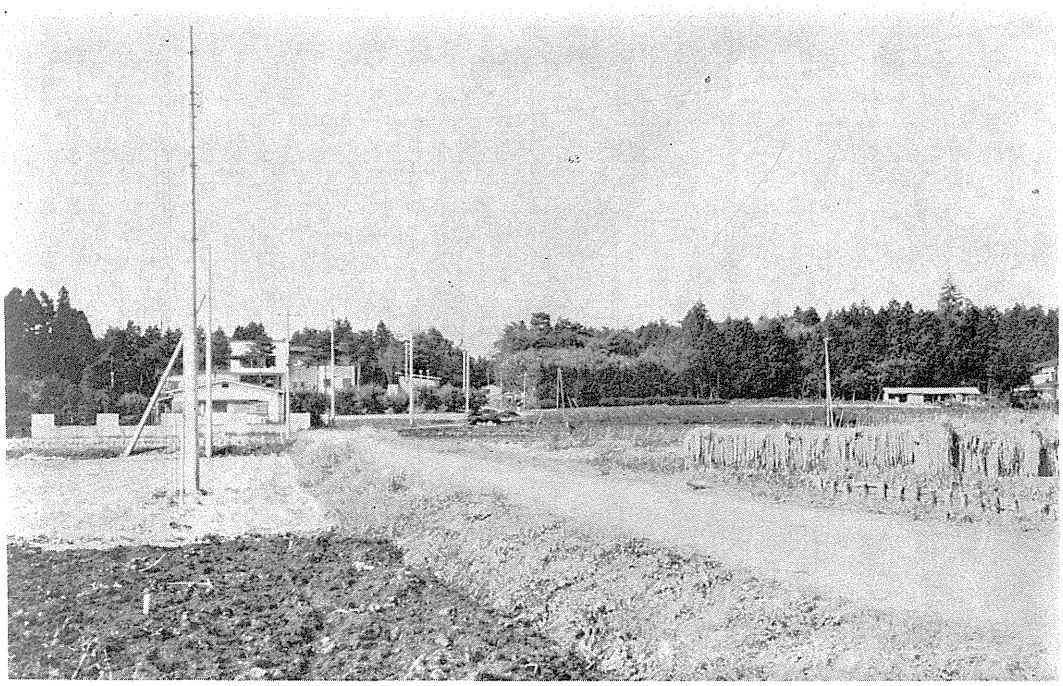
発掘調査者は往々にして，調査対象地の面積や，そこに予想される遺構数・遺物量によって，調査に対する心構えが違ってくる。より広い面積が対象となる時，より多数の遺構が予想される時，これは気持を引き締めて取掛からなければと思うのは当然であろう。対して，より狭い地域が対象となった時，或いは大した遺構の検出はないと予想された時，気持が軽くなるということ，いい替れば熱意も少なくなること或いはいい加減な気になることは否めまい。しかしそんな気持で星の宮Ａ遺跡が調査されたとしたら，おそらく先土器時代の資料は検出されなかったろう。但し，正直なところ調査頭初は，それ程厳しい心構えで調査に臨んだわけではなかった。

発掘調査は機械力による表土剥ぎから始まった。表土を剥いだ段階では住居跡三軒が確認されただけであった。しかも住居跡は三軒とも一部分が調査区外にあり，完掘することは難しかった。従って調査に対して誇れる程の熱意はあったとは言い難い。

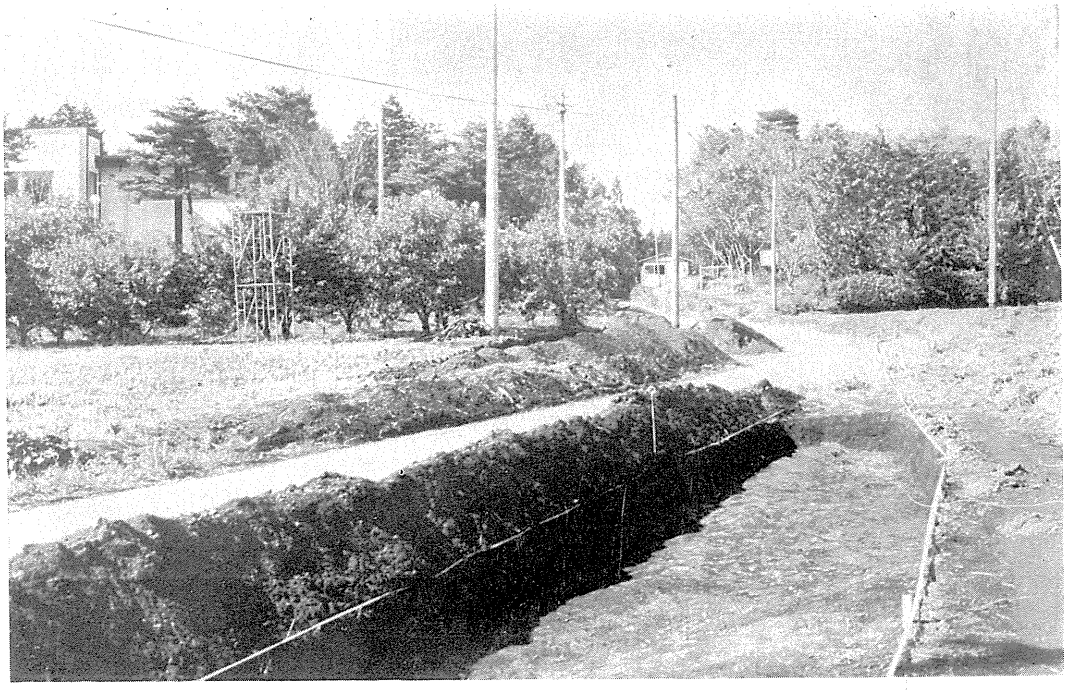
先土器時代石器群検出のきっかけは，ある剥片一片の発見である（図―11の53）。調査担当者のひとりであった桜岡が，これは何だろうと言って私たちのところへ持ってきたのが機縁となった。その一片がなければ，先土器時代の資料が検出されなかっただろうことを考えると，そら恐しい感を持つ。そしてふと思う。私たちは知らず知らず重要なことを逃しているのではないだろうかと。更に遺跡に対し，少なくとも自分の調査する遺跡に対し執着心がなくなったらおしまいだと思う。いずれにしても桜岡君には感謝したい。

本報告をまとめるにあたり，幾多の方々にご援助，ご協力，ご教示をたまわった。誌上にて御礼申し上げる次第である。

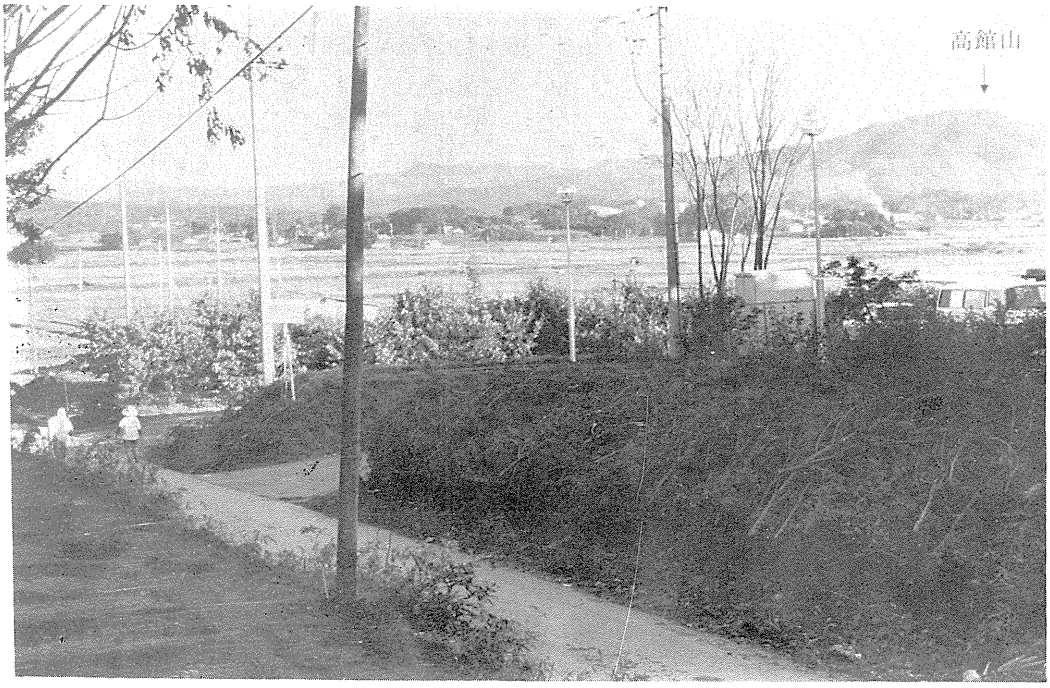
写　真　図　版



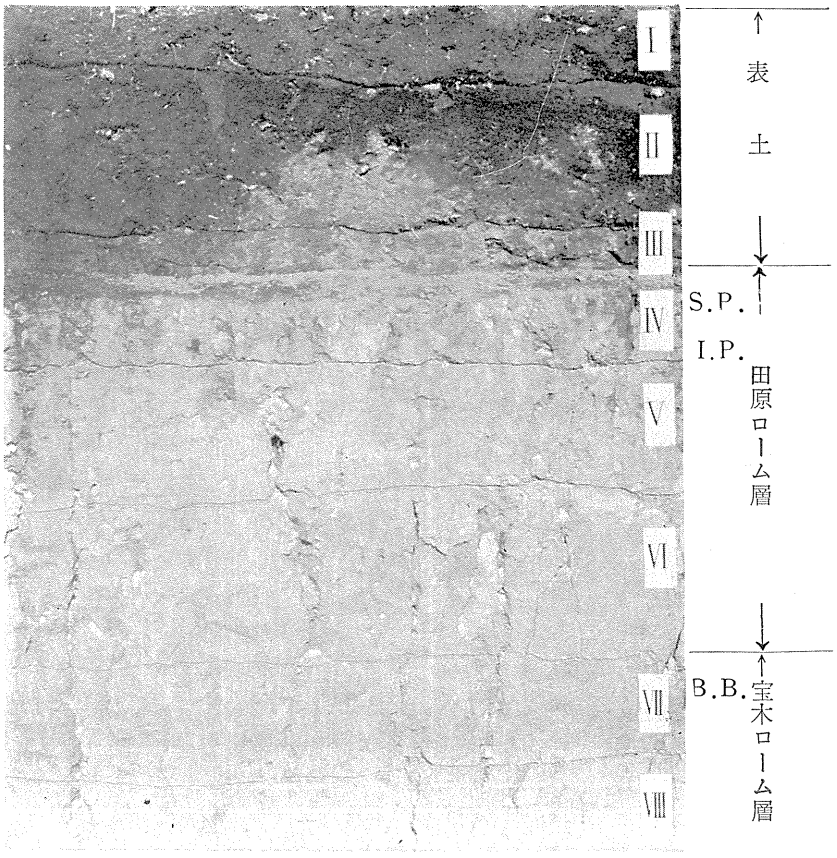
1　星の宮Ａ遺跡遠景



2　星の宮Ａ遺跡近景



1　遺跡より東方鶏足山地を望む

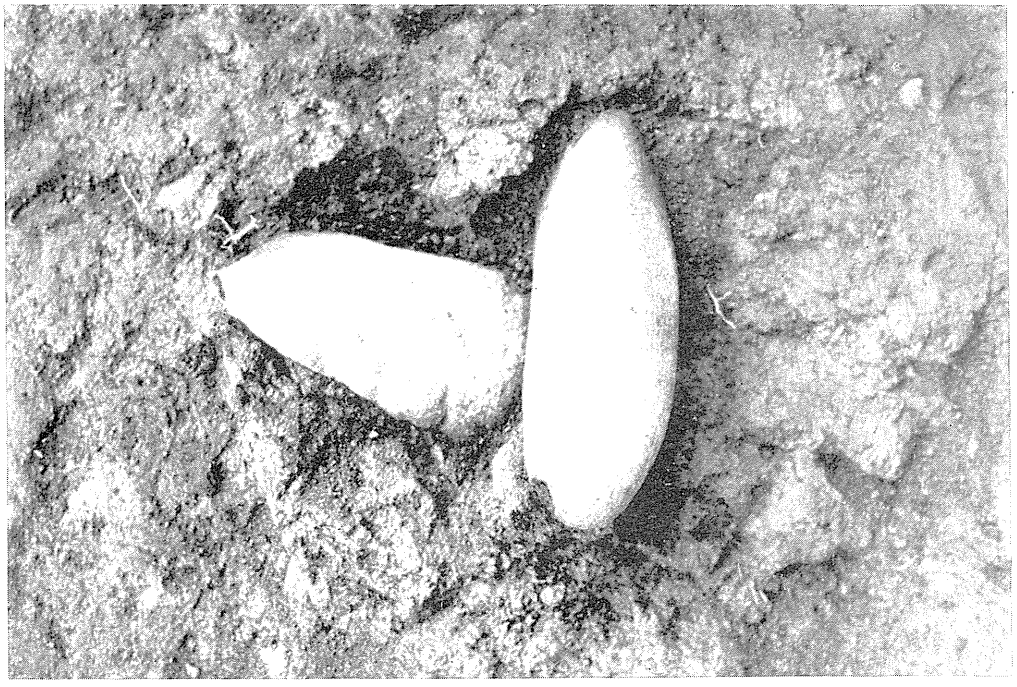


2　土層断面

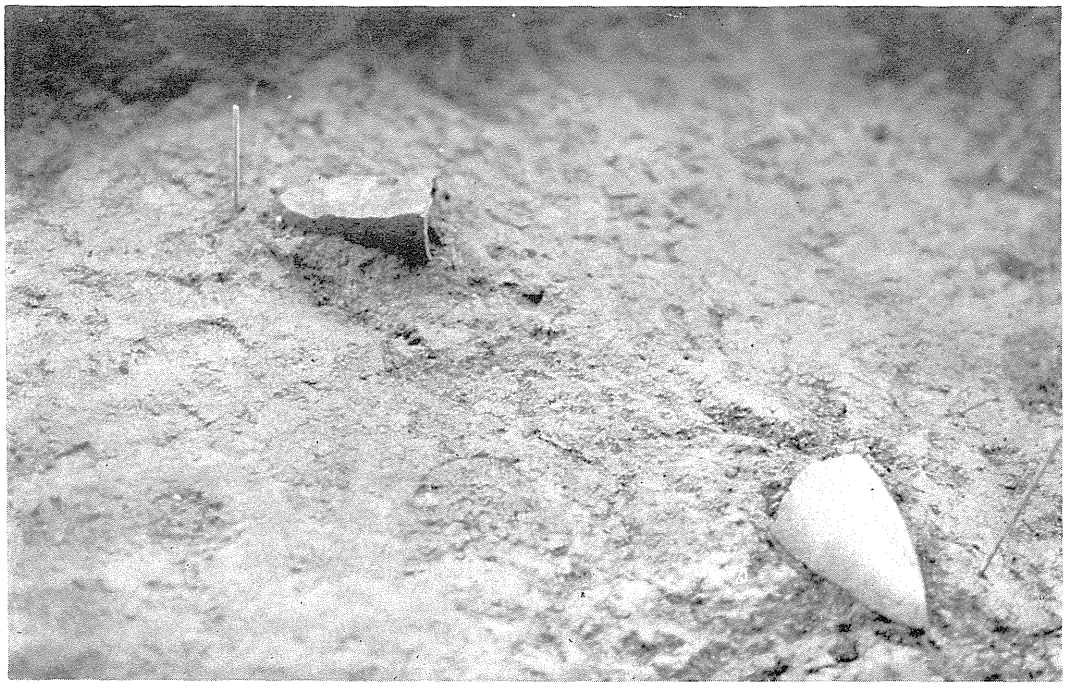
1　先土器時代
調査グリッド
（各グリッド縁はⅣ層上面，各グリッド下底はⅤ層中位）

2　礫群(1)

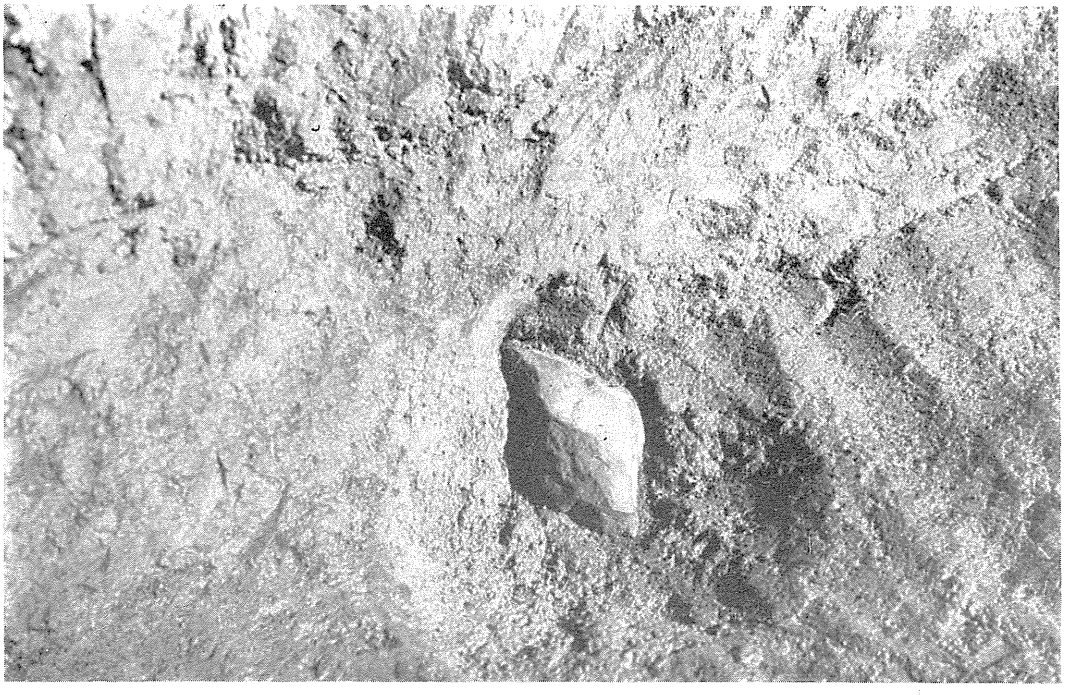
1　礫群(2)



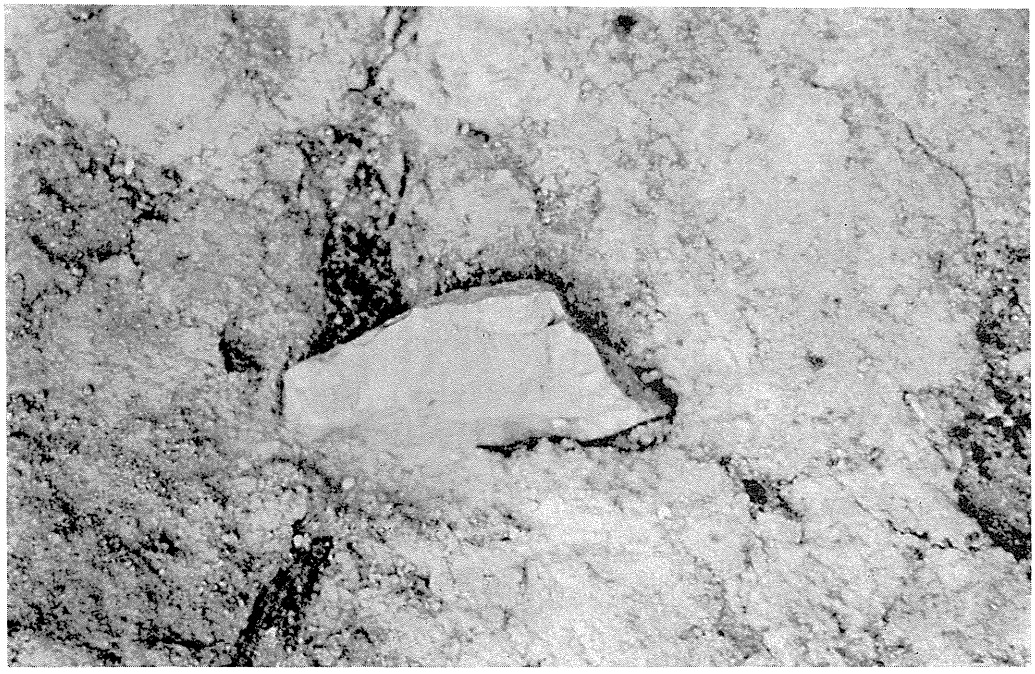
2　礫群(3)



1　礫出土状態



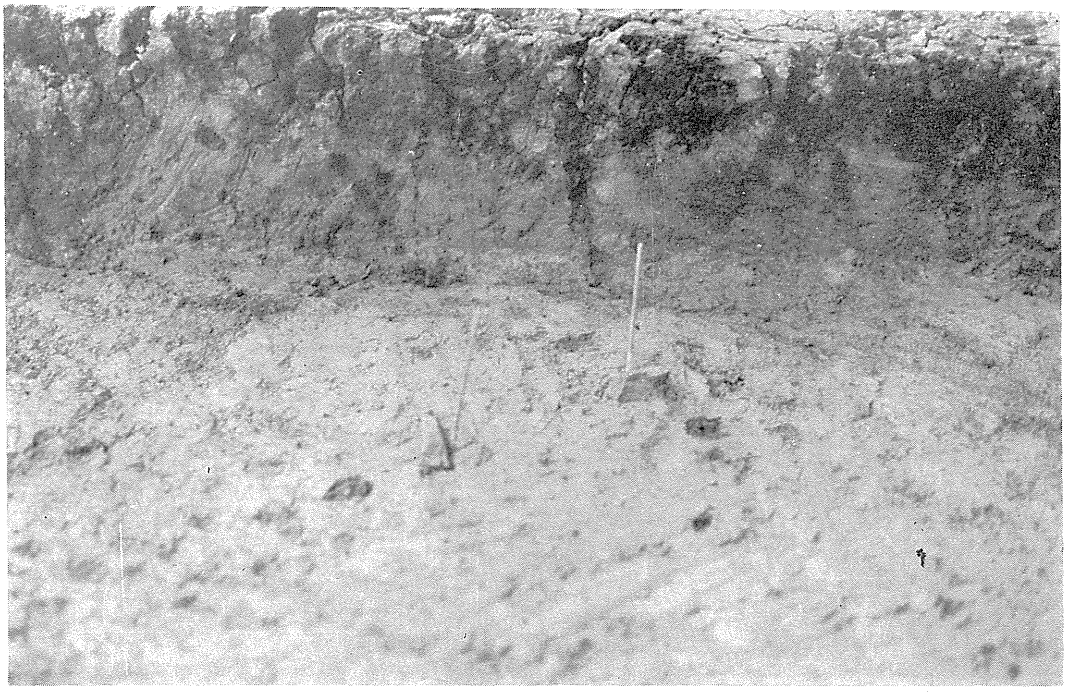
2　スクレイパー出土状態（№.１４７）



1　剥版（№１０３－１）出土状態

2　石刃（№３７）出土状態

1　剥片（№１２８，１２９）出土状態



2　剥片（№１２８，１２９）出土状態

1　1号，2号住居跡（東より撮影）

2　1号住居跡（東より撮影）

1　1号住居跡遺物出土状態（カメ）

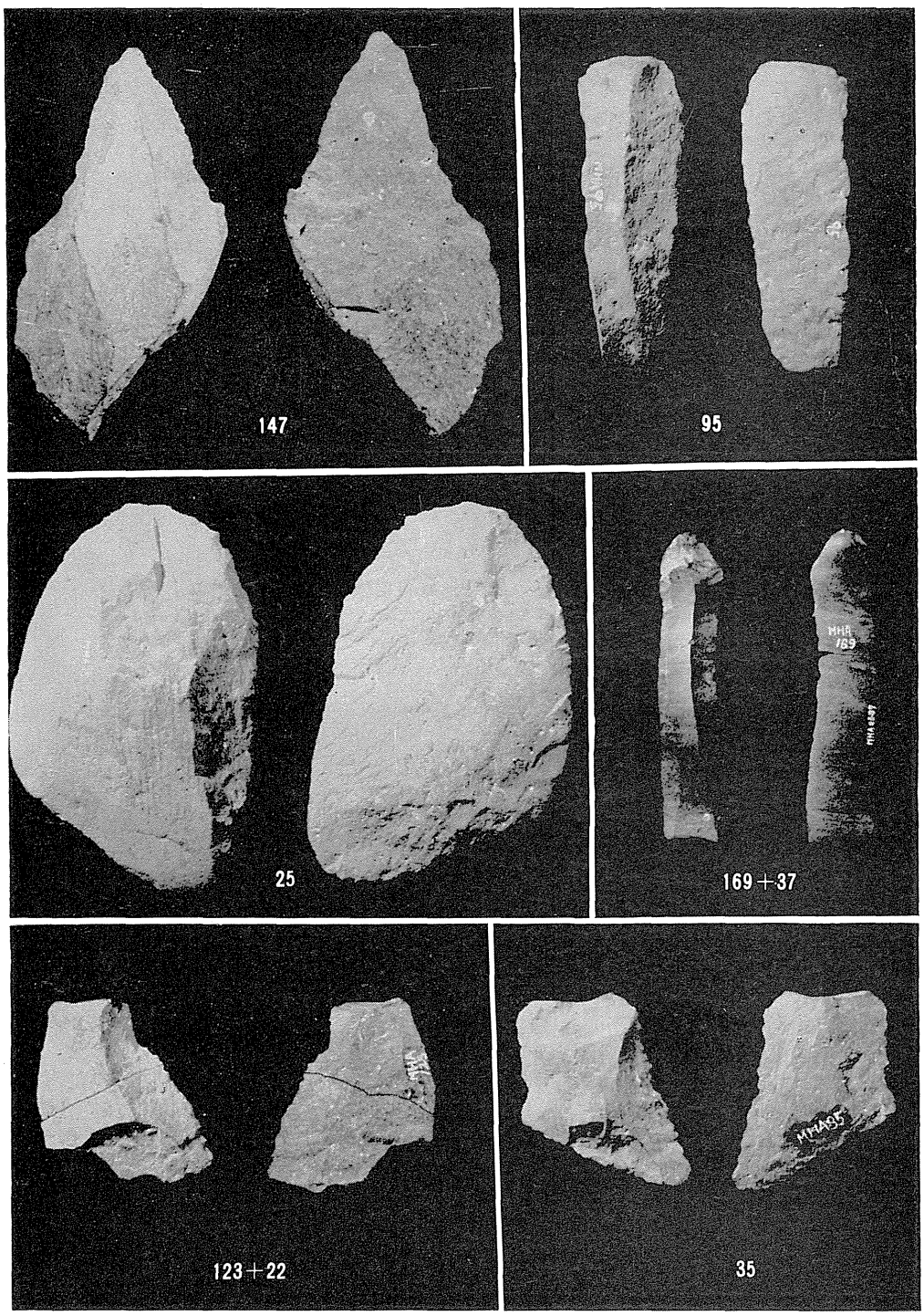
2　2号住居跡（東より撮影）

1　3号住居跡（南より撮影）

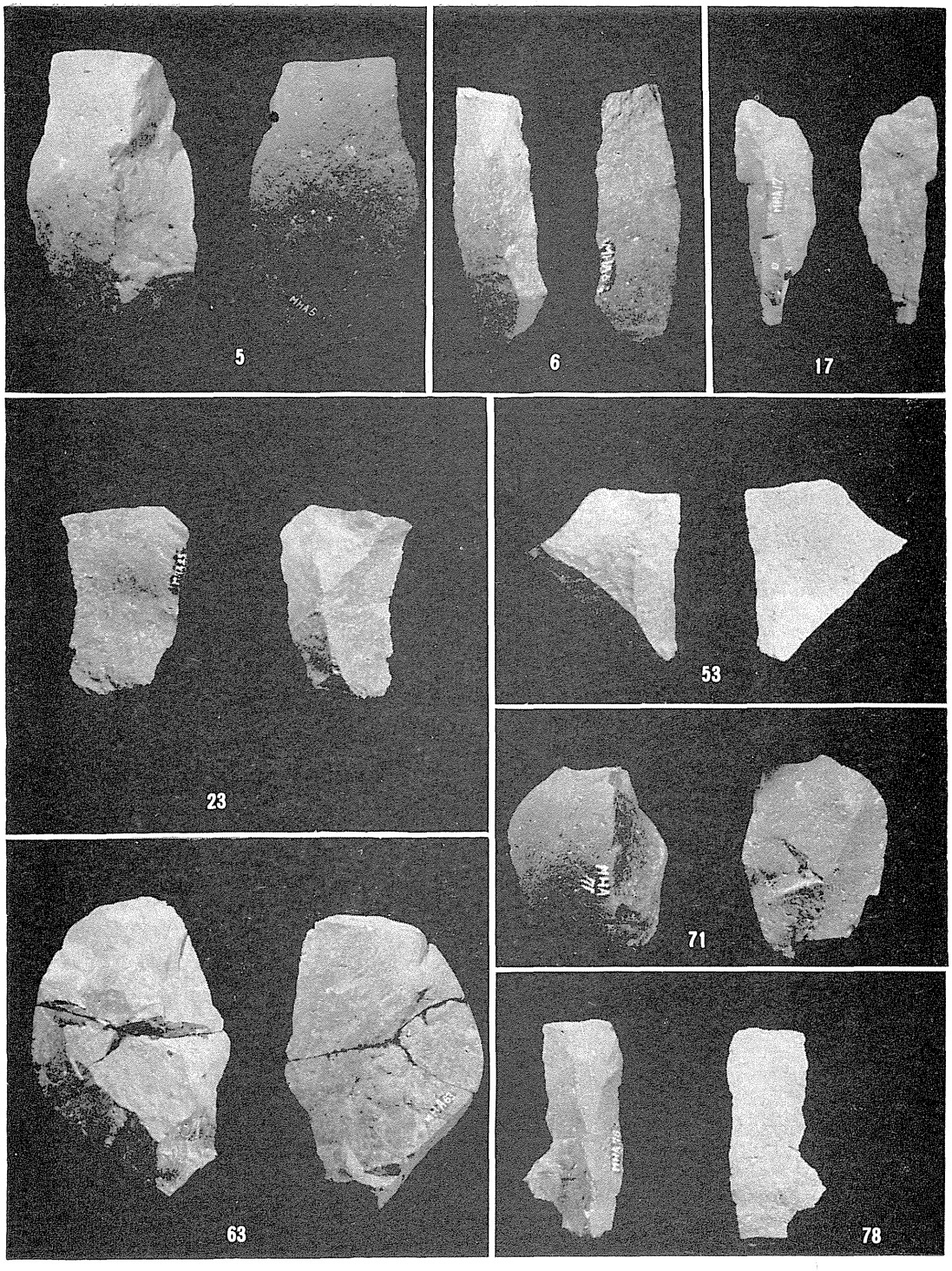
2　3号住居跡遺物出土状態

1　1号土坑

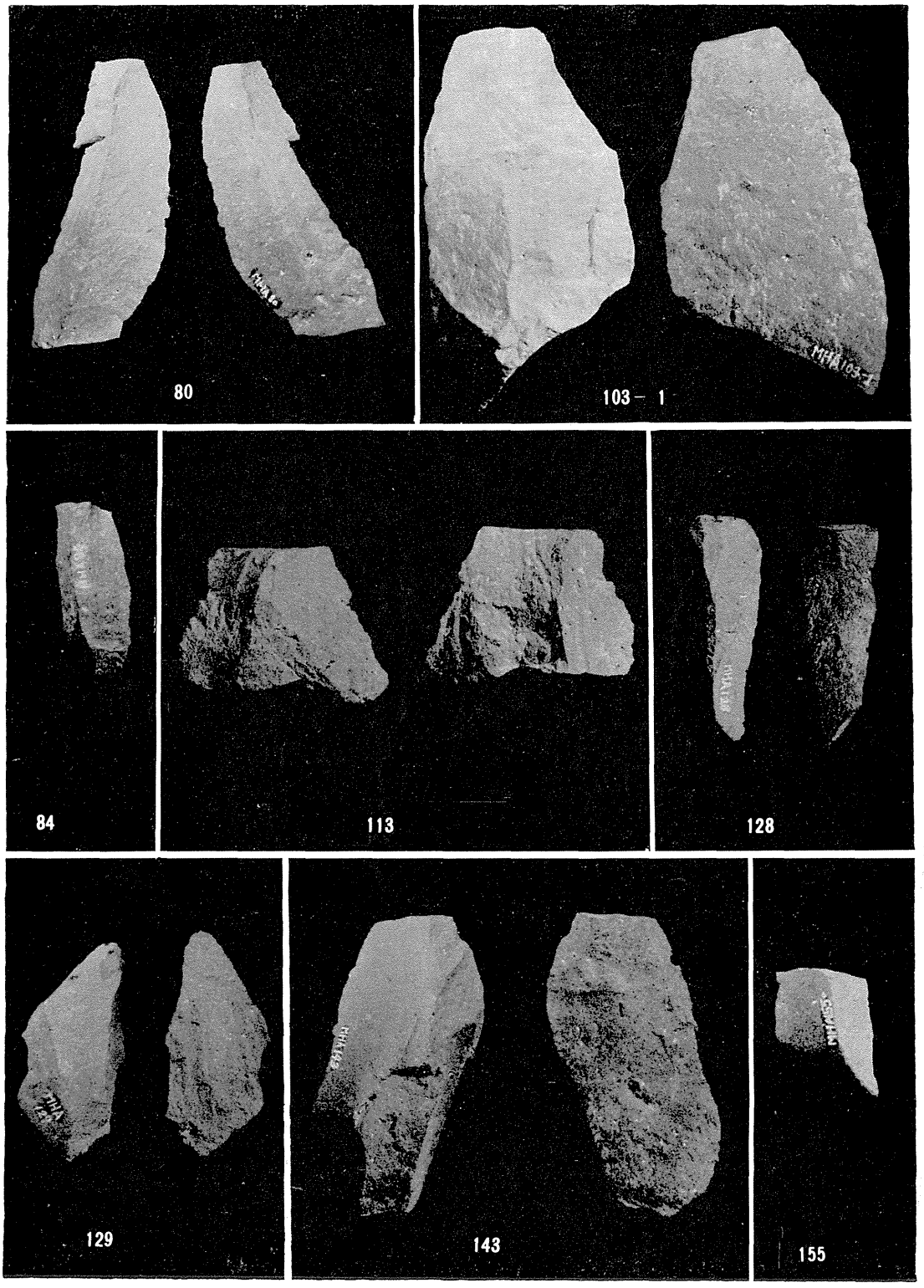
2　1号溝



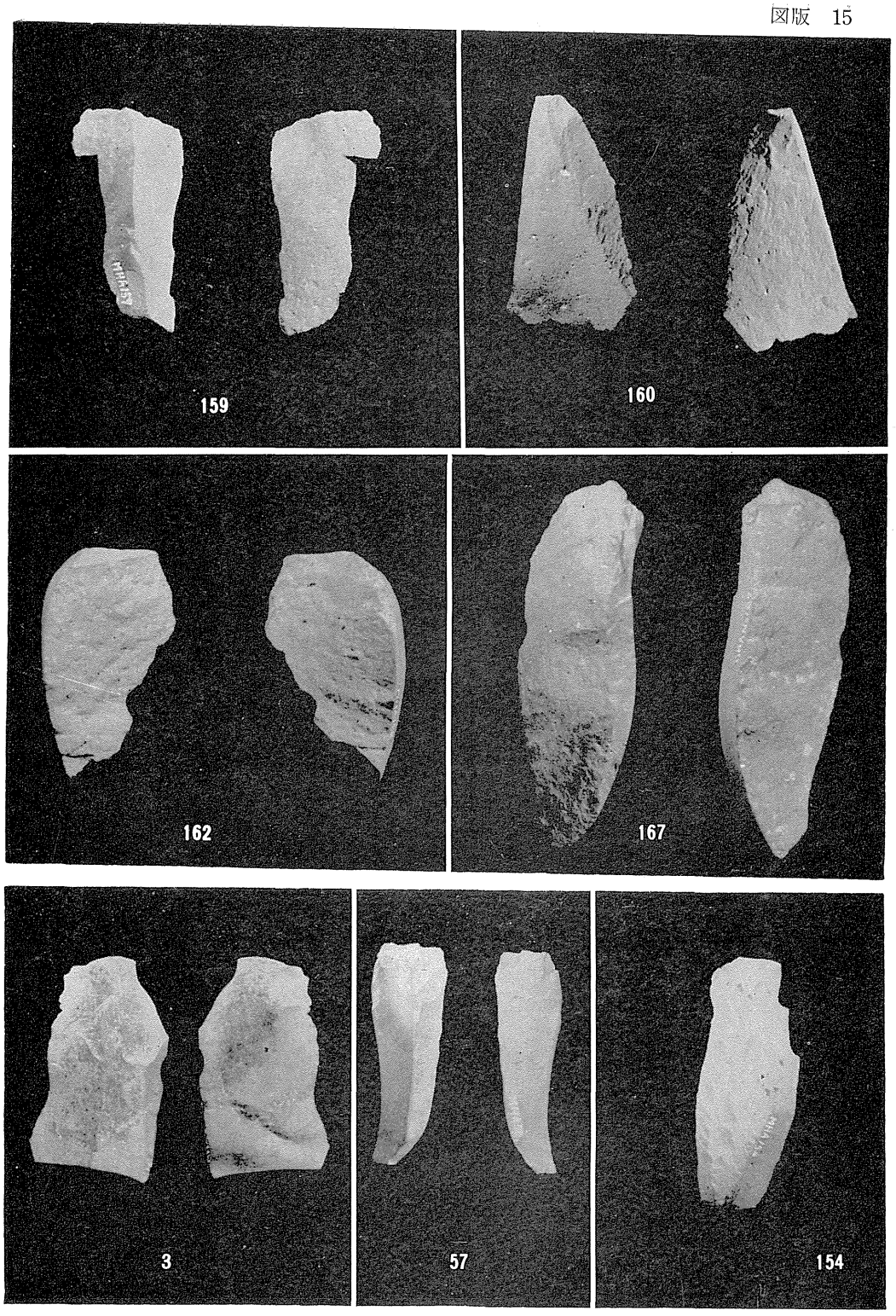
先土器時代石器



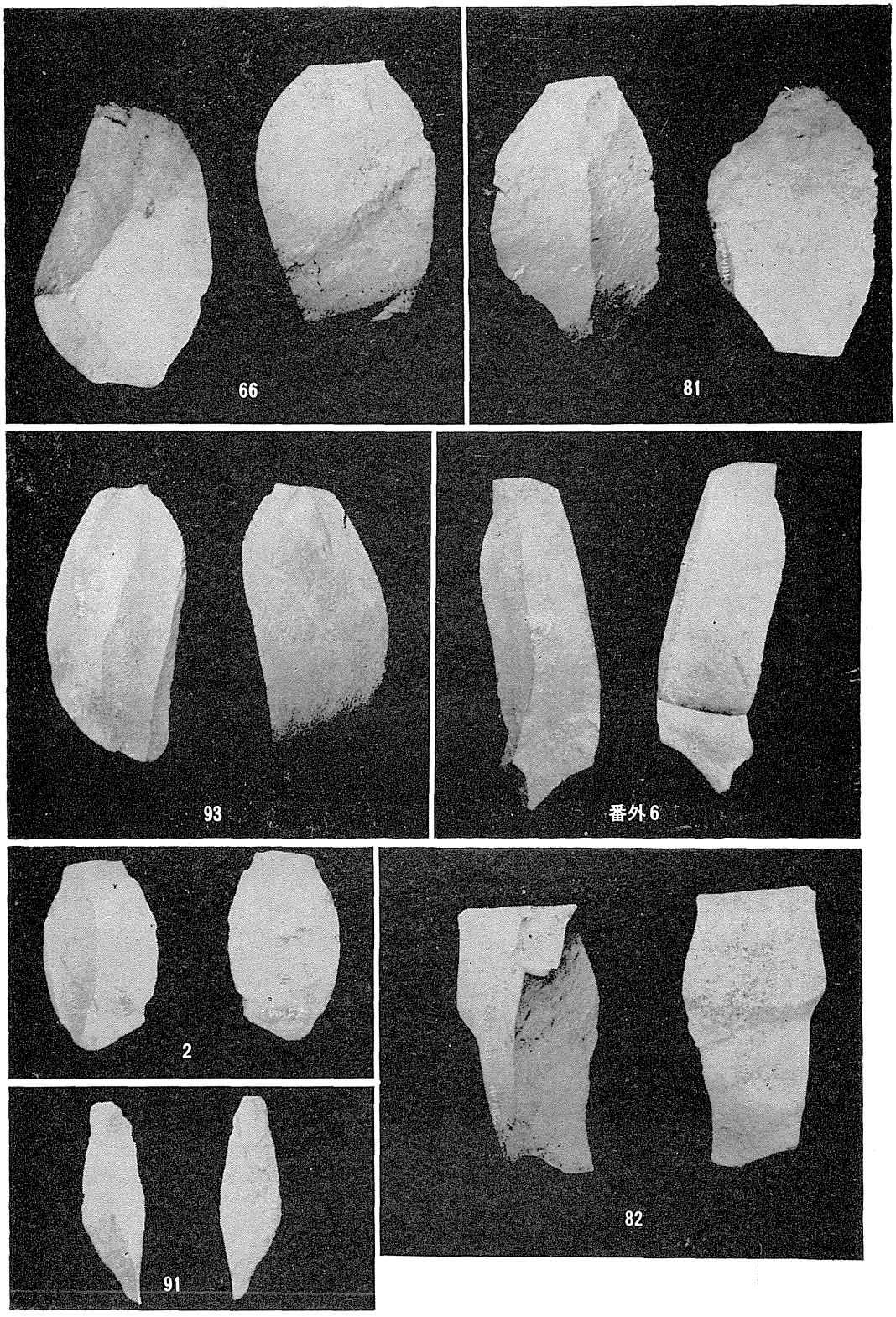
先土器時代遺物（珪質流紋岩①）



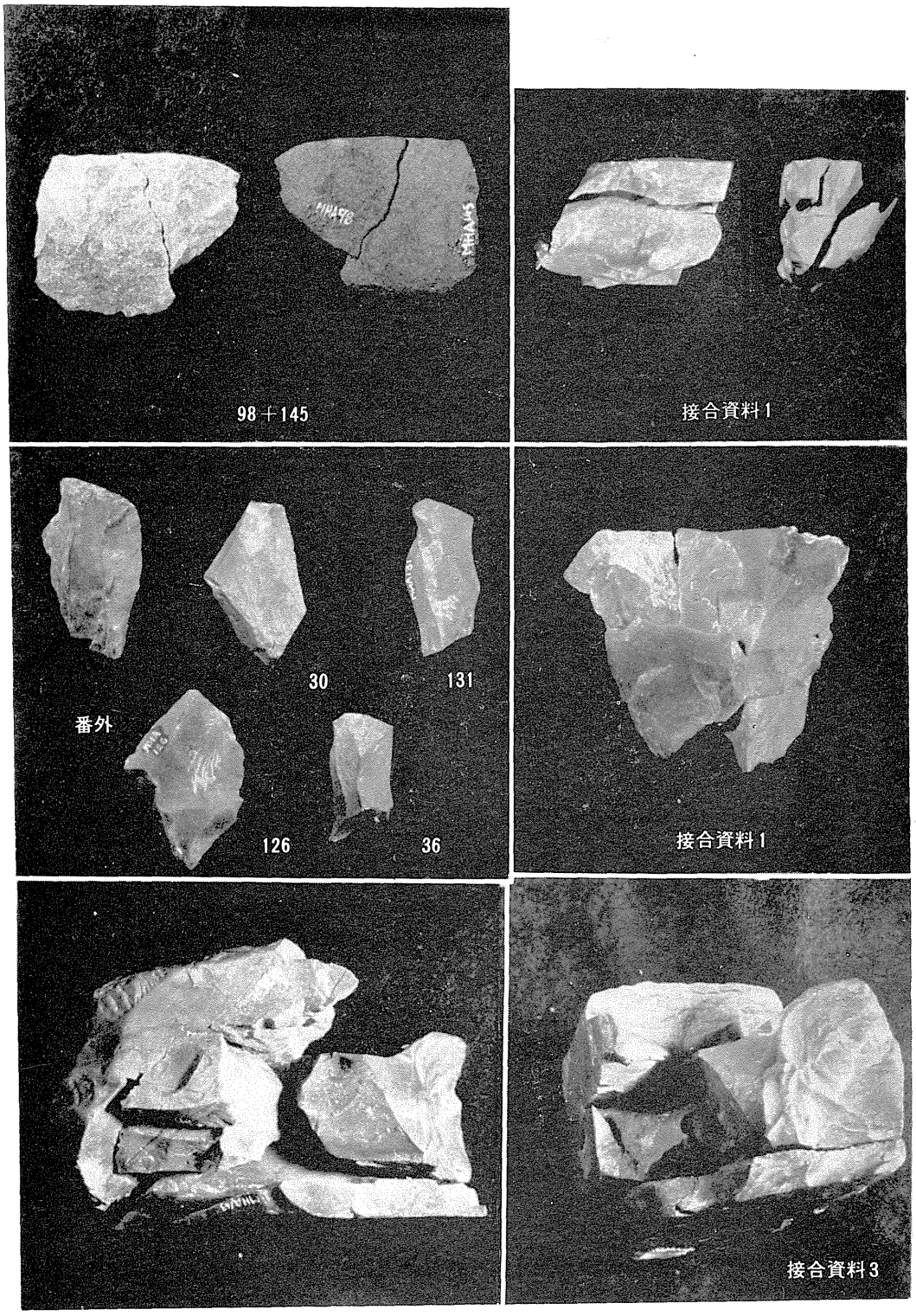
先土器時代遺物（珪質流紋岩①）



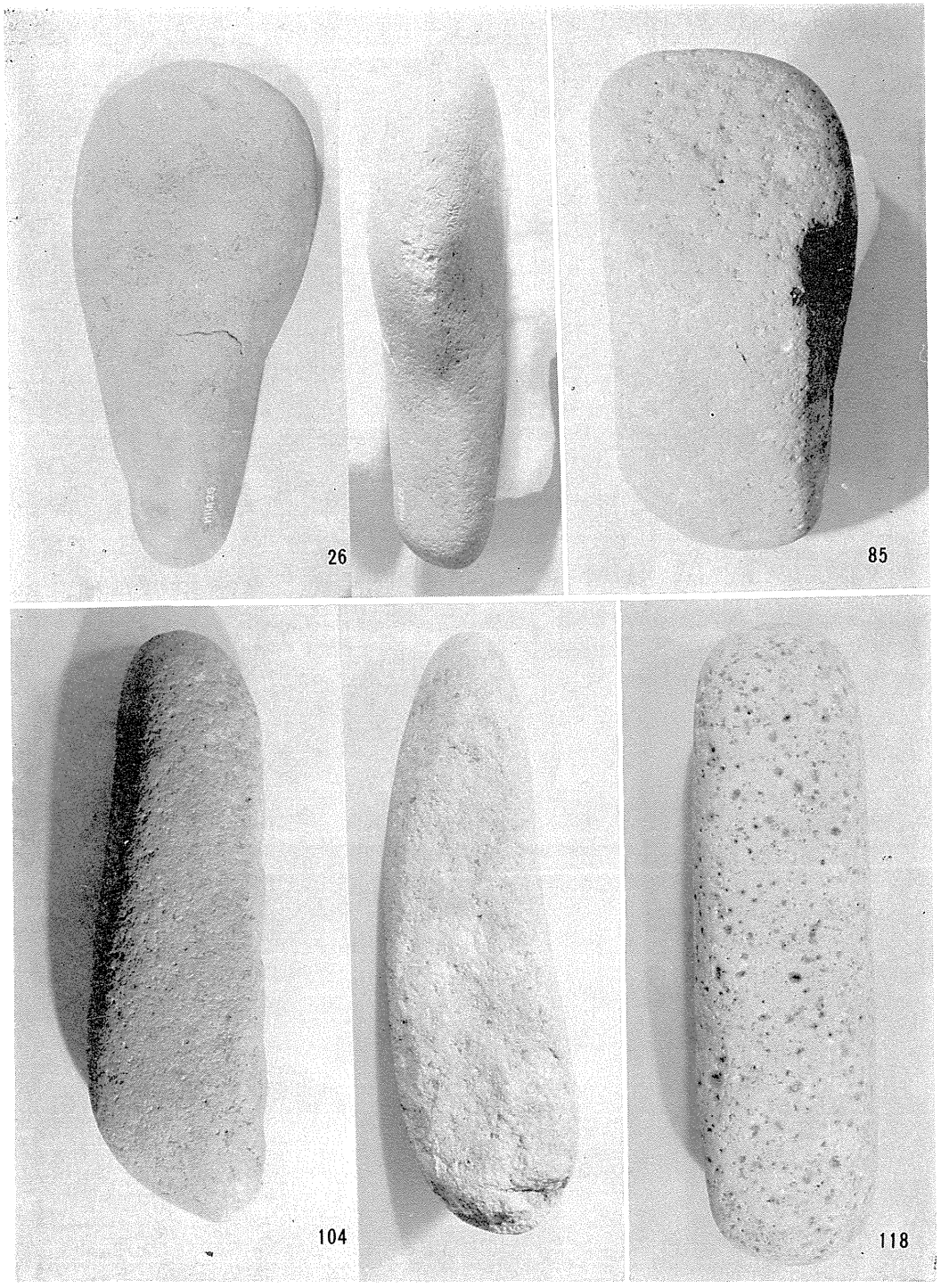
先土器時代遺物（上，珪質流紋岩①，下同②）



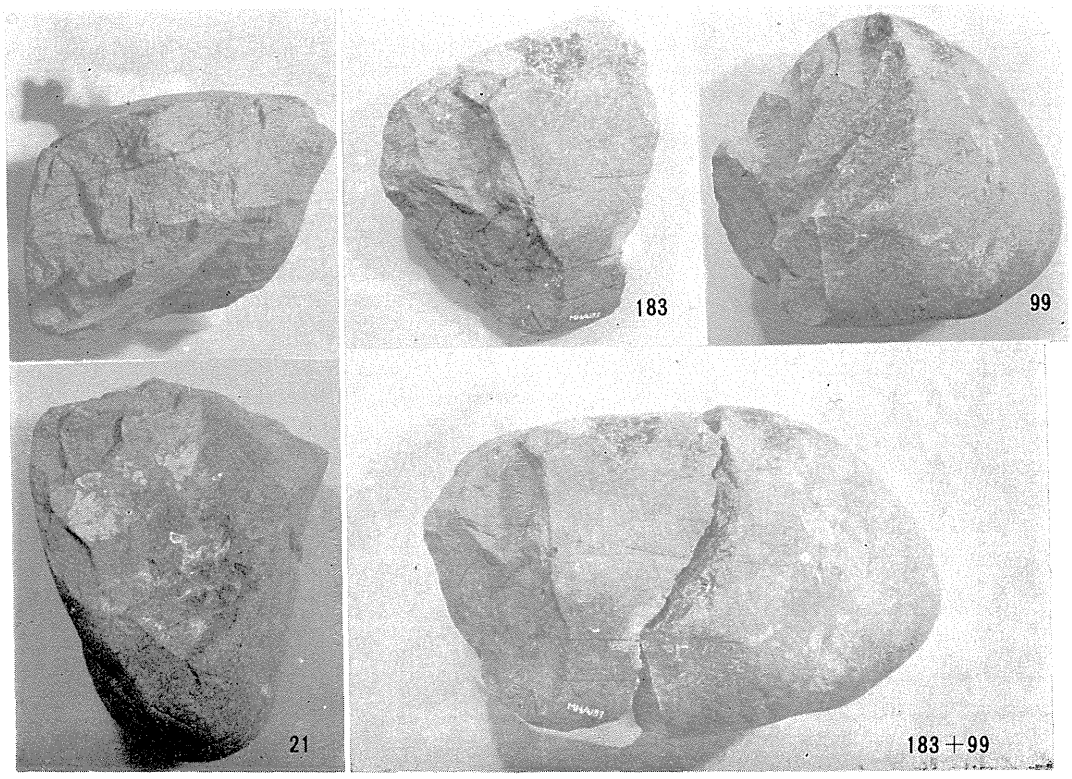
先土器時代遺物（上，珪質流紋岩②，下珪板岩）



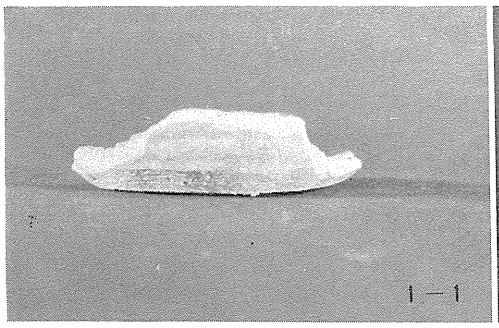
先土器時代遺物（上左硬砂岩，他チャート）

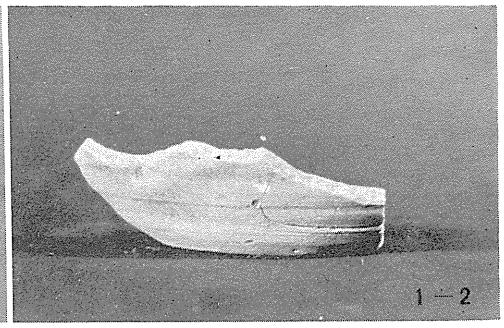


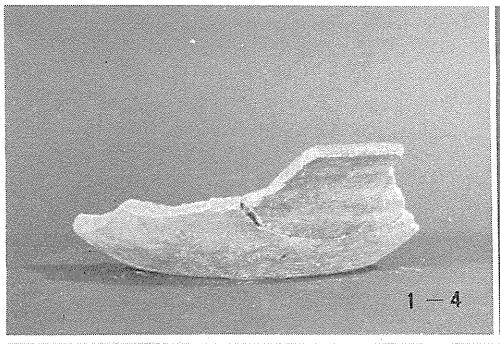
先土器時代遺物（敲石，磨石）

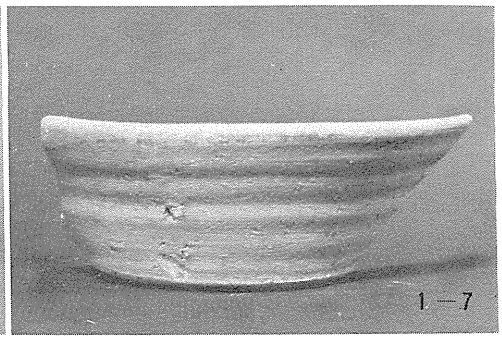


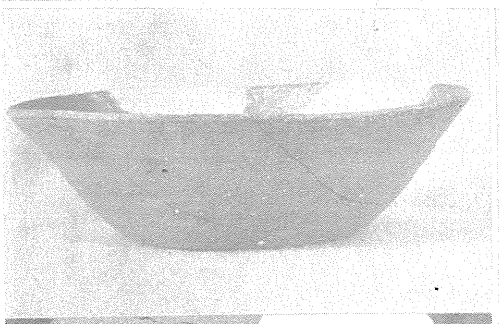
先土器時代遺物（礫器）

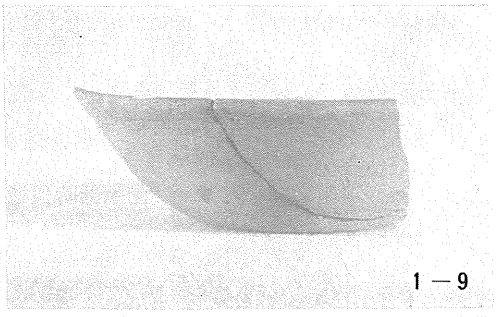


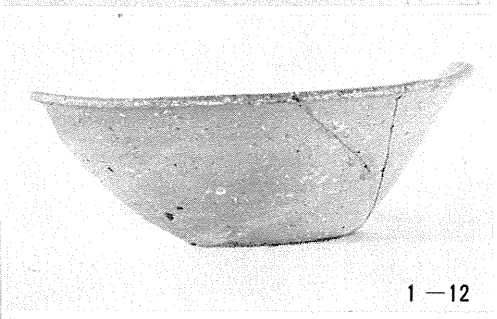


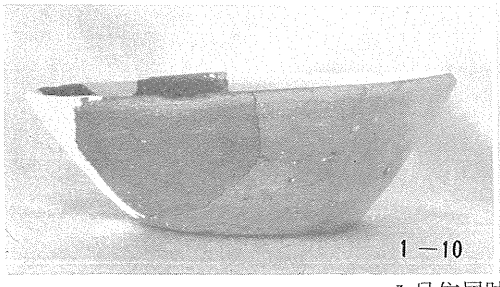


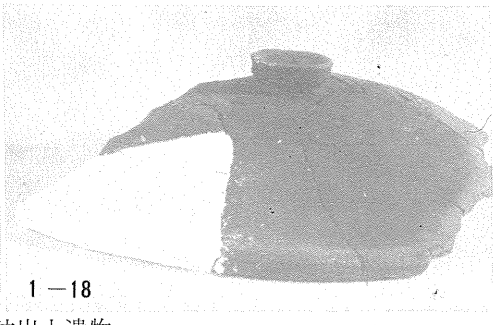




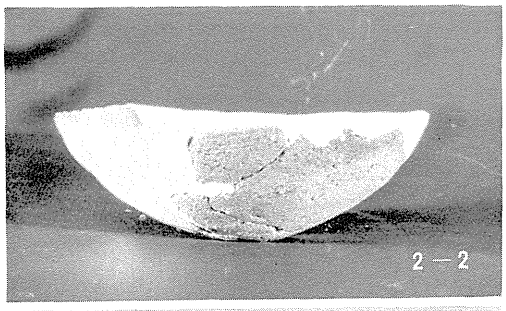


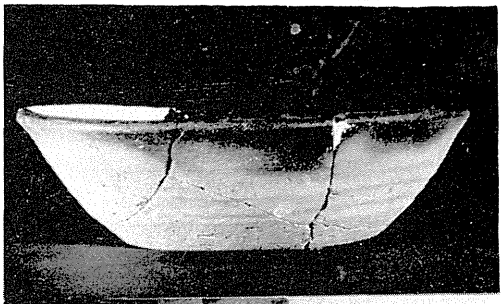


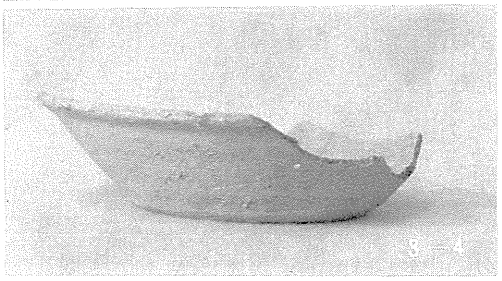


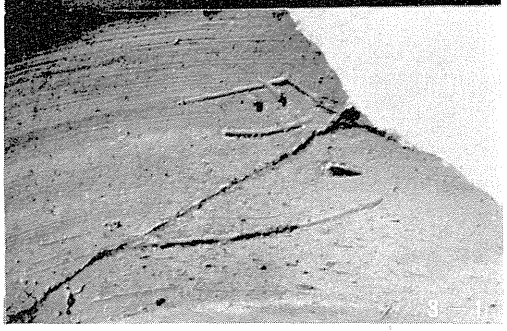


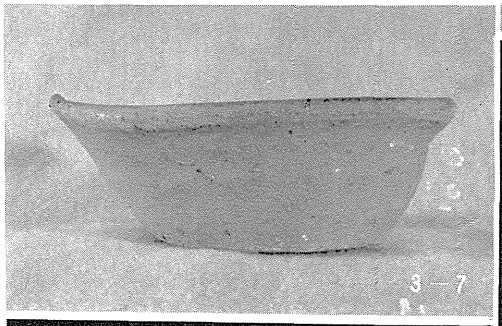
1号住居跡出土遺物

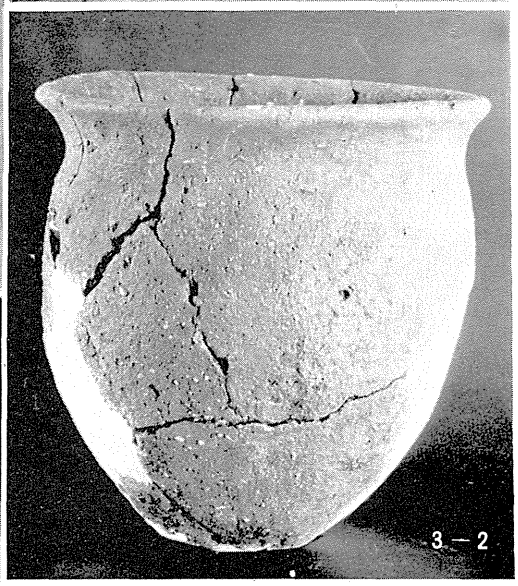


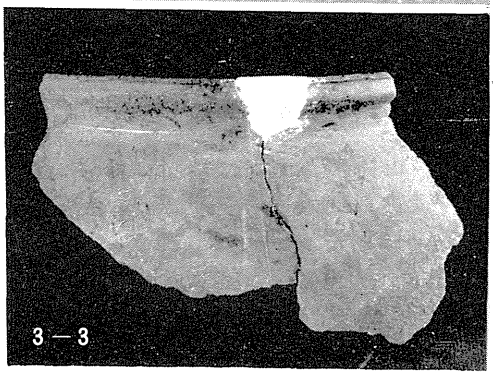












2号，3号，住居跡出土遺物

星の宮B遺跡

例　言

1，本書は町道北中一星の宮線道路改良工事（益子町星の宮地区）に伴う星の宮B遺跡発掘調査報告書である。

2，発掘調査及び報告書作成に係る費用は，県土木部の負担による。発掘調査・報告書作成は県教育委員会が主体となり実施した。

3，遺物整理・図面作成・本文執筆，本書の編集は，川原由典・初山孝行の協力を得て寺内敏郎が行なった。

4，発掘調査にあたっては益子町教育委員会・地元の方々に多大な協力を得た。記して謝意を表したい。

本文目次

Ⅰ　発掘調査の経緯と経過…… 139
　1　調査に至る経緯…… 139
　2　調査の経過…… 139
　　(1)調査の方法…… 139
　　(2)調査日誌抄…… 140
Ⅱ　遺跡の立地及び層序…… 141
　1　遺跡の立地…… 141
　2　遺跡の層序…… 142
Ⅲ　検出された遺構と遺物…… 142
Ⅳ　まとめ…… 144

挿図目次

図―1　グリッド配置図・Ⅰ区平面図…… 141
図―2　Ⅰ区より検出された土坑実測図…… 143
図―3　凹石実測図…… 144
図―4　石鏃実測図…… 144

図版目次

図版1　遺跡遠景…… 145
図版2　遺跡近景（Ⅱ区）…… 145
図版3　Ⅰ区より検出された土坑…… 146

Ⅰ　発掘調査の経緯と経過

1　調査に至る経緯

栃木県土木部工事施行に係る道路建設予定地内の埋蔵文化財所在調査は昭和52年度より土木部の協力を得て本格的に実施を行い多数の遺跡の所在が明らかになった。このうち町道北中―星の宮線の道路改良工事にともなっては益子町星の宮地区に星の宮A遺跡（土師器・須恵器片散布），星の宮B遺跡（土師器片散布）の2遺跡が存在しており，上記2遺跡を含めた全県下での路線内で発見された遺跡の取り扱いについて,県土木部，当委員会での協議事項となった。このうち星の宮A遺跡については昭和54年度に発掘調査が実施され，多大な成果をおさめることができた。その後星の宮B遺跡の発掘調査の実施について，土木部，真岡土木事務所より当委員会に協議があった。この協議結果により当委員会では昭和55年度に発掘調査を実施することで合意に達した。これにより昭和54年3月28日付け，道建第253号において土木部長より教育委員会教育長あて埋蔵文化財有無の調査依頼がなされた。その中には星の宮B遺跡も含まれておりこれを受けて昭和54年3月31日付け，文化第88号にて回答をなした。

翌55年度になり，昭和55年4月28日付け道建第20号により埋蔵文化財の発掘調査についての依頼がなされた。これより星の宮B遺跡の発掘調査が具体的に動き出し，他に予定している発掘調査との日程調整を計った結果，昭和55年10月下旬より実施する方向で諸準備を進め，昭和55年10月13日付け文化第306号で星の宮B遺跡の発掘調査を10月27日から昭和56年1月17日の期間をもって実施する旨の回答となった。

しかし，星の宮B遺跡の調査は，遺構・遺物の出土が少ないこともあり，当初予定した調査最終日をまたずに12月17日をもって調査を終了した。

なお調査体制は以下のとおりである。

調査主体者	栃木県教育委員会
調査担当者	川原由典（文化課）
	初山孝行（　〃　）
	寺内敏朗（　〃　）

2　調査の経過

(1)　調査の方法

今回の調査は，町道拡幅に伴う記録保存調査である。従来より利用されていた道路を整備して広げるため，新設部分以外は幅4m以上の調査が困難であった。よって調査対象地域は，幅が狭く，東西に細長い〝うなぎの寝床〟的な形状である。この調査対象地域の丁度中間地点付近には，小さな谷が北より入り込んでいて，その谷の西側一帯は未買収地を含んでいる。よってこの小さな谷の入り込む東側山林地域をⅠ区，小さな谷の西側から次の谷へ台地が傾斜する地域をⅡ区と設定した。

調査方法は，Ⅰ区，Ⅱ区ともグリッド方式を採用し，Ⅰ区の場合排土の問題から千鳥格子に調査を行い，遺構や遺物のかかる箇所は広げる方法を取った。

グリッドの基準線は，道路拡幅用のセンター杭に準拠した。その番号にはセンター杭番号をそのまま使用した。各センター杭間は20*m*あり，これを4*m*ずつ区切った。よって基本的に4×4*m*のグリッドを2個並列させ，各センター杭間に5個のグリッドで1ブロックを形成する。

各グリッドの表示は，センター杭の番号が東から西へとられているため，南東隅の交点に拠った。また基準線に平行する方向をアルファベットで表わし，南側をA，北側をBと表示した。

Ⅰ区は現道部分があるため，幅4*m*以上の調査は不可能である。よって2×4*m*の変則グリッドを設定した。

Ⅱ区は新設部分であるため，4×4*m*グリッドで調査を実施した。

(2) 調査日誌抄

10月27日～29日

関係機関へ事前連絡。現場で調査の打ち合わせ。プレハブ事務所設置。調査器材搬入。

10月30日～11月1日

作業員に諸注意を行い。作業に入る。Ⅰ区雑木林内の雑草除去及び焼却。

11月4日～8日

Ⅰ区グリッド設定を行う。グリッド設定後粗掘に入り，78—5Aから74—2Aグリッドまで粗掘を行い，74—5Bまで完掘終了。グリッドの土層状態はⅠ層・表土10㎝前後，Ⅱ層・黒色土50～60㎝，パミス微量混入，粘性弱くパサパサしている。Ⅲ層・黄褐色土10～15㎝パミスを混入，深さは一定していない。ローム漸移層である。Ⅳ層・ローム，パミスを混入，堅くしまっている。77—3Aグリッド付近に落ち込み確認。

11月10日～15日

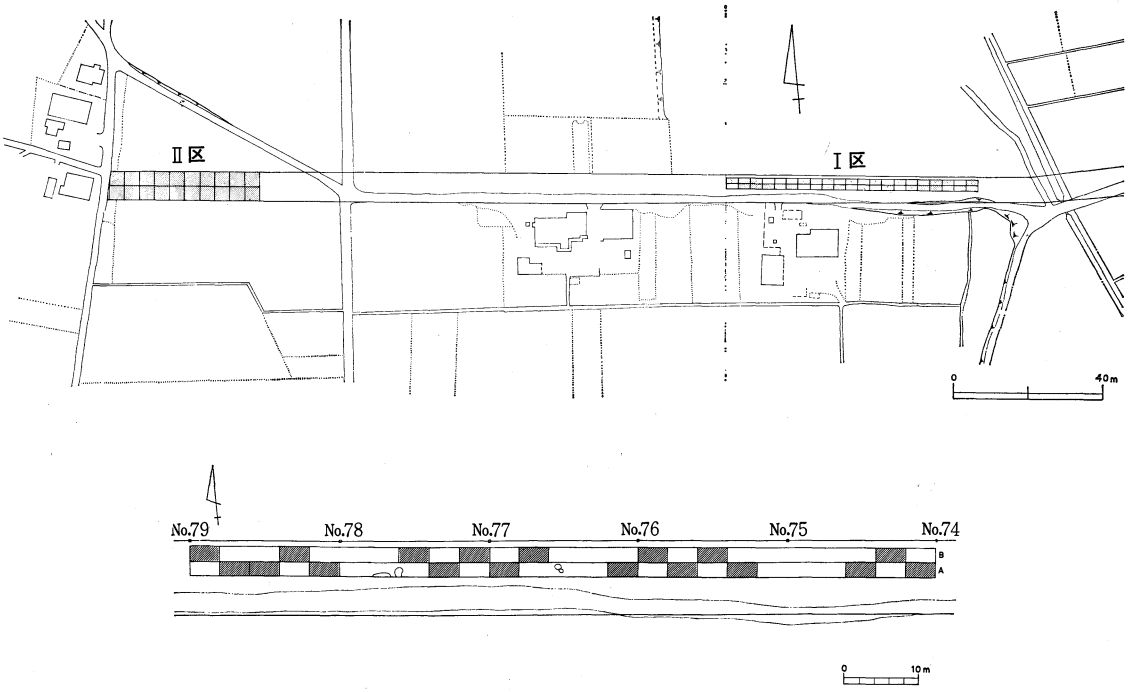
74から78—5Bグリッド完掘，遺構のかかりそうな77—4A，76—3Aグリッド及びローム下調査のために，77—3A・3B・4A・4B，76—2A・3B・4A・4B，74—4A・4B・5A・5B，75—1A・1Bグリッドを取りあえずローム面まで掘り下げ予定。

11月17日～22日

76—3Aグリッドより黒色の落ち込みを2ケ所確認。土坑№1，№2と呼称する。ローム下調査。76—2A～76—3A中央セクション・76—3A土坑№1，№2セクション・77—5A～77—5B西壁セクション・77—4A～77—5A北壁セクション・76—2A～76—2B東壁セクション・74—4A～75—1A北壁セクション・74—5A～74—5B西壁セクションの実測を行う。写真撮影完了。

11月25日～28日

Ⅱ区畑内の調査に入る。88—2A・3B・4A・5B，87—1A・2B・3A・4B・5A，88—1B・2A・3B・4A・5Bグリッド完掘。Ⅰ区内において確認された土坑の実測図及



図—1　上　グリッド配置図（スクリントーン調査グリッド）

下　Ⅰ区平面図（スクリントーン—未調査グリッド）

びエレベーション図作成。86—2A～88—5A通し中央セクション図・87—5A西壁セクション図作成。遺構・遺物なし。

12月1日～3日

86—2B・3A・4B・5A，87—2A・3B・4A・5B，88—1A・2B・3A・4B・5Aグリッド完掘。遺構・遺物なし。87—1A東壁セクション図・87—5B西壁セクション図作成。

12月4日～5日

Ⅱ区調査グリッドの埋めもどしを行う。

12月8日～11日

Ⅰ区の雑木林内・調査グリッドの埋めもどし及び整地作業を行う。

12月17日

器材整理及び器材撤収。本日にて調査終了。

Ⅱ　遺跡の立地及び層序

1　遺跡の立地

本遺跡は，県道塙・上根線の星の宮神社から南へ約500mの十字路より，西へ約2kmほど入たっ付近の台地に所在し，標高82～84mを算する。この十字路を東へ行くと，昭和54年調査の星の宮A遺跡に至る。

本遺跡の所在する台地は宝木台地面に比定され，小貝川とその支流によって形成された台地の一つである。

調査対象地域のほぼ中間地点には，北側より小さな谷が入り込み，調査区の雑木林は北東部に傾斜して水田面に至る。この水田面は古い時代の開析谷と考えられ，この谷の東側には丘陵状台地が南北に伸びている。そしてこの台地の小貝川に面する東側縁辺部には，星の宮A遺跡が立地している。

本遺跡の立地する台地の西側は，調査対象地域付近が最もゆるやかに傾斜している。そしてこの付近から北西へ向って台地の続きが見られる。なお，調査対象区域のすぐ西側は真岡市清水地内である。

2　遺跡の層序

【Ⅰ　区】

Ⅰ区の全域は雑木林であり，人為的な耕作等の撹乱は受けていない。しかし，その反面雑木の根による撹乱が見受けられる。基本層序を観察すると腐食土は新旧2層に区別でき，表土（Ⅰ層）が10cm，次は黒色土層（Ⅱ層）で約40cm，七本桜・今市パミス粒を若干含んでいる。遺物はⅡ層下部より検出され，いわゆる遺物包含層といえよう。Ⅳ層は黄褐色土層（ローム漸移層）で約10～15cm。七本桜・今市パミス粒を多量に含んでいる。厚さは一定でなく，柔らかい土質である。田原ローム層上部の七本桜・今市パミスの層に対比される。Ⅳ層はローム層で色調は黄褐色を帯び，比較的固い。ローム層を20～30cm掘り下げたが，先土器時代の遺物は検出されなかった。

【Ⅱ　区】

Ⅱ区の全域は畑であり，耕作による撹乱が著しい。しかし基本的にはⅠ区と同様である。Ⅰ区との違いは，Ⅰ層（耕作土）の深さが約20cm，所により約40cmほどに達しているぐらいのものである。またⅡ区においては遺物の検出が見られず，調査区周辺の畑からも遺物は表採できなかった。

Ⅲ　検出された遺構と遺物

発掘調査は，遺跡の中心部から外れていたものと思われる。住居址等の遺構は皆無であり，

出土遺物も非常に少量であった。

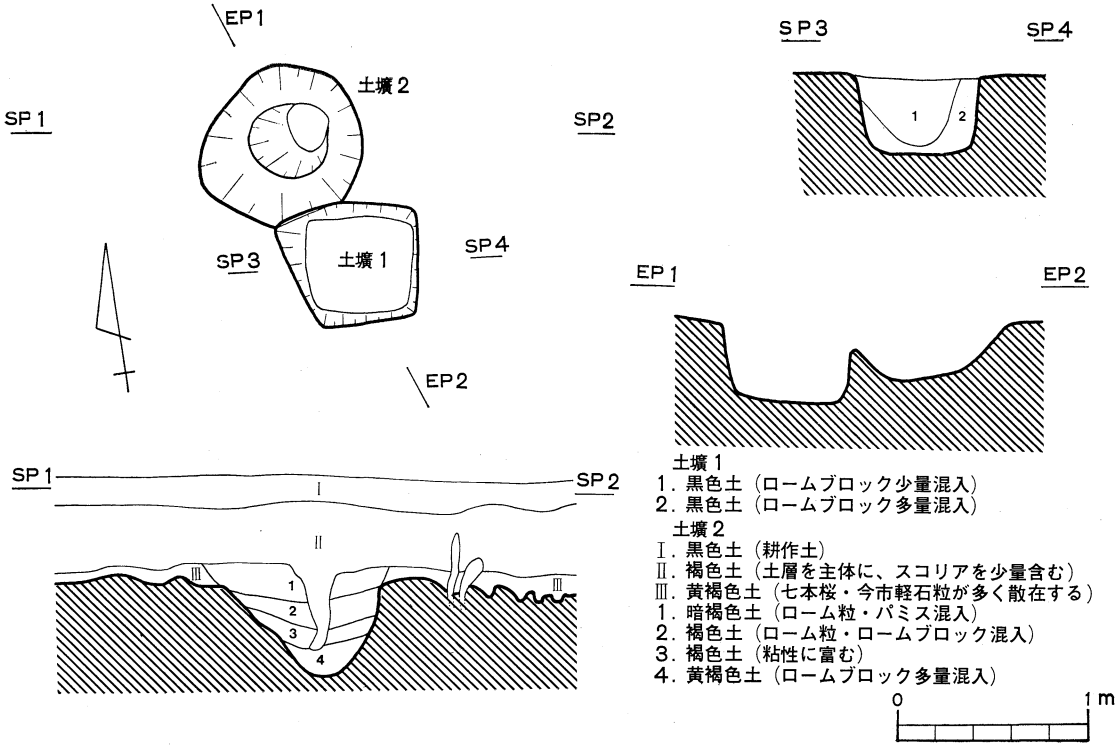
Ⅱ区においては，遺構・遺物の検出は見られない。よって以下の遺構・遺物はⅠ区において検出されたものである。

土坑

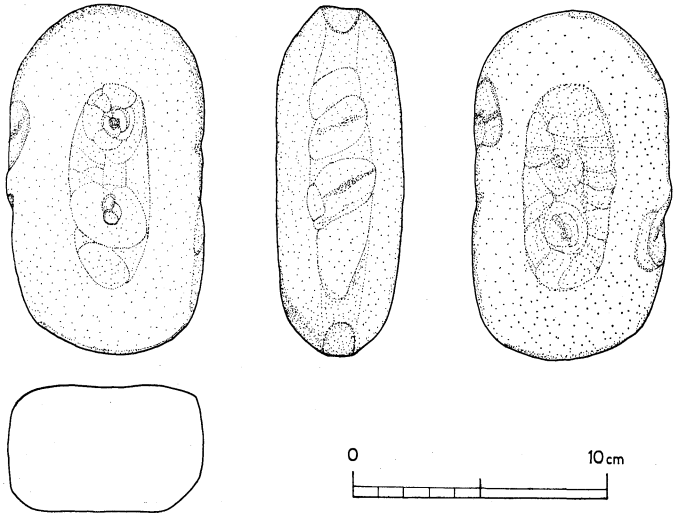
4ケ所検出した。77—3A，77—4Aグリッドの土坑は，断面の観察によって，落ち込み面がⅡ層上面に見られ，また覆土も非常にふかふかしているところから，新しい時代の所産と考えられる。遺物は土坑中からは一片も出土していない。

76—3Aグリッドの土坑№.1は一辺60㎝の方形を呈し，深さは確認面より約40㎝を測る。出土遺物は，土坑上面から土師器口縁部破片が一片検出されている。

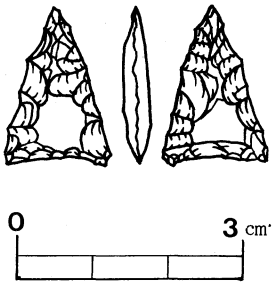
76—3Aグリッドの土坑№.2は，直径70㎝の円形で，深さは確認面より約30㎝を測る。この土坑は幸いにも，グリッドのベルト断面に北側半分がかかっていたため，ある程度の掘り込み位置が観察可能であった。土層断面によると，土坑の確認面より約14〜15㎝上から掘り込まれていることが観察できた。実際にはもう少し上から掘り込まれているものと思われる。ほぼⅡ



図—2　Ⅰ区より検出された土坑実測図



図—3　凹石実測図



図—4　石鏃実測図

層下部に当時の生活面が考えられ，その頃土坑がつくられたものと考えるのが妥当であろう。

土坑内よりの出土遺物は皆無であった。

遺　物

遺構内出土の遺物は，前述の土坑No.1内の土師器片一片のみである。

その他の出土遺物は，Ⅱ層下部からⅣ層上面にかけて，縄文土器片2，石鏃，凹石各1個のみである。

凹石（図—3）

安山岩製。4面に凹痕を有し磨石としても使用された痕跡が見受けられる。

石鏃（図—4）

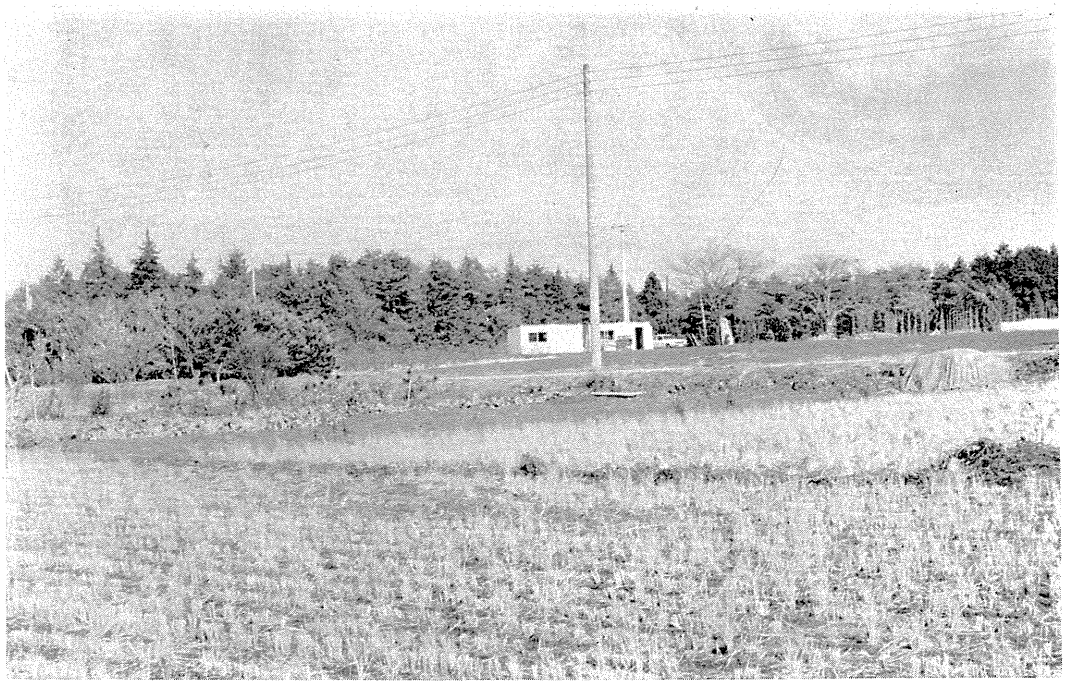
チャート質。無茎

Ⅳ　まとめ

今回の調査では，道路予定部分のみが対象であったため，遺跡の全容を知ることができなかたっ。調査地域Ⅰ区において検出された遺構は，土坑4基である。また，出土遺物は土器片など数点のみである。いずれも土坑等の遺構に伴うものではない。調査地域Ⅱ区では，遺構・遺物は全く検出されなかった。以上のことから，調査地区は遺跡の中心部よりはずれた位置であろうと思われる。このことは，遺跡の破壊を最小限にくい止められた点で幸いであった。反面，量跡の性格についてはついに把えられなかった。

本遺跡出土の遺物は，Ⅱ層下部より全てが出土している。また，縄文土器片・石鏃・凹石等全て縄文時代に属するものである。これらから，Ⅱ層下部は縄文時代の包含層と考えられる。

今回検出された遺構は，総計土坑4基である。そのうち2基は，覆土にロームブロックを多く含むこと，覆土がやわらかくふかふかしていることなどから，非常に新しい時代のものと考えられる。土坑1には，覆土に土師器片を一片含んでいたが，土坑に伴う遺物とは考えられない。土坑2は，出土遺物は皆無であった。本土坑の掘り込まれたⅡ層下部付近は，縄文時代の包含層と思われる。従って，これは縄文時代の遺構であろうと思う。



図版１　星の宮Ｂ遺跡遠景

図版２　星の宮Ｂ遺跡近景（Ⅱ区）

図版３　Ｉ区より検出された土坑

栃木県埋蔵文化財調査報告書第40集
国道等道路改良事業地内遺跡発掘調査報告書
昭昭56年３月31日印刷
昭和56年３月31日発行
発行者　栃木県宇都宮市塙田１－１－20
栃木県教育委員会　文化課
印　刷　新日本印刷㈱